

ポーンギルドの付与術師

キョウさん。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エンチャント、それは武器や防具、アイテムに能力を付与することである。

付与術師、エンチャンター、それはそれらを行える者である。

知らずに迷い込んだ世界で、かつてプレイしていたネットゲーム準拠の規格外の付与能力を持ったオルカは自らの食い扶持、あとちよつと遊びたい欲をもとに強力な装備を造り、尖らせ、そして気がつけば幾多の人々を巻き込んでいく。自らが規格外であることに悩まされつつも、ときにぞんぶんに力を振るい、ときに自らの力に反逆され。

そうしてたどり着く道、彼が望んだことは――

「ウグーーーーー」

呻けオルカ、がんばれオルカ、まけるんじやない。

★はクソ挿絵あります（・ω・）

小説家になろうにも投稿しています
リハビリ作です

目次

プロローグ〜たすけて〜 | 1

1話〜メイリオの短剣〜オルカはオルカ

〜★〜 | 12

2話〜メイリオの短剣〜ポーンギルド〜

3話〜メイリオの短剣〜付与術師〜 | 23

36

4話〜メイリオの短剣〜くずの集まり〜

46

5話〜メイリオの短剣〜銀の☆3杖〜

57

6話〜メイリオの短剣〜D o t d o

164

i t s | 79

7話〜メイリオの短剣〜トロールとろと

ろ〜 | 92

8話〜メイリオの短剣〜w i l l s ミス

〜 | 106

9話〜メイリオの短剣〜女王の王冠〜

119

10話〜メイリオの短剣〜ポケットの中

〜 | 137

11話〜メイリオの短剣〜魔王剣〜

152

12話〜メイリオの短剣〜チュケケ〜

164

1 3 話―メイリオの短剣くマジカルミラ

クルく ――― 177

1 4 話―メイリオの短剣く夕暮れの写真

は苦いく ――― 193

プロローグくたすけてく

『何よりも前に、まず軍備を整えなさい』

ニッコロ・マキヤベリ

自分は、礼儀というものは武装してこそ通るものだと思っている。

小さな、まさにマジカルチックな工房といった場所で目の前の剣をいじくりまわしながら、自分がかつて自分がかつてもかたやりこんでいたとあるネットゲームのことを思い出していた。タイトルはマイナーゲームに分類されるものであつたそれは10年以上の月日を経て古くなれど、愛着をもつた一部の熱心なユーザーによつて維持されていたものだ。

そしてそのゲームのスキルに限りなく近い、“自分の能力”も。

「懐かしいなあ」

ふとつぶやき、目の前の“魔力のこもった剣”をしつとりと見つめる。

カンストさせ、しかしマスタリーしたのはただひとつの付与術師、時間や資金をつぎこんで無数のアイテムを手にしてもそれは虚構であり、しかしながらその虚構を集めることは自分の生き甲斐だった。集めたアイテムは無数、数知れず、とはいえゲームで人に覚えられるほどではなかったと記憶に残している。

明日はアプデ日だ、と思うと眠りの前のひとときも大変に心が跳ね、まぶたを閉じるのが気づけば明け方だったのだろうか、空は明るくあしまった、起きた瞬間遅刻を確信したとはこの瞬間だろうか。問題点としてあったのは周囲はレンガ造りの建造物ばかりで住み慣れた白い天井ではなく、おまけに下にしかれていたのも砂利道で飛び込めば優しく受け止めてくれる母のようなおふとんではない。

母に先立たれたかのような感情を胸に砂利を触り、それが実物そのものの感触とともに指先を白く汚したのを見て、身体にまとった衣服に染み付いた寝汗の感触もあわせていまいるこの場所が、ほかでもない現実なんだろうと考えた。というか直感した。

「ヒエーツ……」

口癖だ、これで心を落ち着かせるのだ。

ふと気がつけば自らの着ているこのやけに装飾のついた割に茶色の、地味な色合いの衣服は明日のアプデを待っていたネットゲームの自キャラが着ていたものではないか、なんということか寝てるあいだにコスプレまでさせられてしまったのだろうか、はてそ

れにしたってこの場所に心当たりがない。どこかの袋小路ということにはわかるのだが近所にレンガ造りの場所というところとショッピングモールの隅の喫煙所の壁くらいしか思い当たらず、なぜ自分がここにいるのかというのかにまた疑問符を浮かべることになった。

「しようもない、歩いてみなきゃだ」

しようもない。

五・七・五。

開けたとおりに出ればどんな場所か、せめて地名くらいはわかるだろう。おまわりさんには笑われるだろうが事情を話せばキツと真面目な顔をしてとりあつてくれるはずだ。我被誘拐者ぞ、我事件被害者ぞ。

そうして歩いていたらああ、すいませんそこを通してくれませんか。大柄な男と小柄な取り巻き一人が道をふさぐように現れたではないか。ここは人類世紀末、もはや我らに救いはないのか……いや、もしかすると心配してくれて声をかけにきてくれたお兄さんかもしれない。

だがおつと失礼と横を抜けようとしてもとおせんぼ、反対側も通せんぼで埒が明かない。とはいえ自分、臆病である、ヒエーツと言いつつ一步後ろに下がれば一步踏み込まれ、それが続けばもう一步、気がつけば壁際に追い込まれてしまっていた。

うう、すみません持ち合わせはないんです。

「だったらその服よこせよ！貴族のぼっちゃんのなら金になる」

「そうだそうだ！アニキは賭けに負けて腹が立つてるから早くしろ！」

「それを言うなよポンド！」

ンマー貴族なんて古風な煽り文句を使うなんて珍しいチンピラなこと、と心にしまいつつ、しかしちよつと風が肌寒い、勘弁してくれないですかと一礼する、そしたら選択ミス、大柄な男は腕を軽くふりかぶり自分を殴りつけたではないか。

「やめ、やめてください……」

「だったらはや脱ぎ!!」

痛い……布の服では防御力はこんなものか、というか実際のゲーム中におけるこの服、*「付与術師のリユミエール」*だったか、それも確かエンチャント能力特化で防御力はほぼなかったなと思い返しつつ、痛みに震える肩をおさえる。そしたらもう一発今度は反対側の肩を殴られるものだからたまらず自分は壁際に追い詰められて、たちまち尻もちをついて小石の転がる地面に座り込んでしまった。

痛い、なきそう、ないてる。

「どこのぼっちゃんだか知らんけどよ、スラムの横道に入るなって教わらなかったのか？ああ？」

「そーだぞ！アニキの言う通り脱げよ金持ちの！」

「一般人だし……」

「あ、あ？」

「ヒーツ」

脅迫めいた声に自分の心も身体も勝脱も境界寸前だ、どうにかならないか、のぞき見に着的いる貧相な身なりの子供たちに助けてくださいと目線を送ったら無視されて逃げられた。神は死んだのだ、神はいなかった。

では何か身近にはなにかないだろうか——小石だ、小石が見える。目潰しにでもできるだろうか？見られている状況で?? ……されど自分、臆病である、わらにもすがる思いというものはあるのだ。

とつさに小石を手に取り、願いでも込めるように握った瞬間。

——異変が訪れた。

「おや」

「小石なんて今更持つても……!」

握った小石に、見慣れた画面が現れる。

ああ、毎日楽しみにプレイしていたネットゲームで勝手見知ったエンチャント画面ではないか。

システムは単純であり、あらゆるアイテムには「スロット」がある、エンチャントを付与できる枠というわけだ。この小石はスロット2であるわけだが、そこにプルダウンメニューから選んだ付与を挿し込むことができる、効果はまちまちで攻撃力をほんの5%増しにするものから、絶対に壊れない属性を与えることまで可能だ。

これは死の前の幻覚か、いやはやそれなら付き従ってみるのも悪くない。

エンチャントは完璧に覚えた専売特許というもの、自分は慣れた手付きでプルダウンメニューを操作しすぎさまふたつのエンチャントを取り付ける。武器によって取り付けられる付与は異なるゆえ、今回取り付けたのは遠距離武器に該当するものとなった、どうやらこの小石、「遠距離武器」の特性を持つらしい。

その瞬間、小石が黄色く、そして黒く、それぞれに対応した色に一瞬輝いた。それを見たこの大男と連れの小さいのは、「魔法か!」とまたふあんたじつくなことを申し上げたと思うと打って変わって早急さつきゆうに自分を止めようとかみかかってくる。だから自分がその大男に向かい小石を放り投げると――

「はずれエ!!残念つ!!!」

「バーカ!」

――見事に外れた。

この自分、運動能力はからつきしである、とくに球技が苦手だ。

体力テストのボール投げは下から数えればまっさきに名が上がったし、ストラックアウトは届かない。いかんせんコントロールもパワーも足りないのである。それを今更思い出すとはなんたる失態と考えるがしかし、自分の目に映るのはそれが覆される瞬間であった。

天をめぐけて放たれた小石はぐんぐんと重力に逆らい進むと、隣にならびたつ家の二階の窓あたりまで進んで重力に従い落ちてくる、だが違うのはその軌道だ。急激に進行方向を変えた小石は重力以上に加速し落下し、そして大男の脳天を捉えるのだ。

「いてッ」

「アッ」

「……？」

あからさまに自分に当たらない軌道をとった小石が自分の頭を小突いたのが気に入らなかったのだろう、彼は後ろを向いてまた戻ってきたギャラリーが首を振るのを見て誰かが石を投げたんじやないことを確認すると、またこちらを振り向こうとするのだ。

だが――

「あつ、れッ」

戻そうとした首は戻らない。

なるほど、と痛む肩をおさえながら自分は思う、まるでゲーム世界のようなだがたしか

に、少なくとも自分の仕掛けた付与^{エンチャント}効果が発動していると。 “的中の” は文字通り投擲武器の命中率を＋100%させる付与であり、そして今もうひとつの付与が発動しているのを目にして自分はこの世界の法則が目覚ます前にいた場所と異なっていることを確信した。

「……アニキ？アニキ!!」

「ポンド、ポンド!!俺はいつたい……!?!」

「あわわわわ……」

ふたつめの効果は “硬化の”。

さしずめ “硬化の小石” となっているのだろう、文字通り命中対象に行動不能状態を与える付与だが欠点として、硬化状態の相手は尋常でなく防御力が向上するという諸刃の剣である。相手のエンチャントや持続魔法、召喚は継続するスキルも射程内なら使えるので逃げのための付与だ。

大男は首を後ろにまわしたまま口だけを動かし、完全に身動きがとれなくなっていた。

取り巻きの小さいのがゆさぶつても解ける気配がなく、しかし、自分が立ち上がるとその視線はこつちを見た。

「お前、魔法使いだったのか!!」

「使えればいいなどは常々……」

「使えてんじやん!!」

突つ込まれるのに視線をそらしつつ、自分はそろそろと固まったまま呪詛を吐く大男の脇を抜けてこつそりと逃げるのだ。三十六計逃げるに如かず、行動不能の効果時間はそんなに長くなかったはずだし逃げるしかない。長距離走の苦手なこの身だが少しばかり距離を引き離して隠れるくらいはできるだろう。

走つて、転んで、もっかい走つて。

ギャラリーが見えなくなったところまで行つたところでどつと疲れが押し寄せてくる。

なんとという日だ、暴力とは無縁の生活だったから痛む肩がなお痛い。

天を見上げれば太陽、地を見れば——四本脚のニワトリが歩いている。

ふと周りを見渡せば耳長の少女やら、角の生えたおじさんまでもが跋扈しているではないか。一様にこちらを見ているものだからいたたまれなくて、とりあえずとまた歩き出す。おつちゃん肉まんひとつ、悪い金はない、ダメ？そつかあ……。

さてはてどうする、まるで世界が変わつたようだ、実際そうなんだろう。

考えるのはまたあの男が追つてこないかと、どこへ行けばいいのかと。

——
明日のアップデートに間に合うか、だった。

1話―メイリオの短剣くオルカはオルカく★

「やすいよ……ヤスイヨ……」

「ママみてかないのー?」

「しっ、落ちぶれ貴族よ財産を切り売りしてるのよ」

この世界に来て、まっさきに行ったことは金策だった。というより多くのネットゲームにおいて真っ先にやることはレベル上げか金策だし間違ってはいないと思うし、なにより空腹で満たされているのだ、食わねば何もできないのだからどうしようもない。

不幸にもクエストがないので経験値を稼げないしクエスト報酬で手に入る謎の食べ物などもないわけで、そうなると金銭を自力で稼ぐほかなくなるのだ。

「マインドポーションおいしいねえ……」

うわごとのようにつぶやきMP回復ポーションを呷る、まずい。

やっぱ飲むんじゃなかったと思いつたからフタをしめてインベントリに収納したそれは、ごく一般的なポーションだ、ゲーム内ではぐびぐび飲んでいたしなんなら濃縮した

やつを連打していたが実際には相当まずいことが今わかった、今まで苦労してたんだな
自キャラ。

ただそこに至るまでも、いくつかわかったことはあった。

この世界はとりあえず異世界、というものは確定で、しかしネットゲーム準拠ではないということだ。ある程度ゲーム世界は完璧に回っていた自信はあるのだがしかし、聴いたことのない地名やエリアの話しか聞けなかった、なお情報量でヒールポーションをひとつ持つていかれた。

そして自分に関してだが、ちらつと同人がもっていた剣の反射で見た感じネットゲームの自キャラと同じ外見になっているらしい。

趣味の黒髪をやや上に尖らせてあるこの髪型はいわゆる初期設定で使える髪のひとつで、課金して手に入れたそこそこ経験を積んだ若冒険者といった風格をした顔つきとの絶妙なマッチさが気に入っている。衣服は例の“付与術師のリュミエール”を装備しているがどうやら、こんなものを着てここをうろつくのはあまり推奨されないらしい、なんでも高そうな服は嫉妬を買うとか。

とはいえインベントリ——100種類まで収納可能なデフォルトバッグに入っていたのがこれだけというか、なにより自分はアバターが豊富なあのゲームにおいておしやれ要素に力を入れていなかったのだ、あるにはあるんだがすべてを倉庫やドレッ

サーにしまいこんでありあいにくと手元にはない。かわりにエンチャント用の道具、移動用ライドパートナー、ポーションなどはこれでもかというほど豊富にあったのは救いだろうか。

レベルが上がると倉庫アクセスが解禁される仕組みだったけど解禁されないだろうか……。

「お兄ちゃん、このポーションもらえるかい」

「まいどツス」

「かなり安いけど、ここで売るにはみんなの手がとどかないねえ」

「そうなんですか……?」

「そりゃあ、ポーションは稼いでる冒険者とか街の薬局が使うものだもの」

「そっかあ……」

情けをかけてくれたのだろうか、おばあちゃんがヒールポーションをひとつ買っていつてくれた、うれしい。

チャリン、と頂いた貨幣は銅を八枚、どうやら商業組合が発行しているものなのでちなんでギルドというらしく、まあオーソドックスに銅銀金、あと貨幣を半分に割つたり四角いのがあったり、まあ大きさと等級にちなんでそのまんま価値が決まるらしい。自分の資金はあいにくとすべてサブキャラに預けていたためにゼロだ、ゼロってちよつと

だけかつこいい、かつこよくない。

それと能力値もエンチャント画面同様見ることができみたいで、それによるとステータスはそのまんま受け継がれているようだ。レベルは上限突破110のただし、成長傾向でエンチャントとして振り切らせていた都合上防御、攻撃はほぼ最低値であり、かわりに魔力量や作業速度、そして幸運がぶつちぎりである。

なるほど一般NPCにも負けたのがわかる、へっ次はステータスリセットで相手をしてやるぜ、しゅっしゅっ……やべえ倉庫だ……。

と。

そんなわけで、この状態では貧弱一般人と同じな自分——オルカ、自キャラの名前をとってオルカ、イルカじゃなくてオルカミングのオルカ、と名乗った自分はせめてもの食い扶持を稼ぐために個数カンストしているヒールポーションと、適当にゲーム当時から整理が面倒でインベントリの隅に仕舞われていた短剣などをエンチャントして売っていたところだ。

短剣と言ってもレベル帯で言うなら40くらい、まあそんな上等じゃないだろう放出して問題ない感じのものに“スタミナ軽減の”といった軽めの付与をしているだけだ、店売りでもそこそこの値段になったものだし、いる人はいるんじゃないだろうか……で

も売れない、ううむ。

おばあさんも言う通り、ここは貧民街のど真ん中らしい、照りつける太陽に耐えつつ路上販売を行っていたがしかし、ポジションだけならともかく一向に装備が売れる気配がないのだ。場所を変えるべきだろうか。

思い立つたら即実行である、このオルカ、臆病なうえに堪え性がない。

そんな矢先インベントリにせせせことポジションをしまっていると、徒労感すら感じるのだ。

照りつける太陽が憎らしい、だがあらま、突如として訪れた雲が太陽を遮ってくれたではないか。これはありがたい、その雲の顔を拝んでおこうと顔を見上げるのだ、恩人の顔を見ておくのは礼儀だと思う。

しかし見上げたさきにあつたのは――

「や、これいくらう。」

肩の下あたりまで伸びた赤い髪を揺らし、短剣を指差す乙女ではないか。

飾り付けを赤色基調に皮の鎧を身に着けた、少女を抜けきらない小柄な乙女もまた腰に短剣を持つており、見るからに軽装備の戦士といった感じである。その胸は薄く、鎧も必要最低限の箇所だけを覆っておりなるほど、とても動きやすい装備だなと思えた。

「ども、ども、銀貨十二枚に銅貨五枚ですぞお嬢さん」

「へーえ……ほんとに？」

「は、端数切り捨てにしまッス銀貨十枚です……」

このオルカ、臆病である。

やすやすと値切りされては舐められないかという心配をよぎらせつつもしかし、値切りに応じるのは自分がこの世界の物品の価値というものをわかっていないからだ。串焼きや謎肉の肉まんの値段はアテにならないものだから、どうしても手探りになる、なにより今このオルカは腹が減っている……とにかくはやめにまとまったお金を手にして何かを食べたいのだ。

そういえば回復職などは食べ物を目方に投げつけて回復する手段があったらしい、いま回復職だったら食べ物を持っていたのだろうか……。

誘惑とのてんびんにかけて見事にへし折れた自分はレベル40相当の、みつつのエンチャントがされた短剣を銀貨で交換すると今日は店じまいだよと物品をどここ仕舞って行くのだ。これだけあればしばらく食うことくらいできるだろう、住む場所はまあどこか軒下でも借りよう、このオルカ、どこでも眠れるのだ。

さあお嬢さん行きな行きな、散った散った、今日は店じまいだよ何を言ってももう売らないよ、俺はこれから謎肉の肉まんをたらふく食べるんだ、お酒は弱いのでリソース

を肉まんに割けるんだ、へっあの兄ちゃんミルク頼んでるぜって笑われても上等なのだ。

「あの……なんツスカ……？」

されど目の前の少女はずらからない、まさか自分の着てる服でも買い取りたいつてことだろうか。

「服はちよつと非売品なので」

「いや買わないけど」

なるほど買わない、では自分を買うということだろうか、なるほどここは法の通らぬ貧民街、いたいけな少女に見えても男に飢えた野獣、こんなあどけなさそうな顔をして飢えた男からも襲われれないということは皆知っているのだ……お嬢さん店じまいだよ！この貞操はSold outだ。

そうして身体を抱いていると少女のほうから口を開いた。

「君、商売はじめて？」

「まあそうだねえ……売る仕事はやったことが」

「だよねえ」

言う野獣少女は買い取った短剣をくるくる回すと、それをこちらにしつかりと見えるようにし、そして言う。

「この業物、どこの掘り出し物かは知らないし、あたしくらいじゃないと価値がわからな
いケド——銀貨10枚なんて安いも安い!金貨をじゃんじゃか積んで買えるもの
だつて思うわよ、ギルドじゃ名の知れたローグのあたしが言うんだから、信じなつて」
「お返ししていただけるつてことですか?」

「それはダメ」

目の前でネタバラシをした挙句返さない、なんていじわるなんだ。

なきそう、ないた、やつぱ泣かない。これは自分のミスだから次から強くなるう。

だからじゃあねと会釈を別れにさよならなんだ。

「ちよつ、ちよつと待ちなさいつて!」

「あの、自分肉まん食べに行くので……」

「そんなものよりいいもの食べさせてあげるから!!」

「ほう」

ならば話を聞く理由があるな。

どうぞレディ、話を続けて。

襟を正して声をかけると、困った顔を一瞬して、それからまた話しだした。

「いい?なんでこんなところでこんなものを売つたのかわからないけど、ポーション
にしたつてこの短剣にしたつていくらなんでも安すぎるの、あなた何?出家志願の元貴

族？」

「いえ民間人です」

「それならいいけど……じゃあ聞くわ、これ、どこから手に入れたの？」

「それなら——武器はもともと持ってたし、エンチャントは自分でしたもののツスけど……」

「……えっ」

今度は目を丸くするやじゆ……短剣少女、コロコロと表情が変わるのは面白い。

そうするとなぜだろう、ブツブツとつぶやきはじめやがて、距離を一気に縮めてきたのだ、なんて欲の強い！

「あなたがこれやったの!?!ほんとに!?!」

「ウソつく理由ないです……!このへん来たばつかで値段とかもさっぱりだけど、昔はこれだいたいこの値段で売れてたし……!店売りで……!あつあつ胸ぐらつかまないであつあつあつ」

「そう……そうなのね、でもそつかあ……このへんには来たばかりの旅人つてことよね。じゃあこのあたりの常識や物価を知らなくてもおかしくはない……のかな。あなた出身は?」

「ヒエーツサイタマ!」

胸ぐらをつかんでぶんぶん振るやつぱり野獣な少女にヒエーツとつぶやきながら、しばし彼女が考え出すそぶりを見せるとようやく解放された。

「ねえあなた、行くアテはあるの？」

「正直なくて困ってたところかなあ……だからご飯を食べてから考えようって」

「ウチで食べてきなさい！」

「まじでっ！」

肉まんも捨てがたいが、きちんとしたおうちのご飯が食べられるという誘いに乗らないことはないのだ。これが普段の冷静にクリックと右クリックの作業をしていた頃の自分なら違ったかもしれないが、あいにくこのオルカ、今空腹である。

「うちの“ギルド”ならあなたに教えられることもあると思うしね。こんなものをこの値段で譲ってもらったときに何も言わなかった迷惑料も兼ねてよ、そろそろお昼時だし一人くらい増えても誰も文句は言わないと思うわ」

「でも知らない人についてっちゃダメってお母さんが」

「お利口さんでいいわね？あと10年若ければね？」

「ハイ」

この綺麗な返し、こやつでできる。

だがそれを考える頭よりさきにおなかが鳴るのだ。

あとできる質問はというとひとつくらいだろう。

そうなるとふむ、何を聞くべきか—— ああ、そうだ、アレかな。

礼儀は、礼儀だ。

「——ところで、君の名前は？」

「ああー」

そこまでで、ふと言い忘れてたわねー、と野獣少女が目線をそらしつぶやく。

それからこちらに振り返ると、首元にあるドツグタグ……のようなものを手でつまみ
見せながら答えた。

「あたしはメイリオ、”ポークポーンギルドド”のメイリオよ！」

2話—メイリオの短剣くポーンギルドく

誰もが身なりが決して良くない、だがなにかしらの通り道になってるんだろう、ちらほらと鎧や剣を携えた者が見える貧民街を通り抜けメイリオに案内されていったのはその最奥、ここはきつと壁に囲まれた街だったんだろうと判断できるに易い壁際に建てられた——

「無神論者なんで……」

「廃教会を再利用してるだけなのッ」

現実的に言うなら三階建て住宅といった大きさの廃教会で、入り口には木製の看板で文字が描かれている。文字は曲がりくねって日本語とはまるで違っているため読め……読め……ない？ いや読め……がんばれ……読める、いや読めるぞ！ “ポーンギルド” つて書いてある!!

空腹で大変に憔悴していた自分の貴重な体力をすり減らして行った解読は自分でもなぜできたか理解することができず、ただ今は食糧を欲するのみ。

帰ったわよー、と言いながら入っていくメイリオに従ってふらふらりについていくと

その中はなるほど、教会にありがちな長椅子が端にのけられたりひっくり返されたりでテーブルなどに再利用された、いかなれば見たまんまの「ギルド受付」といった形で確かに再利用だと伺える作りとなっていた。

「神をも恐れぬ所業……」

「無神論者じゃなかったの?」

すれ違いざまに一人が出ていったのを除くと、ここだけで見える人間は六人。

自分とメイリオを入れて八人となるが、メイリオが全員いるわね、と言ったのを聞いてここに所属する人間がすべて集まっていることを察する。というより全員食事中であつたようで、教会の長椅子をひっくり返してその上に板を打ち付けた神に叛逆するはんぎやくかのようなテーブルで一様に食事を摂っていた、それをよこして。

「紹介するわみんな、さつき会ったオルカよ、旅商人……なのかしら?」

「民間人です」

「そういうのいいから」

「ヒーツ……」

「とりあえずそうね、食事のあとに皆の紹介をしましょうか、あなたのこともね」

メイリオが言い、座つてと促す。

ひっくり返した長椅子の向かいに長椅子を並べている光景はなかなか異端的という

か無限の螺旋が誕生しそうな気配を感じたが、あいにくと無神論者なのでそのへんは大丈夫だ。座つてみるとさすがに教会の椅子だったというかそれなりやわらかい、これはいい食事ができそうだ。

謎肉まんはなかった。



このオルカ、満腹である。

そうなると機嫌も上々になるというものでなかなかどうして、ここにいる六人の顔ぶれもイケて見えるようになるしなにより、メイリオ嬢の顔も少々可愛らしくもなってくる。あらメイリオ嬢、お口にライス粒がついてますわよウフフツ。

「あら、ありがと」

「どういたしましてですわよウフフ」

「あなた変な喋り方するわよね」

もちろん素でこういうわけではないのだが、ネットゲーム内でこんないわゆる「ネタキャラ」じみた格好をつけていたものだから投影されてしまっているのだろうか、はたまた異世界転移というコテコテの事態にめぐりあつて興奮しているからかもしれない。

とりあえず胸にしまっておいて、並んでいるメンツを見やる。

さては皆が皆特徴的だ、いうなれば――

「紹介するわオルカ。リーダーのアーリン、タンカーのギデオン、イレイザーのケイ、アーチャーのニッサ、ソーサラーのリリアナ、それから経理……マーチャントのチャーニーよ」

頭まで全身鎧の女、上半身裸の筋肉坊主、不安になるような布面積の痴女、一度も目を合わせてくれないビビリ症のフード少女に喫煙者の魔女……唯一最後の眼鏡のオツドアイ娘だけともそうに見えたがどれもどいつで特徴的すぎる。

あまりにそんなものだからひとりひとり自己紹介をしようと言われたのをもう覚えた、と答えるとまた空気が面白おかしい感じになったものの、そしてそれで自分くらいはやっておくとメイリオに言われた。なるほど確かに、自分くらいは言っておかないと困るよな。

しかしはてさて、自分の経歴をどう紹介しようか。

「オルカです、名字はまだない。歳のほどは二十六で友達はずゼロ、故郷はさいたま。趣味はアイテム収集だったんですがちよつと今引き出せない状況で……」

「へエ、どんなの集めてたノ？」

「次元を断つ神剣とか天に向かって射ると半日降り注ぐ矢とか……」

「へ、へえ……」

ドン引きである。冗談だと思われているのか筋肉ギデオンと喫煙者のリリアナには大笑いされていたものの、経理のチャーニーは引き下がって苦笑いを浮かべていた。真面目に答えたのにぶんぶんというやつだ、お天道様も見ているぞ。

とはいえこの微妙な空気を入れ替えねばならない。

それが功を奏したのか、続く言葉で場が一変した。

「ジヨブは『エンチャント付与術師』を少々」

「わあ……」

「あら……」

全員が沸き立つ、連れてきたことを鼻にかけているのかメイリオはふふんといった様子だ、他力本願というやつだ。

とりわけ反応が芳しいのは痴女ケイとフードのニツサで、ニツサは一瞬だけ輝いた目と目があったがヒイツとすぐさま顔を落としてしまった、やはり自分も対抗してヒエーツつて言うべきだろうか、もしかすると君とは何らかの方面で波長が合うかも知れないな。

痴女ケイはというと、大丈夫なのかという布面積のままテーブルに座り、そして身体をこちらへ傾けてわざわざ視線を合わせてくる。普通に座れよ、と思ったがまあ彼女な

りのポリシーというものがあるのだろう、周りも気にしていないみたいだしリーダーに至っては全身鎧だし、ということ自分で自分は見逃すことにした。

「オルカ君、って言ったっけ」

「オルカです、イルカじゃないです」

「くすすつ、面白い子。付与術師……ってことみたいだけど、何を付与できるのかしら……?」

「何を、というとそうですなあ……」

付与術師というか、鍛冶師や錬金術師のジョブを使つても結構困る質問だ。

なにせ使える付与は膨大で、そしてそのすべてを把握することはなかなか難しい。

おまけに何、というあいまいな質問になると、相手が何を求めていて何と答えればいいのかもわからなくなってしまうのだ。はいできます、と言つていざ頼まれたらできませんでギルドをポイされたプレイヤーもそこそこ見ていた、そのギルドは袋叩きに遭つていたが。

だがこのオルカ、豪胆でもある、誰もしない答えを堂々と答えるのみ。

「なんでもできます」

「言うじゃあない?じゃあ、そうねえ……おねえさんの、この、ネットワーク……どう?何か「チョウドイイ」のできるう……?」

「ちようどいい……チヨウドイイ……」

ギルド入団テストというものだろうか、確かにこのまま根なし草で過ごすのも不安であるのだがこの特徴的なメンツで自分がやってけるだろうか。

「あんたも大概よ」

メイリオに横から言われた、なるほどじゃあ安心だ。

さて、ちようどいい、となるとやはりむつかしい。色っぽい仕草でわざとらしくネットクレスを外すイレイザー痴女からネットクレスを受け取ると、それをじつくりと“解析”する。ちなみにイレイザーというジョブは我がネットゲームと同様なら、殲滅力や闇討ち力に重点を置き防御を極限まで削った近接型だ、動きやすさは特に重視されるほど、スレンダー体型は確かにおあつらえ向きだろう。

反面被弾に非常に弱く、戦場によつては役に立たないか相手の道連れを要求されるとPVPに参加していた人から聞いたこともある。

はてさて、この解析というスキル、非常に便利というか付与術師にはなければならぬものである。

まずアイテムがどんなものかわからなければ付与のつけようがないし、スロット数がわからなければいくつ、どういうものを適切につければいいかわからない。耐久値や各種ステータス、さらには自分のレベルにもなるとバックストーリーまでが見えてく

る。

「どうやらスロット3のケイのエメラルドネックレスは、昔火事場泥棒をして盗んできたいわくつきらしい、わるいひとだ。」

「なるほどなるほど……」

「あら、おねえさんに唾つけるのはダメよ？でもちゃんとして付与できたら……考えても」
付与術師のジョブとしてつけられるのはスロット数の都合もあり最大で八までだ。

つまりジョブに使う最適解として選ぶならばその最大数で最大の付与をするのが正解なのだが、少ないなら少ないなりにやりくりするしかない。レベルが低いときは低くなりするしかないのだ、もちろんスロット穴あけはできなくもないが、低い確率をドリップでひたすら空け、ときに装備を壊してを続ける地獄の日々になる。

ああ素晴らしきドリル人生。

しかしみつつ、みつつか。

せめてよつつ使えると素晴らしい手札が揃うのだが……と悩みつつ、プルダウンメニューから付与を選択しスロットにはめていく。ちなみに“的中の”や“硬化の”は武器であったからあのような必中や行動不能付与を与えるだけで、装飾品や防具として使った場合にはまた違った効果を発揮するのだ。

今回自分は、“暗視の”をはじめとしてみつつの付与を成功させた、まあ100%な

んだけどね。

「3つ入れました、もつとすごいのができなかつたのが残念ですがくつ」

「いいのよいいの、わざとらしくして可愛い子ね……ほんとにみつづできたの？3つの付与の入った装備品なんて、そうそうないものだからおねえさん、お代出せないわよ？

……まあ調べればわかることよね、ニッサ

「あ、あい……はい、ケイ、わたし、やる……」

ネックレスをケイに渡すと、ケイはしばらくネックレスに目をやったあと信じられない、といった様子で見つめる。付与の際にはエフェクトが出るからわかるはずだが信じられないのだろうか、とかくフードのニッサが「わかる」ようで、彼女に手渡すとニッサは、一言ぼそりとつぶやく。

彼女の目元に魔法陣が出現するのを見ておおつ、とマジカルチックな演出に感動しているのと、ニッサの解析が終わったのだろう、その声色が変わっていくのが見て取れた。

「スベクタクル解析」……つ、ヒーツ……!」

「二、ニッサ……?!」

さつきまでの死にそんな人見知りさはどこへやら、ニッサはネックレスを近くで見ると、ちよつと離して見てはと繰り返し驚きもものき、それこそ信じられないといった顔をするのだ。あまりに豹変したものだからメイリオが心配して呼ぶと、正気に戻ったの

かネックレスをケイにおそるおそる渡してまた、ぱさりと落ちていたフードをかぶった。

「て、〃暗視の〃と……〃回復の〃とあとひとつ、知らない効果がある……!」

「そ、そんな貴重な効果があるだけですごいのに……!?!」

「オルカ、説明できる!?!」

「えっ、いやできる……けど、うん、する」

少なくとも3人、ケイとニツサ、それにメイリオが豹変したものだからもちろん自分に目は向くわけで。うむむ、こんなに大勢の前で発表するなんてどれだけぶりか……最近だとそういった機会がなかったから、ネットゲームのSNSで検証結果を発表して統計が甘いと袋叩きにされたとき以来だろうか。あれはゆるさん。

ええい、ままよ。

「〃暗視の〃は文字通り夜目が効くようになる付エンチャント与だよ、イレイザーは確かシャドウ

ウォークからの首刈りが基本ビルドだったはずだから、継続的にSPを消費しないようにするのは大事だしね。〃回復の〃も文字通りで、それはまあ説明しなくても——」

「えっ、おねえさん言ってることわからない……すごいのはわかるケド」

「すいません自分もイレイザー育てたことなくて……」

「そう、なの」

戦闘職は狩りがめんどろくさいのだ、生産職も似たようなものだが、完全作業と運ゲーの積み重ねはまた違うものがある。その結果お互いがお互いの育成に関して『信じらんねえ』といった顔をする 것도、かつてよく見た光景だった。

さて。

「最後 “ラピッドな” は……使ってみたほうが早いかと思います、超速いです」

「そ、そうなの?? わかったわ、おねえさんちよつと使ってみるから……ニツサ、一緒に来て！」

「ふあ、ふあい！」

ただし——と言いつ終える前に、ネックレスをかけたケイがものすごい勢いで扉を開けて出ていく、ニツサも一緒だったがとてもスピードに追いつけない。そうしているうちにこの場には沈黙が残り……やがて、メイリオが口を開いてくれるまで自分は、このなんともいえない空気を浴び続けた。

あとでシャワーあびなきや、”シャワーの”のエンチャントもあつたな。

「ね、ねえオルカ」

「オルカです」

「その……あたしの短剣にも “みつつ” ついてるの?」

「そうだけど……」

言うと同時に、また沈黙が走りまたなんともいえない空気が顔をバシーンと叩く。

こんなところにいられるか！俺は一人で……何もできない、自分はひとりでは何もできないことを思い出したのだった、ついでお食事にあがったのになにもせずさっさと去ってしまうのはあまりにも無礼であると直感した。

「……………自分、何かやらかしました？」

わからなかったら人に聞く、これも礼儀。

そうしているとようやく、魔王の第三幹部と言つても通じそうな全身鎧を着こなしたリーダーのアーリンが口を開き、見た目からは想像もできないくらい凜とした声で自分に告げる。それは魔王アーリンからの通告か、愛の告白か、それとも――

「……………オルカ君」

「オルカです」

「我らに加わる気はないか？」

「うーん……………」

――勧誘でした。

「ふつつかものですが」

「良かった、光栄に思うよ……………このことはなんでもチャーニーに聞くといい」

「えっっ」

そつちに丸投げなのか……。

言い、立つと歩いてきて握手を求めるアーリンと並び立つ。

でかい、180はとりあえず超えてる、でかい、自分が178cmだったことを思い出した。

……こんごともよろしく……手もでかかった。

3話―メイリオの短剣と付与術師

いつもみたいに依頼をこなすために街の外に出て、簡単な調査依頼だったものだから大した疲れもないってことで、貧民街をちよつと歩いてたの。女の子一人で歩くにはこはちよつと危ないけど大丈夫、あたしは「ポーンギルドのメイリオ」、ここの人たちには顔が知れてるし味方だつてわかつてもらえてるから。

行商人、掘り出し物、ほかに「ワケあり」。こういう陽の当たらない場所だからこそ手に入るものがある、それを巡るのがあたしの趣味でライフワーク、あたしも結構な強さになれた自信はあつたものだけでも、そうしたら武器が自分についてこれなくなつちやつたの。

だからもしかししたら、今日も何か売り物があるんじゃないか——つて思つてたのが当たり……当たり？ 裕福な服装を土に汚した「ヘン」な人が、道端でポーシヨンや武器を売ってるじゃない？ でもこれがやつぱり大当たり！

そこらじゃめつたにお目にかかれないエルフ系の装飾のされた業物の短剣が無造作

に並べられていたものだから一瞬ひっくりかえりそうになって、でも勇気を出して値段を聞いたの。そしたら銀貨が十二枚！金の間違いじゃないの？それも桁を間違えてるんじゃない？つてまたひっくりかえりそうになって——だからほんとに、つて聞いたの。

そしたら逆に値段を下げられるものだからああ、この行商人、何もまだ知らない駆け出しなんだなつて感じちゃつて、ついついお節介を焼いちゃつた。

だつてエルフの装備よ？知り合いにエルフはいるけど、でも閉鎖的なコミュニティを維持してる彼らの技術のこもつた武器なんてそうそうお目にかかれるものじゃないもの、武器としてだけでなく装飾品としても欲しがると人は引く手あまただわ。

でもそれからまた大当たり！付与エンチャントがされてることだけはぼんやり伝わってきたけどこの短剣、付与をしたのがこの行商人だつていうものだからついつい嬉しくなつてギルドの拠点ホームを案内しちゃつたの。

どのギルドももちろんお金を稼いだり強力な装備を作る手段として付与術師エンチャンターを囲い込むことはあるけど、付与術師はその絶対数が錬金術師や鍛冶師と比べても少ないから大抵は大手の冒険者組合ギルドに持つていかれてあやし達みたいな弱小のところには来てくれないのよ。

だからこのポーンくずギルドキルトを強くするチャンス！つて思ったんだけど——そしたら

この「オルカ」って付与術師、想像以上の規格外だったことがわかってまたひっくりかえりそうになっちゃった。

3つ、3つよ、一度の付与でみつつの付与をいとも簡単に成功させてみたのよ。

あたしも付与の専門ってわけじゃないけどでも、付与がみつつついてるっていうのがどれだけ上等な装備かわかるわ。付与のされた装備を使えるっていうだけである程度の資金力があるくらいだもの、消耗する効果をつけるならともかく、ひとつ、ましてやふたつの「永続付与」をつけるのってそれだけで付与術士はマナを消耗するしなにより、装備を壊さないで成功させるにはかなりの熟練がいるって聞くわ。

みつつの永続付与なんていうとかなり熟達した付与術師が気合を入れてようやく取り付けるもので、それこそあたし達みたいな銀、鋼等級のギルド冒険者には手の届かない最低でも金貨にして数百枚なんていうそれこそ余りあるものになるもの、年に数本しか出回らないって話よ。

よつつにもなるとそれこそ白金等級——かつて「霸王」や「魔王」に挑んで討ち取った伝説の冒険者達がつけているものに限られるって聞くわ。

その中のひとりだけが、五つの付与のされた伝説の「五行の聖剣」を持っていたって噂もあるけど、あたしは又聞きだから詳しいことは知らない。

でもだから3つの付与のされた装備品を簡単に生産できるなんてことは、無限にお金

を生み出すかもしれない一方ほかの付与術師の立場を危うくしちゃうかもしれないってことよ……オルカを野放しにすることは、それだけで危ないことだと思ふの。

「わかった!？」

「わかる、超わかる」

「わかっているのかわかってないのかもうーっ!!」

仏頂面でわかるわかるって答えるオルカに、あたしは唸る。

この男、自分の価値がどれだけすごいものかわかっているのかしら……!

「とりあえず3つできるのは結構すごいって、超わかった」

「結構、ってあなたね……そういえば、あたしの短剣」

二振りの短剣、いまは片方を例のエルフ装飾の業物に変えてるけど、もとのものからすればあんまりにも不釣り合い。また試し切りはしてないけど、見るだけで切れ味が段違いなのがわかる。おまけにこれにもみつつの付与がしてあるなんて——

「エルヴンナイフは40のローグ用装備だよ、穴空け用のが余ってた」

「余ってたって……よんじゆう?」

「装備レベル」

「^{レベル}実力だなんて言ってくれんじゃない。

基準がどこにあるかわからないけど、これを持つにふさわしい“実力”がいるってわ

けね。

でもエルヴンナイフ、かあ、やっぱりエルフ仕立ての武器なのかな、じゃなくて。

「それで！あたしの短剣、何が付与されてるの！」

「あ？ああ……いいよえーつと」

短剣を借りる、と言つて手元から受け取るオルカ。

手元から離れるときにちよつと名残惜しかったのは短剣の価値か、それとも美しさだったか。

でもそれからの言葉に、あたしはまた混乱することになった。

「まず “スタミナ軽減の” でスタミナ消費軽減、まあローグは動き回るしスキル発動数が多いから消耗が多いだろうから必須だよな。それから “貫通の” もつけた、ローグやレイザーは一撃必殺がデフォルトだし防御貫通はやっぱり必須だしそれから……最後に “ステルス” だな、初撃が相手に気づかれなくなる最強の暗殺向け付与^{エンチャント}だ。まあ “こんなもの” だが、できる限りのことはやったつもりだから許してくれ……」

妥協案なんだ、と頭を下げるオルカに、えつ、えつ、とあたしは頭をぐるぐるさせることしかできない。防御貫通？初撃確定？スキル発動数？わからない言葉やわかりたくない言葉のオンパレードで頭おかしくなりそう、頭お菓子なる。

ひとしきり混乱をおしのけたあと、ようやくあたしは正気に戻る。ちよつとまって

ね、今心整えてるから……よしOK、オルカ、ちよつといい？

「オルカです」

「その付与能力、よそでうかつに喋っちゃダメよ！」

「……えー……」

「ダメ！」

「しようがないなあ」

ものわかりのいい仏頂面でよかつたわ。

はあ、あたし天に昇ればいいのか地に落ちればいいのか。



川を渡って木立を抜けて、走れば走るだけ視界が過ぎていく。

速い——疾い。

これが「ラピッド」の付与の効果。

信じられないほど脚が早くなって、気がついたらニツサを追い越してたものだから反転してぐるっとニツサのもとまで戻る。あまりに俊敏な移動だったせいかニツサもわわつと驚いたようで、弓を携えたまま尻もちをついていた。

私はニッサの手をとって、フード付きのローブをばばんと叩いて土を落としてやる。人見知りのニッサはこのフードを脱ぐのを嫌がるものなのは知ってるからそこには触れずに、でも私達、信頼してるもの、軽く頭を撫でてあげた。

ふふ、可愛い子。

「ケイ、はやい、はやすぎ……」

「ごめんなさいねえ……ちよつと、興奮、しちやつて」

気がつけばニッサは息もぜいぜいで、膝に手をつけて息を整えていた。

それに対し私はまるでそんなことはない、まるでそう——なるほど、これが「回復の」の付与か、体力が自動で回復しているのね。走るだけなら無限に走ることもできそうでなるほど、あの子が相当に強力な付与術師だつてことを身をもって実感した。

今の私なら馬より疾い——馬並み、あら、お下品で失礼。

とかく今、私はこの身体を持って余っていた。

とにかく動きたいってそんな気分になっていたの。

「ニッサ、私い、とにかく動きたい気分だから……もし「ダメ」になつたらお願いねっ」

「え、ちよつ、ケイ——!?!」

ちよつと進むと森があつて、討伐対象の角ホシノディーツ鹿が生息してる。これは仕事、仕事も兼ねてるんだからと自分に言い聞かせて、はやる気持ちをおさえつつもやっぱりおさえき

れない。急加速した脚のまま肌で風を切り、邪魔なものはすべて飛び越えながら森を越えていくの。

——見えてきた。

いつもの“常人の速度”なら到底追いつけずニッサの弓に頼って追い詰めていくしかない角鹿の脚が、いまなら信じられないほど遅く見えてくる。

いつもは地の利も何もかもが相手にあつてうかつに動けなかつた相手を乱雑に追い詰めて、いままさに隣に迫いすがつたのは初めて見る景色。あら、見たことなかつたけど結構可愛い顔してるのねとちよつとだけ観察しながら、私はイレイザーの“技能”である『首刈り』を行使する。

瞬間、こうもたやすくできるのかというほど“高速で”刃が首をすり抜けて、首を失つた身体がしばらく走つたのち姿勢を失つて崩れ落ちた。

——快感。

高揚感、とも言えるかも知れない。

私は間髪入れずに逃げたもう一匹への追い込みを始める。

驚異的な速度には驚異的なブレーキが必要だ、跳び、木を足場にするのと蹴りつけ方向転換し、そのまま木々を蹴り続け加速する。自分でも信じられないような速度と跳躍力によつて実現できていることが楽しくて仕方なく、事実空を飛んでいるという未知の高

揚感が胸を跳ねさせた。

「ふふ、ザンネン」

草木を飛び越える角鹿のそのさらに先を飛び越え、目の前に着地するとすれちがいざまにまた「首刈り」。同じように相手が崩れ落ちたのを見るたび高揚が増し、最後に残った相手はもはや楽しむように狩りに興じることになった。

……振り切る速度が返り血のちよつとの汚れすら与えなかった、この戦いですらない戦い。自分がやったのかとすら疑う感覚がまた手に残っていてそして、構えているナイフが耐えきれなかったのだろう、刃こぼれしていることにも気付いた。

「そういえば、力いっぱいだったもの、ね」

首を狩るのに力いっぱい、力まかせですらできてしまう自分の力の上昇に一瞬恐怖すら覚えるものの、それは高揚にぬりつぶされた。

あのオルカという子、すごい。

今胸いっぱいにあるのはその感情だけだろう。そうだ、あの子が私達とともに働いてくれるならもつと私達は、私は強くなれるのだろうか。たかだかネックレスひとつにエンチャントをしただけでこれだけの高みに昇れたのだ、この軽鎧やナイフにもつけた折には——ぞくぞくする。

ようやく追いついてきたニッサに笑顔でもう終わったわよ、と返しながら、獲物を運

ぶのだけ、どうしようかと困ってあははと笑い合う。まだ心臓の高鳴りは止まらなくて、停滞していた自分が高みに昇れたというだけですらこんなになるのかとまた頭が混乱している。

……そうだ、これだけの力があれば、みんなでもっと高みに昇れる。

それにもっといい暮らしもさせてあげられる。

そして——

——私も、やりたかったことができる。

4話―メイリオの短剣くくずの集まり―

部屋を与えられた。

もともと廃教会ということもあって部屋数はそれなりにあるらしく、ただし広くはないし質素だ。よくある六畳半つとところだろう、あんまり掃除ができてなかったらしいのだが今チャーニーちゃんがんばるとお掃除をしてくれたおかげで、見るも違えるような匠の演出を垣間見ているとこだ。

「……ホウキに “付与”^{エンチャント} してくれたのはありがたいケド、それなら手伝ってくれてもよかつたと思うんだけどナー」

わざとらしいカタコトの言葉遣いをする赤毛ダブルおさげ、おまけに眼鏡ときて属性がほどよく盛られたチャーニーちゃん……通称店主ちゃんがぼやく。すいませんそういうのは専門の業者に任せたほうが足手まといにならないかなって思っつて。

掃除をしているときに話しかけたら嫌々な声で答えてくれたが、彼女が単純に計算が得意なことから経理をしていることのほかにギルドの経営管理を一括でしている、外部への供給、抛出もすべて請け負っていることから店主ちゃんと呼ばれているらしい。本

人としてはもともと商人志望だったらしく、まんざらでもないらしいのでこれからも呼ぼう。

「さーでできたヨット、ここがキミの生活拠点になる場所だからちゃんと管理するんだヨ、今後はウチは掃除しないからそのつもりでネ」

「ゴミ出しの目を教えてくれればダストシユートには捨てに行くよ」

「なんだいゴミ出しの日つテ……ナマモノとか燃えるモノならまとめて裏の焼却炉の脇においといてくれれば、当番制でニツサかアーリンが焼いといてくれるからそこだけ覚えといてネ。ビンとかは洗って各商店に自分で返すよーに」

「ビンの使い回しするんだ……」

「ビンをいちいち割ったりまた作り直しでできるなんて、それこそ大商人のヤローとか貴族サマのお屋敷くらいしかないノつ。ウチはそんなに余裕ないんだから節約できるモノは節約節約！……まア、キミが来たことでそれが好転するといひナーつては思ってるけどネ」

そう言い、店主ちゃんは自分よりもさきに部屋に入ると椅子に遠慮なく座った。

だから自分も、しかたがないのでベッドに座るのだ、無言で。

「……からかいがないのヒトだよネ」

「つつこんだら負けかなって」

「へいへいー、まあ、ちよつとお話と、お願いと、お誘いでもしたくつてネ」

「そういうお誘いはちよつとよくないかなつて……」

「だあれがキミなんぞに」

ぶんぷくりんといった感じでジト目を向けてくる店主ちゃん、なんとなく似合っている。

しばし感情のこもらない目で見つめ返すとしかし、はあ、とため息をついてから切り出してきた。

「ギルドの仕組みとか、どんなギルドがあるかとか、ここがどーいうところか、そーいうのツテーだ聞いてないんだよね？」

「まったく、いやまったく」

「はあー……メイリオも悪い子じゃないんだケドそーいうところがなア」

「じゃあ、店主ちゃんが聞かせてくれるつてことかな。しょうみ自分もこれから当面の目標つていうものが決まってるから、行き当たりばつたりになるまえにいろいろ聞けることは聞きたいかなつて、人生当たつて碎けるかもしれないけど、知つてることがあるに越したことはないし」

「そりゃア聞かせるヨ。だつてそのまんま放り出したらキミあぶなつかしすぎるもん」

よく聞いてねメモの準備—と言う店主ちゃん。

あいにくUIにメモ機能はない、テキストエディタをよこしてほしい、あるいはWindowsだとなおいい。

とはいえないものはないので丁重に頭を下げなければ、このオルカ、礼儀は知っている。

「あー冗談冗談、まあしつかり覚えてつてネ。……行商人やつてたのかいいとこのオボツチャンなのかは知らないしケド、わざわざ民間人つて言い張るにはそれなりの理由はあるんだろうシ……聞かないケドさ。とかく、商業組合ギルドや冒険者組合ギルド……マジックサークルとかも、そのあたりは知ってルよね？常識でシヨ」

「知らない」

「うっそオ……どこで付与術学んだんヨ……えー、ごほほん。〃ギルド〃つていうのはネ、いろんなジャンルの人たちがネ、それぞれ互助組合を組んで政まつりごとや王政の気まぐれに對抗しようつてなったのがはじまりナ。そこはおいといていいとして、今はそうねエ……〃いろんな制度や規則、階級を内々で決めて、互いに順風な経営をするために手を組みましょ〃つていう……まあ困った時はお互い様組合だネ」

「ああ会社か、わかりやすい」

「かい……？んまア、そういうことで冒険者は冒険者の、商人は商人の、漁業は漁業！み

たいな感じでおつきな組合を作ってるわけヨ。でももちろんそこに入るのが規則でもないシ、特定のジャンルを決めてギルドを作らなきゃいけないって法もないワケ」

「ほほうほほう……読めてきたぞ」

「ほんとにイ？まア冒険者ギルドは広く依頼を集めたり冒険者を組合に所属させたりしているーいろいろ手広くやったり、商業ギルドも金融とか、相場の調整とかいろいろ悪どくやつてるみたいだけドサ。……「ここ」がどういうギルドか、わかる？」

「うーん……」

所属人数七人、みんなバラバラだけど戦闘系、暮らしは貧相そうで……。

うーんわからん！このオルカ、敗者である。

「このメンツはネ、ウチが例えば商業ギルドの爪弾きモノ……つてとここで察してくれるかもしれないケド、そーいので構成されてるのサ。ただ共通することは「正義感」……どこかの悪さや悪どいあれこれに耐えきれなくて、誰かを助けたいって、あるいはせめて誰かの役に立ちたいって……そんなのだけが集まって、最初に「なんでもギルド」なーんて、ふふっ、今思い出すとほんとに安直な名前だったなあッテ、そんなふうにできたものなのヨ」

「いーい」とだ」

「ありがとネ。でもだから最初理想を追いすぎちゃってサ、何度も経営破綻になりかけ

たりしたシ……いまじや自分たちの首の皮つなぐのが精一杯、そんなうちに呼ばれ出したのがはぐれ者のより集まり、転じてクズ、一人じや何もデキない連中の集まりつてんで、ポーンギルドズなんて呼ばれてサ」

「続けて」

「……でもなら、いつそそれを名乗ってやろう、駒でも将を討ち取れるんだって証明するために名乗ろうつてなつていまになるノ。だからサ、そんなトコなんだヨ、ここ。アーリンが誘った時は止めなかつたケド、キミがいて心地いいところかつていうとそうじゃないんだよネ」

なるほど道理で。

自分は喉から手が出るほど欲しかったっていうのはそういうこともあつたんだな。でも。

「だから出ていくなら今のうち、つてことかな」

「そそ、ウチが責任はとるヨ、キミがいてくれて嬉しいことはいっぱいあるケド、キミがここにいていいことは多分そうそうないからネ。キミほどの人間なら、どこへいっても通用するはずだシ……なにより、ウチで扱える自信がない」

「ふむ」

なるほど弱気な言葉だが、確かに言われてみるとそうだ。自分の能力がこの世界で

それなりに、強いことはわかった。金を稼ぐことに腐心するならどうにかなるだろうし、身を護ることだつてそれにモノを言わせればどうにかなるだろう。

——されど、このオルカ、直感は鋭い方である。

決して理論的に考えるのが苦手かという否定はできないが。

「むしろその話を聞いて、自分は安心してここにいられると思う」

「……不安要素しか伝えてない気がするケド」

「ここにいる人間は自分の正義を信じて行動を起こせるタイプなんだろうに、それならよっぽど自分のパワーを振るうに安心できるつてもなさ。少なくとも自己の利益のために最大限自分を絞り尽くすような連中じゃないなら、安心して身を任せられると言うか……なんとというか、アレだと思う、アレ」

「公正明大つばい、とかじゃないだろうネ」

「それで行こう」

褒めても何も出ないヨツ、と言う店主ちゃんにぐつとガッツポーズをする。

事実そうだ、右も左もわからないこの世界に引つ張り出されてあわわ死んじやうウグーグーグーってなつていたところを手を引いてくれたメイリオといい、こういつた言葉を含み隠さずこつそり打ち明けてくれた店主ちゃんといい、信用に足るといふもの。信頼はこれからお互い積み上げていくとして、寝泊まりして三食昼寝するのにいい環境

はないだろう、たぶんここには掃除機をかけるためにドアをバーン！と開けてくるような人や謎の集金業者はいないはずだ。

打算的に考えても、自分はここがいい。

このオルカ、策略家である。

「んまア〜……そういうことなら、ウチは全力サポートさせてもらうことにするケド。ほんとにいいノ？当分いい暮らしできないヨ？部屋も狭いし、食事はギデオンがいるからけっこうイケるけどサ」

「筋肉すげい……」

あの人が作ってたのか……。

素敵、抱いて、やっぱやめて。

「んじゃ、ここからはお願い」

あらたまつたように座り直し、店主ちゃんがこちらを向く。

ベレー帽が可愛らしいアクセントで、スカートはロングなのでゆったり感がある、なるほど非戦闘員と言うと即座に伝わりそうな感じだ。眼鏡も相まってなかなかどうしてベテランキャリアなOL感を……。

「キミが付与した装備品は、すべてウチを通して売ったりしてほしいのヨ」

「勝手にそこらにばらまいたら死刑ってことか……なきそつ」

「いや死刑にはしないケド……メイリオが言ったとおり、キミのその『みつつの付与』はそれだけで強烈だからネ、そこらに転がってる状態になっちゃうと列強ギルドのメンツが確実にキミを引き抜いたり……最悪消しにくる可能性はあるからネ」

「こわいなきそう……」

「冗談じゃないのヨ、付与装備自体はありふれたものだケド、数が多いものってそうそうお目にかかれないものだからサ……もし自分の売り物よりいいモノを作るのがいて、そいつのせいで自分のモノが売れなくなるなんて目の上のたんこぶになったらどうすル？」

「それ以上にスキルレベルを上げて、相場を読んでいいものを売りさばきます」

「努力家だつてことはわかったヨ。でも簡単にはいかないつてコト、とりあえずまあ……このあたりの相場をぶち壊す懸念とかも兼ねて、しばらく売りさばきは待つて欲しいつてコト。しばらくいい暮らしができなくて大丈夫、つてのはそういうことネ、ウチもキミが作るモノの値打ちを判断しきれないシ」

なるほど了解、このオルカ、儉約家である。

ガチャ以外はだ。ただもやし生活はもうしたくない。

「んま、あとのこまごましたところはあとから教えるから、そこだけ覚えといてくれれば！

……てネ！ みつつも付与できる付与術師エンチャンターがいてくれるとこつちも心強いヨ、みんなの装

備も改良できるなら生存性や効率があがりつと上がるからネ」

「八つまでエンチャントはできるぞ」

「またまたー、神話級で五つなんだからなんだか。キミも冗談がうまいなあこのこの」
まあ、スロットの空いてる装備がないとそこまでぶちこめないが……そこでオーラを出してるホウキも確かにスロット1だったな、最低でも身につけられるアイテムに関してはスロットが1空いているらしい、なんでも強化できるのはとても便利だ。あとで光量の足りないランプを思いっきり光らせてやろう。

「んじゃ、最後にお誘いでも言おつか」

「だからそういうお誘いは……」

「もうちよいウチ好みになってからおいでおいデ。んまア、ちよつとキミの目を鍛えるために……隣街まで行って取引先との商売を見ないかナつてコト。そのために——

「みつつ」の装備をひとつ、作ってもらえないかなつてコト、あとニツサが一緒に行くヨ」

「ああ、あのフードの」

緑髪フードちゃんか、顔をよく見たことがなかったな。

「いろいろ言つたケド、キミにはなにより経験を積ませてみるほうがいいって思うからネ。大丈夫、話は全部ウチがするから見ててくれるだけで大丈夫だヨ、隣町も歩いて2

時間くらいだしあつというまあつというま

「ほほう……旅行ですか」

「旅行……」

そういえばこの世界にきて初日だけど、広い場所に出てはなかったなあ。

地平線はちゃんと見えるんだろうか？オルカ気になります。

自分はふたつ返事で了承すると、しかしはつと、思い出したようにインベントリを見た。

「そういえば歩いて二時間つてことだけど、いいものがある」

「へエ、また面白い付与^{エンチャント}？」

「いや、乗り物さ」

このオルカ、便利なものは使っていく主義である。

5話—メイリオの短剣く銀の☆3杖く

「オフロードバギーだ」

「ばギー」

「免許はないが、公道じゃないのでセーフだと思う」

「免許」

インベントリから引つ張り出し、ボフンと出るわ我が相棒。

勝手知つたるはライドパートナー、いわゆる搭乗型パートナーである。

「……見たことないケド、アンタの故郷じゃこういうのが普通なの？」

「道交法が整備されるくらいだからね」

「よくわからないケド、いっぱいいるのはわかったヨ」

シートベルトは締めておけよ、と言うがつつたわらない、やはり車はこの世界じゃ一般的じゃないらしい。

ライドパートナーというものは、いわゆるパートナーキャラ……同時に一体まで連れて歩ける戦闘補助をしてくれるパートナーNPCのうち、移動速度の向上やダメージを

肩代わりしてくれる搭乗型のパートナーだ。通常のパートナーキャラが個性豊富な容姿や性格をしており、そして戦闘において共に戦ったり生産補助をしてくれるのに対し、ライドパートナーは基本的に無機物な乗り物が多い。

このカーキ色迷彩をしたオフロードバギーも例に漏れず、しかしファンタジック世界におけるギャップが好みでよく採用していたものだ。エンジン音が心地よいというほど車趣味はないが、それでもスライムやローパーが跋扈する領域をバギーカーで走り回るのはなかなか楽しかった。ついでをいうとこのオフロードバギー、速度はまあまあなうえ地形効果を受けるが耐久性が非常に高く、高レベルエリアを強行突破する際にも役に立つ。

そういえばメインパートナー、倉庫に預けていたんだっただな……。

こつちでは元気に喋ったりするんだらうか、ちよつと惜しいことをした。

「フードちゃんも頼むな、しっかりと捕まらせてくれよ」

「アツ…は、はい…よろしくおねがします……」

後部座席に座るのはフードのニッサちゃんだ、あれからわかったことだがギルドメンバーに名前を呼ばれても素直に答えるのに、まだよそ者だからか自分が名前を呼ぶと縮こまって声が小さくなってしまうようだ、難儀な。

なので原則名前を避けてフードちゃんと呼んでいる。こう呼ぶと最低限は答えてく

ん達が降りたときの『げえっ！お前か！』といった姿を前番兵が奇妙な納得という一体感を得たことと、店主ちゃん自身が言いくるめたところが大きい。なるほど自分も突然 UFO が降りてきたら家から飛び出すし。

そんなこんなで昨日いた貧民街と比べるとなかなか“うるおい”のある街並みを過ぎ去りながら、元の街がどんな規模だったかはそういえばまだ見てないなって思ったものだからふと店主ちゃんに聞いてみた。

「ジュエゴの街はスピエールに比べたらかなり小さいケド、いいところヨ。王都との間の子にあるからいろんな商品も流れてくるシ、ウチはほかのメンバーに比べるとよっぽど出入りしてるかなアー。ウチは弱いから、誰かと一緒にやないと来れないけどネ」

「スピエールって言うのかあの街、ところでいつもニツサと？」

「んやー、ニツサはケイと狩りに行ったりがいつもで、あんま来たがらないねエ。今日はケイが一人で街に繰り出してるのと、他のみんなも依頼と用事でちよつといないからニツサに来てもらってるワケ」

「リリアナがいた気がするが」

「リリーは……動く時しか動かないカラ……」

「ええ……」

いざというときだけ動く伝家の宝刀みたいな感じなのだろうか。

いいな自分もそういう暮らしがしたい、お仕事したくないでござる。

でもガチャるお金はほしい、しまった今日はアプデ日……うう……。

しかしそんなふうに悲痛な空気を漂わせはじめたからだろうか、くいつと袖を引く感触がして足を止めた。

「アツ……あの、だいじょうぶ、ですか……？」

「いや大丈夫だよ、元氣いっぱいハツラツ、ただちよつとやり残したことを思い出して」「わ、わたしヒールくらいなら使える、ので……気分悪くなつたら……言つてください」

そう言うニッサの顔はなんとというか、フードに顔をすっぽり隠していた先程とは打つて変わってしつかりと目線を合わせてくれている。なるほど背丈の通り顔つきも幼く、翠色みどりいろの丸っこい目は悲しげだ。

なにかに触れただろうか、しかしばつさりと聞くのもなんとなく申し訳ない気がしたのでそこには手を付けることを躊躇った。なるほどこの娘いい子だな、と思いつつ、したらはつと目線を合わせっぱなしだったのに気付いたのだろう、わわつとあわててフードにまた顔を隠してしまった。

「フードちゃんはいいい子だな、あとで飴ちゃんをやろう」

「……ありがとございます……」

パートナーに与えると成長速度が30日くらい2倍になるいわくつきのアメちゃん

しかもつてないが、まあ大丈夫だろう。ちなみにオフロードバギーに与えても使ってくれる、あのときはアイテム的な要素だったから誰も気に留めなかったがしかし、知り合いとの話の終わりに聞いた『おふとんにおやつあげてくる』の言葉はなかなか笑えるなと今になって思った。

ちなみにライドパートナーの最高峰はお布団と乳母車だ、マジで。

そうしてニツサの背丈がちょうどいいので撫でようとして避けられてを繰り返していたうちにだろうか、街の中央にある会館のような場所にたどり着いた。

看板はやはりやつぱり読める、*「ジュエゴ冒険者ギルド会館」*とな。

ほほう、これが昨日の話に出てきた。

「さーて、ここが敵地のド真ん中、荒くれろくでなしの巣窟！ひよっ子オルカの準備はいいかヨー？」

「取引をするのに商業ギルドじゃなく、冒険者ギルドを通すのか」

「商業ギルドの連中なんかは売りさばくくらいなう、ぶち壊して焼いたほうがマシだよ。あいつらの悪どさつてのは、ウチがよーく知ってるし、その点実益とか名譽のためなら命すら惜しまない……そんな『冒険者』ってヤツらのが、ウチは信用できるってだけ」

なるほどなあ、個人的な感情も見え隠れするけど店主ちゃんの言うことも一理ある。

そして何か言い返そうとしたが気の利いた言葉が見つからなかったのでそのまままっ
いていき、ニッサと共に冒険者ギルドの門をくぐるのだ。

ワアオ！と言う言葉がつつい漏れてしまっだろう、実際にはヒエーツって感じだっ
たが、実際内部のインパクトというか「予想通りさ」が見事すぎてつつい声をあげず
にはいられないのだ。冒険者ギルドと言えば依頼の山ほど貼り付けられたボード、コテ
コテの依頼受付、そして屈強で精強な冒険者たちが軒を連ねている、そんなものを想像
するのがきつと多くだ。

「ヒエーツ……想像通りの場所じゃん……やつぱアレ？バーでミルク頼むと笑われるの
？」

「ウチはお酒飲めないから知らないケド、メのホットミルクなら笑われないんじゃない
？」

まじかよ今度酒場に行ってみよう、ちよつと離れたとこにいる誰かにシャーツつてグ
ラスをスライドさせて奢るんだ。

そんなしようもないことを考えているとはつゆ知らず、店主ちゃんはずんずんと歩い
ていく。弓を背負ったニッサがフードを深かぶりして怯え気味にそのあとをついてい
くと、あとに一人残されるのは自分だ。やばい、感動となんか色々な感情が入り混じり
ちよつとだけ歩くのをためらう。

そんなやつぱりしようもない姿を見せていたからだろうか、近くのテーブルから自分より頭ふたつくらい大きなサイズの大男が近寄ってきて、『おい』とひとこと声をかけてきた——なるほど、これが新人潰し、冒険者の登竜門か。あいにくと自分は付与術師エンチャンター、生産技能はカンストしてるが戦闘力はゼロ、ゆるしてくださいしんでしまいます、だが俺には伝家の宝刀が——

「なあ、兄ちゃん」

「ヒエーツ……すいません持ち合わせが」

「行っちゃまうぞ、しつかり守ってやれよ、男だろ」

「アツ……ハイ……」

きゅんときた。

自分、冒険者ギルド好きになるわ。



店主ちゃんが受付を通して会館の上階に進み、ついていかされた部屋は見事に客間、といった様式の部屋だった。

なるほど下はアレでも上は綺麗なんだなと思いつつ、どういう理由でいいものなのか

理解できない調度品を眺めながら店主ちゃんが長椅子の中央に陣取り自分はその隣に座る。ニッサは護衛という立場もあってかたちんぼだ、かわいそうだからあとで「疲労軽減の」あたりの付与をした指輪とかあげよう。

あ、あの飾つてあるお皿スロットがみつつもある、いいお皿なんだろうな。

「ナチュラルに隣に座つてくるとは思わなかったヨ」

「体力ないもので……」

文明の利器がないこの世界において体力はものを言うのだろうか、あいにくとぬくぬく育つた自分にそれほど優れた体力はない。

そうしてかつて古き時代を生きた人々はたくましかつたのだなあ、と思いを馳せていると、バタリ、と客間の扉が開かれ大柄な全身鎧の男が入ってくる。こう、角つきのバインソンヘルムと言えがいいのだろうか、口元以外を見事に鎧に覆っており、交渉の格好とは思えないほどの威圧感貧弱な民間人の自分はただただヒエーツ……とつぶやくのみであった。

「マスター、相変わらずギルドじゃ脱がないんだネ」

「いつものことだともチャーニー嬢、いついかなる時にどんなことがあるかもわからぬゆえ、この街の戦士の長たる者が常に万全の臨戦態勢であることは皆に安心を与えるのだ。私がここにいて、ゆえに安心して生活を享受してもいいと」

「でもでもほんとは趣味なんでシヨ?」

「まあ……せつかく買った鎧とか見てほしいし……」

手慣れた感じの会話なあたり、交流が深いのだろう。

マスター、と呼ばれた大男はどつしりと長椅子に座る。けつこうな重量がありそうだが耐えるあたりこの椅子もいいものなのだろう、スロット数が気になるがさすがにオブジェクトなのでなさそうな気がする。

マスターの後ろに秘書なのだろう、眼鏡の茶髪ショートさんが控えると、店主ちゃんがテーブルの上にやや長めの小箱を置き、口を開いた。

「最近忙しいのに時間取ってくれてありがとネ、マスター」

「なあに、チャーニー嬢の持つて来る掘り出し物にはつねづね趣味……ああいや、実用的な面で期待させてもらっているからね。最近、西の山の麓の魔物の動きが活発化しているものだからなにぶん装備の拡充が必要で……この大きさ、上等な装備品を持つてきてくれたってことだろう?」

「魔物なんているのか?」

口を挟んでしまったが、ふと聞き慣れない単語が出てきたので差し込んでしまう。

ネットゲームにもMobやボスなんてものはいたが、似たようなものだろうか。

「ああ、西の森に小鬼が何匹も湧いてね、近隣の村の警備費がかかって仕方ないんだよ、

一網打尽にできるならそれこそ嬉しいことはないんだが——つと、紹介が遅れたね。チャーニー嬢の付き人としては初めて見る顔だ、いつもはギデオンが来るはずだから……ジュエゴの街の冒険者ギルドマスターだ、名前はいつも覚えてもらえないからギルドマスターでいい」

「オルカ、付与エンチャンター術師のオルカと言います、日頃店主ちゃんがお世話を……」

「だあれがお世話になっていきますヨッ！つてなわけでマスター、ウチにもよーやく付与術師が来てくれたってワケ、おかげですつごーいいいいモノが入ったってワケよー……金庫空っぽにしてはないよネ？」

「ほう付与術師か！とうとうそちらにも来たというわけか……いやあ幸先がいいなあ！大丈夫だとも、私のポケットマネーは少し心もとないが金庫には冒険者皆の活躍でそれなりに金がある。それにランクの高い冒険者に上等な装備を貸し出せば、いい結果も見えてくるもの……開けていいか？」

ギルドマスターはうずうず、といった様子で、既に箱に手をかけている。

この中に入っているのは自分が付与をした装備品だ、けつこうな大きさだったが自分のインベントリに入れていたので持ち運びは苦労しなかった。

とはいえこのインベントリ、スキルとしてはこの世界で上等なものに分類されるようで、安易に人前で使うとやっぱり目をつけられるらしい。ここにいる秘書は信頼できる

ということで使わせてもらったが、亜空間じみた場所から1mくらいの長い箱が出てくるさまを見て口に手を当てていた。

うむ、ネットゲームにおけるあたりまえにできていたこととの剥離に慣れるまでしばらくかかりそうだ、なきそう。

「いいヨ、見てみて」

「そうでないとな！どれどれ……ほう、ほう。銀装飾に先端の宝石、それにこの使い慣れた感じ……ふむ、手立ての魔術師が使っていた業物の杖と見受けるが……つていうかこれ、リリアナ嬢のものでは……？」

「また博打で買ったからって渡されたのヨ」

「またあのお嬢さんは……」

あの喫煙者黒髪魔女のどうしようもなさを理解しつつ、見ているとギルドマスターが手に取った。

「ふむ……」スベクタクル「解析」を使っても？」

「どうぞどうぞ」

「ふむ、では……」解析」

店主ちゃんが意地の悪い笑みをしながら言い、ギルドマスターが解析スキルを使う。ああ、兜をかぶっているとちゃんと兜の外に魔法陣が出るんだな、さすがに判定かぶつ

たりしないか、と感心していると、おお、おお……おおー！といった感じにギルドマスターの声が大きくなる。

店主ちゃんがまたまたにったりと悪い顔になり、そして、三本指を作つて彼に見せた。

「“みつつ” あつたでシヨ？」

「ああ……それに見たことのない付与だ……これは個人的にも心が躍る……！エイダ、ここには誰も入れるなよ！」

「了解いたしました、お茶はどうします？」

「即買いだ、すぐに終わる！」

自分は欲しかったんだが……と、エイダと呼ばれた茶髪シヨート眼鏡秘書さんが入り口の鍵を締める。一方のギルドマスターさんはとうとう興奮さめやらぬ様子で、これはいくらか、この効果は？とひっきりなしに店主ちゃんに質問攻めをしていた。

「お値段はあとで……として、詳しいコトはこの“付与した”オルカが詳しく説明するヨツ」

「丸投げしおつたな……！店主ちゃんきたない、まあするけど」

このオルカ、説明は好きである。

さて、今回取り付けた“付与”は——

「“増幅の”と“再装填”、それから“シャワーの”さ」

「『増幅の』なら聞いたことがあるが……確か、威力や範囲を増幅するものだったな、貴重だ。だがうしろの2つは聞いたことがない、説明を頼めるかオルカ殿」

「もちろん、今回引き受けたのは魔法の杖、それもシルバー系ついでMP伝導率が高いから発生速度は気にしなくてもいい、ついでこの3つにしたんだ。『再装填』はリキャストタイムを短縮するから発生速度の早いシルバー系装備と相性が良くて速射型メイジのお手軽強構成だね、それに『シャワーの』をつけることで範囲攻撃を可能にしたんだ」

「シャワー?」

「弾が分裂して拡散するようになる付与だよ、それに『増幅の』をつけることで一発あたりも強力にするって寸法さ。いわゆる固定砲台型ビルドのメイジに向いてるやつで、範囲Mob狩りにおいては最強って言われてる装備さ、基本はこれに——」

「待った待った待った!」

店主ちゃんにまつたをかけられてしまった。

まあそんなものだ、強力な範囲攻撃をひたすらに連射して一面を火の海にするタイプのビルド用装備で、この付与コンボのお手軽なところはスロットがみつければ十分に機能することになる、レベルがある程度まで行けばこれを使って急激にMob狩りレベリングができるというのがメイジやウィザード系の育成が楽な所以だろう。

そのためランクが上がれば空いたスロットでのカスタマイズ性も高く、さらに大型敵には複数ヒットも望めるこれは付与術師にとっては対メイジプレイヤーへのマーケツトの稼ぎ用付与として大人気だったほどだ。

ちなみに「シャワーの」、蛇口につけるとシャワーになる、しかもお湯も出せる。

エフェクトでしかお湯だということとはわからなかったネットゲームと違ってこつちでは実際にお湯が出るんだろう。

「とまあ、説明でおおよそはわかっただと思うから、ここでお値段交渉にいつていいかな？」

「いいとも！……とはいえ強力なものだ、さすがに用意できる自信は……難しいな」

「ウチがそつちの金庫把握してないわけないでシヨ？……金貨にして」

店主ちゃんが指をくるくる回す。

「こういうお値段提示の瞬間ってすごい心躍る、たぶん1！10！100！とかって数字を少しずつ並べていくんだ。

「1！10！100！」

それみろ。

「しめて金貨で300枚！」

「ふうむ……払えないほどではないが……むむむ」

「——の半分!!」

「……!?!」

ほう、50%オフか……。

自分の作ったものであるとはいえ、ここにおける自分の知識というものはやはり足りない、この値段交渉は店主ちゃんに任せるほかないのだ。しかし半額、薄利になることは違いないだろう、もとの武器は元手はかかっていないとはいえ、一度売ればある程度そこに基準が設けられる。

理由があつてのことなのだろうと、そのまま見送つた。

「そ、それは赤字というものでは? チャーニー嬢、我々を思つてくれているなら……」

「そーでもないヨつ、ただひとつ、お願いしてほしただけ」

「……ふむ」

「これから『定期的』にこーいつたモノをここに売ると思うんだけどサ、それがどこから出た、とかとーぶん秘密にしてほしいのヨ。今はまだその時じゃないつていうか……つまり、独占けーやくつてのをさせてほしいノ、信じられる相手だけに売れたほうが、ウチらも都合いいしネ」

「我らだけが独占というのは聞こえがいいが……しかし、それでいいのかねチャーニー嬢は。君たちが行えるならそれは名誉になり、勢力を拡大するのにも役に立つ。それに

それらを定期的に生産する手段は——まさか、オルカ君が？しかし、〃みつつの付与〃は熟達した付与術師が年にくばくかしか成功させないものだと言うが……」

「毎日できます」

「冗談だよな？」

「アンタは自分が規格外つてことを認識しテ！」

ぺこつ、と店主ちゃんに頭をはたかれる。

さすが初期プリセット髪だ、簡単には崩れないぜ。

「つてまア、むしろこいつが外にいま知られるとめんどーいのヨ。それだからウチらがそれなりに力を戻して、こいつを抱えきれるようになるまで信頼できるマスターとこでだけ売りたいナつていう話。もちろんマスターは戦力の増強にしたつて、お金に替えつつは損はしない、ただマスターを挟むことで、そこで防波堤になつて欲しいノ」

「そのための半額と、独占契約つてことだね。なあに、私はこの街の冒険者を取りまとめる立場にあるゆえ脅しやそこらには屈するほどではないさ……安心してくれ、約束は守る。だから引き受けよう、エイダ、君も約束できるか？」

「適切な手当が出るのでしたら遂行致します」

「ということだがチャーニー嬢」

「おっけー、オルカ、わかった？」

「わかるない」

「どっちやねん」

「承知いたしました」

「よし」

じゃあ、と店主ちゃんがカバンから一枚の紙を取り出す。

ああ、なるほど契約書か、こつちでも紙でやるんだな。

証明する方法はあるんだろうか？ やっぱり指紋とか、あるいは魔力を通すの难道か？ こういうときドキドキしてしまうのは、仮にもファンタジック世界を愛していたネットゲームプレイヤーゆえだろうか、さてどうするかと見ていると――

「ッ」

「ヒエーッ」

店主ちゃんとギルドマスターが指先に軽く針を刺し、血を一滴垂らした。

いたそう、なきそう、ないてる。

「えっなにしているの……自傷癖あるの？ 病院いこ？」

「契約も知らないでよく行商人名乗れたネ……血判だヨ、マナの性質は人それぞれだから、精霊魔法の使える審判官みたいなヒトに言うとな誰がいつ書面をかわしたかわかるノ………いったいからあんま好きじゃないケド、んまー商売人やるならこれくらい慣れな

いとネ」

「ヒエーツ……自分一市民人間でいます……」

書面に見事に血が垂れているために死体が持つていたと言われると納得しかねない契約書を、二枚用意してお互いに持つ。これで契約は成立なのだろう、しかしなるほど便利だなあ、ネットゲームをやっていた頃はログのSSを取ったりテキスト保存された会話ログを漁ってGMに通報しあとは野となれ山となれだったけど、一応ちゃんと法が通つてる感じか。

でも傷口ちよつと危ないんじゃないかって思ったらニツサがふたりにヒールの魔法をかけた。これは自分も知っているHP20%回復のと同じだろう、指先の傷口がみるみるふさがつてつるすべな肌になる、回復魔法便利だな……自分もサブクラスでそつちを選んでおけばよかった。

なんて言ってるうちにちよつとした雑談の話になり、しかしここに慣れたふたりの会話なんてちんぷんかんぷんなのでただ固まる像のように生きるようになる。なんでも西の魔物の話がメインに、やれ金等級の冒険者だの、やれどこぞの偉い人が来るんだのもちきりだ。

私は石、銅、鉄——無機物なのだ、こころはない。

……しばしそうしていると顔の前で手を振られる。およ、終わったのかな。

「行くヨー、オルカ。寝てたノ？」

「んあつ、あと5分」

「キミが立たないと出られないノっ」

せかすものだから立ち上がって、扉の前まで移動する。

そうすると送り迎えかギルドマスターさんが寄ってくれるのだが、これがまたでかい、ほんとにでかい。なるほど荒くれの長たるものこうでなくてはならないということか。兜は脱がないまま、また声をかけてきた。

「オルカ君、私からもひとつお節介をさせてくれ」

「オルカです」

「確かにみつつの付与のできる者は世界にそれなりの数がいよう、だがそのほぼすべてが国や大きなギルド、マジックサークルの抱えとなつていてということを知つていて欲しい。それだけの価値がある、ということだ……そして、それはすべて能力は等価、ゆえに最後は生産力によって価値を決められている、ということになる」

「毎日作つてたらまずいつすね……」

「ハハハ！もしできるなら君は規格外の規格外ということだ、それを忘れないで欲しい。力の使い方を、是非に誤らないように……それと、頂いた杖は適切な人物に売ろう、いい買い手を知っている」

「毎日働かなくていいってことかな……」

理想の生活では……？

惜しむらくはアプデが来ないことだ。

「ではさらば、また会えるのを楽しみにしているよ」

「ありがとうございます、ただひとつ」

「何かな？なんでも」

「兜脱がないんです？」

「鎧ならいいんだがこちらは勘弁してもらえると……」

なるほど、どんな人にも見られたくないものはあるよな。

実はこの図体ですっごい童顔だったりするのかもしれない。

帰り際、入り口に差し掛かったら『おい』と道をふさがれた。

さっきの冒険者だ、なんだこんどこそ挑みにきたのか、こつちには店主ちゃんもニッサがいるんだぞ、自分を例え仕留めても第二第三のニッサがお前たちを仕留めるだろう……この生命は踏み越えるためにヒエーツ肩をつかまないでヒエーツ。

「あんたポーンギルドのヤツだろ」

「ヒエーツ、ハイツ……」

「いつも助かってるぜ、俺らのできない依頼を引き受けてくれたり、掘り出し物売りに来てくれたりよ」

「ハ、ハイ……アザッス……」

「この筋力増加の腕輪もな、その子が売りに来てくれたんだ。おかげでランクも上がったしなにより……おっとすまねえ！お帰りだったな、また来いよ!!」

やっぱ冒険者ギルド好きになったわ。

また来よう。

そうしよう。

6話—メイリオの短剣～D o t d o i t～

取引が終わり、帰る頃となってもまだ日は高く。

本来なら往復四時間かけて歩く道だし、帰りはリツチに馬車にでも乗ろうかと思つていたらしいがオフロードバギーの速度のせいで完全に予定が早まつたらしい。バギーゆえの走破性のおかげか道中もそこそこ快適で、なにより直線ばかりだったのが運転素人な自分でも簡単に運転できた。

なおバギー自体は門の隣に停めておいたせいか、戻ってきたころには番兵が数人あたりを囲んで調べていたようだ。やめてくださいおまわりさん免停は困ります、免許もつてなかったわ……無免許運転じゃん……。

「近づいてくるのが速すぎたし、音が大きくて驚いたという者が多かつたそうさ。次に近くに来る時は少しその、控えめにしてくれるとありがたい」

「すいませんでした……」

「とはいえ面白いものを見せてもらったよ、最近はこういうものが走るようになったんだな」

ゲームイベントでもらえるものなんては言えずに、手に入れるのに苦労したとだけ答える。

どことなくいたたまれない気になって、さあいくぞと助手席に店主ちゃんを、後部座席にフードをかぶったニッサを載せてまた走り出す。エンジン音が響いたときには周囲の番兵や通りがかりの人が一歩退いたが、走り始めてみるとおおーっ、と感嘆の声が上がった、これはちよつとだけ気持ちがいい。

オープンカーなものだから日が当たるのはまあ仕方ないとして、風を切るとその暑さも帳消しだ、ほどよい気持ちよさが身体を通り抜け、店主ちゃんも二度目で慣れたのか鼻歌交じりに外を眺めている。

一方ニッサは怖いのか縮こまっているが……。

「そういえば、西の森がどうこうって言ってたけど」

「んあー、最近だネー……魔物自体は道をちよつとはずればそこらじゅうにいるんだけどサ、西に行くと山があるのヨ。その間を抜けてくと隣の領地にたどり着くんだけどサ、そのあたりにトロールだの、オークだの、まア亜人系がやたらめつたら湧いてて通れなくなっちゃってるんだよネ」

「トロールはオートリペアが面倒だが、一撃で倒せればE経験XP値がおいしいからよく狩場の取り合いになっていたな……そんなに湧いてるの？ っていうか魔物って降って湧く

ものなのか……？」

「トロール狩りなんてそれこそ金等級超えないと無理だとおもうケド……そりや、魔物は湧くものヨ、人や他の生き物がいないトコに突然ふつと湧き出てきてその場所を占拠するのヨ。悪い神サマの使いっ走りだとか、異世界の生物とか、マナが固まってできるモノだとかいろいろ言われてるけどわーかんない」

「ああMobのポップと同じか……」

「知ってるん？」

「いやわからん」

そこまで聞くとほんとにネットゲームの世界みたいな場所だな、とも思う。

もしかしたら自分が知らないだけで、違うネットゲームだったりするんだらうか。

うぐぐ……ある程度世界観に知識のあるパートナーをインベントリに入れておくんだった。そんなふうには悔しがりつつ、ガタンゴトンブロロロ、と街道を進み続けるとはて、遠くの道を分岐するところに何か見えてくるのではないか。

「なんだっテ……ニッサ見える？」

「みえる……馬車、とまってる」

「ほほう馬車」

何かトラブルだらうか、少し速度をあげて近寄ってみるとなるほどどうして、天幕の

張られた荷車を引っぱる馬車が道のと真ん中に停止している——なるほど、よくよく見なくても右車輪が折れているようで、身動きがとれなくなっているようであった。

自分たちはそのすぐそばまでオフロードバギーを走らせると、停車させて声をかける。

またやはり、わけのわからないものを見たといった目で見られた、ニツサは縮こまつた。

「どうかしたのか馬車の人？」

「ああ、荷馬車の車輪が……いやどうでもいい!!冒険者さんか!」

「民間人だ」

「わかった、はやく逃げろ!!追手から逃げてたところなんだ!!すぐに来る!!」

「わ、わたし……」

ニツサが消え入りそうな声で何かつぶやいたがしかし、どうやら切羽詰った状況ということらしく荷馬車を引いていた行商人らしきおじさんは馬の手綱を切り離し、馬に乗ると何をぼさつとしているんだ、と叫ぶ。

さてはて一体、話す猶予もないらしい。だが逃げる準備くらいしておいたほうがいいのだろうか、停めていたエンジンに再び火を入れそして逃げようとすると—— ……おや、足音、それも人間のものではないし大きい。それは分岐していた道を外れた方角か

「らずんずんと押し寄せてくる……一体何事か、行商人さんはくそつ、と悪態をつくとうぐさま馬を走らせ消えていき、店主ちゃんも何か勘付いたのかニツサに弓を取るよう言う。」

ニツサを見てみれば、フードの下でもわかるほど目つきが鋭い。

「さきほどまでの縮こまっておどおどしていたところはもうなく、これまさに狩人の様相だった。」

さて、何が来るか—— いや、既に見えていた、あれはまさに。

「チャーニー、トロール!!」

「一攫千金つていいたいトコだけどっ！オルカ、逃げて逃げテー!」

「イエツサー了解です」

歩幅というものはそのまんま速度に直結するのだろう、すさまじい勢いだ。自転車を全力で走らせたくらいにはあるだろう、荷馬車でなんとか逃げていた先の行商人さんは頑張っていたのだな。

さてこのトロールというMob、デザインは異なるものの自分のやっていたネットゲームにも当然のように出てきていた。攻撃速度が非常に遅いし防御力も並だが、一撃の威力とオートリペアにより囲まれてかつ一撃で仕留めきれないと甚大な被害を負うとして、中級レベルにおける一種の火力登竜門となっていたMobである。

経験値効率は厄介さからおいしく、タンクにヘイトを集めまくり火力職で殲滅するトロール狩りPTは頻繁に見られたものだ。

エンジンを踏み込むころにはニッサのエルヴンタイプの弓により一撃が唯一の一体に与えられ、そして胴体をえぐるもののはやりトロール、オートリペアが発動し刺さった矢はあつというまに抜けて傷が塞がる……相性はあまりよくないらしい。

「フードちゃんつかまって！」

「う、うん！」

急発進するにも危ないとニッサをかがませ発進する、さしものスピードとはいえどオフロードバギーの加速には到底追いつけないようで、ぐんぐん距離を離していったとおもえばどうやら、諦めたのか足を止めて……おや？

反転し、背を向けたではないか。

「フードちゃん、トロールが反転する理由ある？」

「……たぶん、あの、わたしが思うには」

「大丈夫だから言ってくれていいよ」

「………違う獲物を見つけたとか、待ち構えるとか」

おお、う、てりぶる。

「じゃあつまり、自分たちがあれを見捨てた場合……誰かがまた襲われるってことにな

るよね」

「そう、なる……から、仕留めたい、けど……わたし、ごめんなさい、弓力不足で」

「ニッサの責任じゃないヨ、こんなトコにトロールが出るほうが間違い！ ……この乗り物のスピードならスピードエールまですぐに戻って救援を連れてくればいいし……」

「いや」

店主ちゃんの指示に従うのも懸命だろう、だがさしもの自分も安易に人死にを見過ごすのは道義に反する、それがよりによって——“自分の手の届くところ”だったからだ。このオルカ、付与術師である、手持ち無沙汰な状況をひっくり返すことこそが我が本領発揮なのだ。

オフロードバギーを止めると、なんでと言う店主ちゃんをスルーして反転させる。

それから後部座席へと目を向けると身を乗り出してニッサに要求するのだ。

「フードちゃん、自分のかわりに戦ってくれる勇氣はある？」

「……オルカさんがすごいのは、知ってます。でも、できるん……ですか？アツすいません出過ぎたことを……」

「ああ、自分の代わりにあいつを射ってさえくれれば——勝てる」

「字面だけ見ると最悪だね」

そうだと、このオルカ、直接戦闘能力はゼロに等しい、だが誰かの1を100にす

ることに関してには誰にも負けない。ニッサが首を縦に振ってくれれば自分はすぐにも取り掛かろう、さあニッサちゃん、まんまるみどりおめめを下に落とさないでこつちを見るんだ、はりはりはりー。

小柄な少女にかわりに最前線に立ってくれ、はなかなか最悪だろう。

だがしばし考えたあと、ニッサは目をこちらに向け、はい、と答えた。

「わたし、やります……！オルカさん、おねがいます……！」

「よしてきた！矢束よこして!!」

「は、はいー！」

思い立ったら即行動である！ニッサが小柄な身体に背負っていた、身体のサイズに對するとやや大きい矢筒を受け取る。ちなみに自分が178cmで、店主ちゃんは頭ひとつ小さい、ニッサはそのさらに頭ひとつ小さいのだ、手を出したら犯罪で牢屋の中で一生マルバツゲームをするハメになるのだ。

だが今回その法は適用されない、彼女の小さな手から受け取った矢筒にしっかりと視線を合わせるとよいしょと、いつもの付与^{エンチャント}画面を開いて解析をかける。金装飾でエルヴンタイプのいかにも豪華なものだったが予想に反してスロットはふたつで、まあでもこれだけあれば十分と、つづけざまにふたつの付与を“矢筒”に行う。

さて——今回はこれでいいだろう、十分だ。

フードを相変わらさずかぶったまま、うわー、と興味ありげに見ているニッサに目を合
わせると目をそらされた、はははこやつめ。

「できた、フードちゃんこれ使って」

「ど、どうやってつかうの……？」

「特別な挙動はしない矢にしてある、それに矢筒を直接付与したから何を入れても適用
されるんだ。君はこれができるだけ数あれトロールに当ててくれればそれで決着がつく……当
てられる距離までは自分がやるから、言つて」

「うん……！」

そう、矢筒への直接付与と矢への直接付与、ついでに弓への付与なんてものもあるの
である。火力職というか属性攻撃が必要な場面でアーチャーやホークアイがぶっ壊れ
といわれる所以であり、やろうと思えばバカみたいなコストがかかるかわりにおぞまし
い付与が可能なのが弓職なのである。

今回はマイルドだが、ははっ、見上げてくるニッサを見ると育ててあげたくも
なってしまう。そのうち12時間矢の雨とか範囲貫通矢なんかも覚えさせようか。と
にかくまあ考えるのはあとにするとして、矢筒を渡しニッサが弓を携えるのを目にした
ら、自分はハンドルの手をかけてアクセルを踏み込んだ——

「——見えたヨ！後続の人が追いかけてル！」

「こつちを見ろこつちを見ろこつちをみろー!」

なるほどならば! オフロードバギー究極技そのひとつ、クラクションを鳴らし注意を引く。

ちなみにうるさいだけで特に特殊効果はなく、趣味要素とか言われていただけのものだ、こんなところで役に立つとは……とかく、トロールの足を停めさせること程度はできたので、あとは距離をある程度つめて維持していった。

「フードちゃん、こんなもん!？」

「だいじよ、ぶ!!っ!」

弦を引き、弓を構え、射る。ニッサの弓から放たれた矢は綺麗な放物線を描いて30mほど離れたトロールに命中するのだ。さすがに弓を専門にしているだけあって刺さりどころも急所になるだろう顔付近や次いで脚に刺さっており、見事に激昂したトロールがこちらに向き直り脚を踏み出すのだ。

そのどでかい全長から繰り出される歩幅5m!なんともでかい! ……だが、そんなもの無意味とばかりに我が付与の“効果”はもう発動しているのだ、このオルカ、策略家である。主な戦法は正面突破に純粹強化。

さて、あとはちよつとずつバックします、バックします。

「オルカ、きいてない……!」

「大丈夫、もうきいてる」

「ウチは何があつても責任はキミにとらせるから……およ」

そうとも、付与したのは「硬化の」がひとつめなのだ……！

あつというまに行動不能に陥ったトロールはその場に固まり、動けなくなる。

そういえば昨日行動不能にした人はいまごろもう動けてるだろうかとささやかな心配をしつつ、更に続く効果がトロールの目をひん剥くのを目にして、勝利を確信した。そうとも、オートリペアを持つトロール、それを低火力で打ち破るための攻撃と言つたらこれしかあるまい——

——DOTダメージ、そして回復低下である。

「ふたつめの付与は「蛇毒の」……！DOTダメージを与える付与だ」

「どつと？」

「フールドちゃんにわかりやすく言うと、継続的にHPを奪い続ける効果を相手に与えたんだ、それがDOTダメージ。この「蛇毒の」は短時間の間に急激に奪うことに特化した付与で、持続時間は12秒間、ただし「累積する」……つまり」

トロールもいい加減効いてきたのだろう。

強烈なDOTダメージを与え回復効果を低減させる毒はオートリペアに対し強烈に

効き、あつというまにHPを奪っていく。このコンボがなおさらひどいのは行動不能状態のためにソロだとアイテムが使えなくなることだ、Mobであるトロールにその心配はないだろうが、どちらにせよ。

ニッサに続く矢を撃たせると、それが刺さることにトロールの顔色が悪くなつていく。オートリペアが仇になりじわじわと体力を奪われるのは地獄だろう、おまけに的がただでさえでかい上に動けないものだから完全なものであり、六本も刺さるころにはもはや目を剥いてやがて、切れた行動不能効果がその肉体の死を意味していた。

「……………やった?」

「やったヨやったヨ!? すつごいじゃんニッサ! トロールを一人で仕留めたっちゃー金等級も夢じゃあ」

「……………オルカのおかげ……………ありがと、でもわたし……………がんばった」

トロールが崩れ落ち、ゆつくりと倒れるのを前に店主ちゃんがニッサを抱きしめわしやわしやと撫でる、この二人はやつぱり仲いいんだな。

この世界に来てはじめての実戦、だというのにどことなく現実離れしている感じがしてようやくだが、ふいー、と自分が息をはいたのを感じやつぱり緊張はしていたんだなと察する——はあ、帰ったらやつぱり「シャワーの」がついた蛇口にとびこみたい。

目の前に突っ伏してはあ、とため息をつきながら、ふあー、とあくびもする。ううつ、体力がたりない……STRとかVITに振るんだった。

なおクラクションが鳴った、みんなびっくりした。

7話―メイリオの短剣とトロールとろとろ

いつも下を向いているのは、人が苦手だから。

いつも目をそらすのは、見られるのが怖いから。

いつもフードをかぶっているのは、見られたくないものがあるから。

だから人の多い場所は苦手なの、いつもはケイと組んで狩りには出るけど、こういうふうには街に出ることはめつたにしない。今日はケイが用事で出てるしみんなも依頼に連れてこまいだし、リリーはあれだしで人手がないから仕方なくチャーニーのあとをつけていくことになった。

一緒に行くのは昨日ここにきたばかりのオルカさん。

一言で言えば何を考えてるかわからないひとで、でも確かに実力のある付与術師。エンチャンター。 ”

みつつの付与”を簡単に成功させたうえに、精霊術が少し使えるわたしにも知らない付与を知っているひと。だからますます怪しくなつて、でもなんとなく悪いひとじゃない付与ってというのがわかるからいつもみたい縮こまって様子をうかがつた。

でも彼の「すごいところ」、それだけじゃないの。

なにもないところから突然乗り物を出した、乗り物って思うのは彼が出してすぐ乗ったからで、今まで見たこともないような形と音。なんでも「オフロードバギー」っていう彼のふるさとの乗り物らしくて、彼の説明はまったくわからなかったけど、火と雷の複合魔法で動くものなんだなっていうのはわかった。

えっ、あつ、わたしも乗るの、えっ。

やつ、はいはいはい！ひゃあ！

こわかったけど、はやかった。オルカのいるところではこういうのが当たり前に走ってるらしい。こんなに速いとぶつかったら危ないなっておもったけどでも、ちゃんと法律があるそう。文明がすごーく発展したところなんだなあ、って思いつつ、でもまだやっぱ彼の人物像がぜんぜん見えてこなかった。

でもそうしていると、ふとオルカが体調の悪そうな顔をする。

だからつい身体が勝手に動いてヒールはいるかな、って声をかけちゃった。

——わたしの悪い癖で、イヤな想い出。

気分の悪そうな人がいるとつい声をかけちゃう、でもオルカはなんでもないみたいだからよかった。

冒険者ギルドは相変わらず苦手、こわい人ばかりだし。だからわたしがチャーニーを

守るためにここにいるのにチャーニーについていくだけになっちゃって、オルカのことを置き去りにしちゃった。でもオルカはなんでもなく冒険者の人をいなしてついてきたみたいで、やつぱりわたしと違って普通の人はこうなんだなあ、って痛いほど思う。

……商談はすぐ終わった。ギルドマスターさんはあんまりこわくない。

見た目はこわいけどでも、他のひとは違う気がする。

またオルカが冒険者の人に絡まれてたけど多分大丈夫だろうって放って、足早に外に出る。フードをいつもかぶってるから目立つのはわかかってるけどでも、だからなおさら外せない。わたしの顔をあんまり人に見られるわけにもいかない。こんなだからみんなに比べるとわたしはできることが少なくて迷惑かけちゃってるのが、ちよつと、つらい。

だから今日はつかれたって、人と関わるだけでつかれるなあって帰りたい気持ちがある。だからびよんってオフロードバギーにのって、それがうかつだったってまたひやあーってすごい速度で走るのに振り回されながらも、ここでわたしは今日一番の大仕事をする事になった。

——トロール。

西の森に最近湧き出した魔物、本来はもつと奥地やマナの濃い場所に出て、そしてな

により他の魔物すら食し糧とし間引きと肥大化の双方を行う厄介な魔物。わたしの三倍の背丈を持ち、熊どころかオークですら比にならない筋肉の鎧を身にまとう、いわゆる“力”を象徴するかのような魔物。

こんな街道に出るなんて……信じられないと思いつつも、でも弓を射る。

綺麗に吸い込まれた矢は傷を与えるけどでも、やっぱり効かない。そうだ、トロールには傷を勝手に塞ぐ能力がある、だから浅い傷はまるで意味がないんだ。わたしの弓矢は狩猟のためのものでそして、私自身が持つ能力は回復に寄ったもの。

逃げなきゃやられる……！考えるころにはオルカがわたしに呼びかけてくれて、わたしがかがむと勢いよくオフロードバギーを動かしていちもくさんに逃げる……速さは倍以上もあって、トロールはぐんぐん引き離されていった。

……どつと緊張感がとけるとともに、自分が無力だったことが脳裏に走る。わたし自身、もともと戦闘能力はギデオンやメイリオ達に比べて低いから、こんなみんなを守らなきゃいけないときなのに弱くて、つい落ち込んじゃう。

このまま逃げるのかな、わたしはいつだって、逃げるのかな。

そうしていると不意に、まだトロールを見てたらしいオルカが声をかけてきた。

「フードちゃん、トロールが反転する理由ある？」

……？ 魔物が目の前の目標を振り切って動くななんて……それもトロールみたいな

知性の低いのがするなんて。待ち構えて「狩り」をするか、あるいは……違う獲物を見つけたとき、ああ、なんてこと！絶対に勝てない相手に出会ったこんなタイミングでこんな不運が重なるんだ。わたしはやっぱ「誰も守れない」。

ごめんなさい、仕留められるなら仕留めたい、でも力不足。

わたし弱いよね、ごめんね……って、言いかけたところでチャーニーがフオローしてくれて。

——でも、それをオルカが止めた。

自分のかわりに戦ってくれて言われて、混乱する頭でできますって答えて、謝りもして。そしたら矢筒をよこして言うものだから渡すの。

わたしの矢筒はかつてエルフの木工師が作ったもので、軽くてしなやかで、裝飾もきれいで——なにより、想い出の品だ、この弓も。だからもし「付与^{エンチャント}」を行うなら絶対に失敗はさせたくないって思ってたから、ここにオルカがいたのはきつと成功だったのかもしれない。とっさで状況を選んでられなかったのもあるけどすべてをオルカに任せて、矢筒がぼうつと緑色に光ったのを見て、確信する。

矢筒に入れた矢そのものを変化させる「付与」——これも知らない。

オルカはこれを「当てればいい」って言ってくれた。

当てるだけなら、わたしは誰にも負けない自信はある。だからそう言ってくれたなら

全力で期待に答えるのが義務なんだってふたつ返事で戦いを引き受けて、弓を構えてオフロードバギーの加速に追従するんだ、もうこの挙動には慣れたから走りながらでも弓を構えることができた。

この乗り物すごい、馬と違ってずっと平行に動き続けるし、四人まで乗れるし……弓の使い手にとってだけじゃない、これがぶつかるだけでとつもない武器になるしそれに、三人の遠距離攻撃手が乗ったらそれこそ動く弓やぐらだ。こんなものが沢山生産されているなんて、オルカの国は軍事力もすごいんだろうな。

……いけない、気を集中しなくちゃ。

弓を射るのは簡単、でもコツを掴むまでが難しい。

とりわけむずかしいのはふたつ、弓が持つクセと、風だ。わたしの弓は弦の引きに對し勢いが強すぎるからそれにあわせて使わなきゃならないし、風を読むことができないと風に吹かれて曲がる矢は狙いに当たらない。

……わたしはずっとやってきたから、こんな大きな的を外すわけないと、弦を引いて矢を射る。放物線を描いて食い込む爪のように差し込まれる矢はトロールに一撃を加えてでも、傷が浅かった。やっぱりわたしじゃダメなのかなって思いながらも、もう一度、きつと何かが変われると思って矢を射る——そしてそれは現実のものとなった。

「オルカ、きいてない……!」

「大丈夫、もうきいてる」

わたしが狼狽するのをよそに、オルカは力強く言い切った。

事実そうだ、わたしに射られたトロールはその身体を硬直させて動けなくなっていたから。

オルカが言うには「硬化の」のエンCHANTらしくて、それにさらにどつと？ダメージが付与されているらしい。つまり毒を塗ったような効果でトロールの回復を低下させたうえでダメージを与えているんだってことで、ならまだまだと、わたしは矢を続げざまに射る。

矢を六本も射ったころだろうか。

トロールの様子が急激に変わる、目を剥いてまるで窒息するネズミみたいになって、口から泡を噴き始める。それでもまだ死なないんだということが、この魔物が「力」を象徴する所以なんだろうなと思ったほどだった。

でもすぐ、トロールの硬直が解けて沈み込んだことが自分が勝ったことを思わせる。

チャーニーは喜んで自分を抱き寄せて、でも自分はほぼ呆然で、簡単にトロールを仕留められたことがその時はぜんぜん信じられなかった。「自分でもできた」ってことが信じられなかった……オルカって人はまだよくわかってないけど、でも。

——わたしたちにとって心強い、ってことだけ、わかった。



ポーンギルドに戻ってきた頃合いでもまだ日は高く、さてはて今日は次はなんの予定が入っているのか、おゆうはんはどんなものかなどと考えつつ扉を開いてただいまを伝える、も、ポーンギルドには誰もいないではないか。あるのは鎮座する黒色全身鎧の飾りだけだ。

「おかえり三人とも、ずいぶん早かったね？」

ヒエーツ、アーリン団長だった。ぴくりとも動かない全身鎧で廃教会の中央に立っている姿はなかなかホラーチックである、イベント戦闘で戦う系のボスだ。鎧を倒しても中身を浄化しないことには倒しきれないのだ。

「こいつの乗り物が、すごく速くってネ。アーリンも一度乗せてもらおうといいヨ」「う、うん……」

「ほう……それは楽しみだ、君の“インベントリ”にはさまざまなものが入っているみたいだがそんなものまであるとは……自慢じゃないがかつては乗馬も嗜んでいた身で

ね、今度私が出るときにでも乗せていつておくれよ、大抵の乗り物は乗りこなせる自信がある」

「アツ…はい」

意地悪そうに言う店主ちゃんと、素直に答えるニッサ、実に対照的だがアーリン団長は素直に受け止めてくれているのだろうか。だがオフロードバギーの乗り心地は自分としてもなかなか良かった、次の機会があつたらまた使おう。

実際の車の運転もこんなものなのか、と思いつつ、免許取得を諦めていたことを思い出す。こつちで何か取れそうな資格でもあつたらちよつと手を出してみようか、一級トロールハンターとか。

「さてはて、報告くつて前に、見せたほうが早そうだね」

「いい成果は得られたってことだねチャニー、君なら安心だ」

「んにやく見たら驚くヨー、ね、ニッサく♪」

「うやうくやめてー……」

後ろからニッサを抱き、うりうりと撫でる店主ちゃん。百合の花園はここにあつたのでありますかわ？華が咲き乱れるでございますわ、そう形容したい景色を前にしつつ自分は自分でインベントリを開き、いつものように端末操作の要領で今回の“成果”をアーリンの前に出した。

ドスン、と音を立ててまず置かれるのはトロールの脂だ。あまりいい臭いはしないものだが四角くほとんど豆腐のように綺麗に切り出されており、職人技を感じる——
というよりどうやら、ドロップアイテムに関してはある程度自動で回収されるらしい。トロールからアイテムを回収したとたんトロールのどでかく固い胴体がインベントリに吸い込まれ、次の瞬間にはアイコンに落ち着いていたのだ。

“トロールの肉”、“トロールの脂”となるふたつのドロップアイテムで、これもかつてのネットゲームにあったものだ。肉はゴミ箱行きだったが脂は特に、上等な消耗品を作るのに役に立っていたから使えるだろう、この世界の素材に関しても知っておかねば。

「詳しいことはあとで聞くとして……さて」

アーリンはほほう、と唸ると脂を丹念に見た。

全身鎧がぶよぶよの脂を観察する姿というのはなかなかにおもしろい。

「上等なトロールの脂だ、いい値段で売れると思わないか店主ちゃん」

「そうねエ……こんだけあったら金貨で二十枚いけるんじゃない？肉も売れるシ」

「えっ肉売れるんだ……こわい」

「アンタの故郷じゃどうだったか知らないケド、こっちじゃトロールの肉は珍味よ珍味、好事家やその手の業者に売りつけりやそのうちジャーキーとか角煮になつてまたその

へんで見られるんじゃない？」

角煮にするのか……言われてみると臭みはあるがいい色をしていてうまそうにも見えずなくもない、いややっぱ見えない、あのトロールと思うとやっぱ見えない。ネットゲームの頃はアイコンとプレーバーテキストで見えていたものが目の前にあるとなんとも言えない気分になるものだ……なきそう、ないた。

さて、これはどうするんだろう、ここに置いておいていいのかな。

「すまないが、よかつたらもう少し持つていてもらえると助かる。急な入手だったもので手配がなくてね……ただインベントリなら持ち運びは楽だろうし、明日にでもメイリとか店主ちゃんと一緒に加工業者のギルドにでも売りにいけばスペースも開けて一石二鳥だろうさ」

「ほほう」

「まあーた出張かヨー、ウチ以外書類仕事できるヒトおらんでシヨー」

「私がやっておくから、たまには外でも回っておいで」

「はいはいはーい、んじや費用は経費もちネー」

暗に遊んでこいってことなんだろうか。なるほどここでの娯楽、気になる。

最大の娯楽である隔週のネットゲアアップデートがなくなつた以上、匹敵する何かを探さねばなるまい。このオルカ、ギャンブル中毒である、ガチャは回したいのだ。金銭を賭

けるほんとの賭博ではない、ガチャを回したいのだ。

それっぽいものがないだろうか……というか、ガチャがないだろうか。

A賞でかわいいパートナーやめちやつよなお洋服が手に入るのだ。

「ううっ……」

「ん、どした？ダイジヨブ？キツかった？」

「いやホームシック」

「ああ……そういうのあるよネ。大丈夫大丈夫、軌道に乗ったら一度帰ったりしヨ」

「そう、です……！帰るところがある、って、それだけでいいとおもいます……！」

ううありがとうみんな、なきそう、ないた。

店主ちゃんがほんつと肩を叩いてくれるのがうれしい。

つというと、メイリオはどこにいったのか。端で煙草吸ってるリリアナしか見えない

が。

「ああ、メイリオは確か……」

「——ちよつとアーリン!?すぐ来て!？」

はてさて、聞き覚えのある声だ、メイリオっぽい声で、メイリオだ。

廃教会には四方に通路があり、それぞれ厨房や二階、出口といった部分につながっている。そしてもうひとつもまあ、当然必要なところにつながっているのだ、人間的な生

活に必要なものとうと当然決まりだろう、浴場である。メイリオの声はその方角から聞こえ、全員が一様に目を向けた。

「蛇口がおかしいんだけど!? こう、お湯が出るっていかしやわわー! って水が裂けるってどうか!? こう、すごい、付与されてる、って感じがするんだけど!! なんかしした!? なんか、こう……こう……あつ……」

「ああ、その付与は、〃シャワーの〃だな。蛇口に使うと温水シャワーが出るようになるやつで先にやっておいたやつさ。便利だとは思うんだが確かに……無断でやったことは詫びよう、もし水風呂がいいなら解除するし、なんならデュアルシャワーにしても……」

「いや、オルカなら納得だけど……うん、わかったわ、また浴びてくるから」

バスタオル姿のメイリオがひよこつと顔をのぞかせこちらを見て声をかけてきたので、心当たりがある自分が即座に答えるとメイリオがひよこつと、萎縮した様子を見せる。

店主ちゃんが掃除をしている間に行ったトイレついでにやっておいたもので、あとで使おうと思っていたものだ。試運転を済ませていなかったことだけが気がかりだったがどうやら、メイリオが使って大丈夫だったということは使えるものだったらしい……実験台にしてしまったような部分は悪いことをしたな。

「悪い、試運転をさせるような形になって」

「それはいいんだけど、その」

「おう」

ふむ、言いたいことがあるようだ。

さてはて、不備があつたか……なら早急に直したいものだが。

続くメイリオは、ぼそりとだけ口にした。

「……謝るとこ違くない……？」

隠していた身体をさらにひよいと奥へと寄せ、戻っていくメイリオ。

赤のセミシヨートが揺れ、あとに水滴が一瞬飛んだ。

えっ……完璧身体隠れてたし、事故だし自分悪くはなくない？

どうなのどうなのそこんとこ、とふと右を見て、左を見て。

ニッサは縮こまり、アーリンは笑っていて。

——店主ちゃんには笑いながら頭をはたかれた。

8話―メイリオの短剣くウィールスミスく

街というもので狭いものを見たことはあんまりなかったものだから、この街の例外なき広さに直面したときもそうではなかっただろう。ただ唯一問題があるとしたらこの廃教会のある貧民街は北の端に位置しており、どこにも遠いのである。

よりにもよって今行こうとしている「製造者ギルド」のスピエル支所は南に位置しており、なるほどだからといってこの道幅ではオフロードバギーで駆け抜けるわけにもいくまい。慣れない脚でひたすら長距離の歩行を強いられていた。

「もうダメだ……自分はここに散る運命、あとの世界を頼んだ……」

「だらしないわねえ、まあ職業柄身体は動かさないとしょうけど。ほら水飲む？」
「いうてウチよりないって、そりゃあかんでシヨ……」

メイリオから受け取った水を飲み、そして返す。

なるほど確かに、ゲーム画面上ではWASDやマウスクリックで動いていたものだから気にしていなかったが、ゲームキャラと同じスピードで動き続ければ本来の自分の体力ならすぐにバテるのも無理はない。あいにく自分はM PはぶつちぎりだがS P

マジックポイント
スタミナポイント

は地を這っているのだった。

ううつ情けない、だがLvとステがカンストしている以上多分だが、自分はいくら鍛えてもEXPは虚空に消えていくしスタミナはつかないんじゃないか？という疑念が宿り、ならば仕方ないと胸を張った。

このオルカ、決断は疾い。

「ところで、製造者ギルドってなに？武器製作者ブラックスミスのジョブなら知ってるけど」

「それだけ知ってれば上等よ、錬金術師や冶金工タタラ、装備製作者みたいなのが集まってできたギルドの大本ね。性質上冒険者ギルドとは違って分化したところが無いのが特徴よ。っていうかそもそも、製造業同士で余計な争いをしないようにしようって生まれたギルドだしね」

「はえー……ネットゲームにもあったなあそういうの」

「だいたいこのネットゲームにはいわゆる戦闘職と生産職があり、それぞれ役割が違ってくる。」

そして互いが組む理由もだ、戦闘職は互いにPTを組み合せてMob狩りやボス狩りに出るのが主な理由でたまに生産職が交じるのは身内の趣味だったりとか、あるいは戦闘職だけでは埋められない部分を埋めるためということが多い。

だが生産職だけで固めるギルドのようなものはたいてい自分で使うのではなく、マー

ケツトでの金策目当てということが多く、しかしながら生産職が装備や素材を流さないと戦闘職は困ることが多く、彼らがいないとゲームが成り立たないということは往々にしてあるのだ。

一方で悪いところでは買い占めや相場操作を行うこともあるため、そのすべてが歓迎されるわけではない。事実自分はフリーだったが、たまに被害に遭うことはあった。相場読みも楽しいと言えばウソではないが。

——という想い出を思い返すと、第一印象はなかなか大丈夫じゃないがまあ、なんとかなると信じたい、信じよう、信じる。

「やっぱりマーケツトボードの前にずっと待機してたり？」

「依頼表の前に人ばかりができるのは冒険者ギルドの話よ？」

「マケボ戦士はいないのか……」

ちよつとだけさみしくおもいつつも、休憩をはさみつつ街を縦断した。

街を縦に横切る道中ではまっとうな教会だとか、やれ別のギルドらしき建物だとかが見えなるほど、やはりある程度建物を身奇麗にしているあたりまともなところはそれが普通でポーンギルドの建物がそうであるだけらしい。

同行している店主ちゃんというにはポーンギルドの廃教会は古くに街の経済が困窮

したときに、支援金が打ち切られた都合で打ち捨てられたものであるらしく、そこでも使われていないのを目をつけて引き取ったのがはじまりだそうだ。

「最初の掃除が、いっちばーん大変だったケドね」

「懐かしいわねえ……まともな掃除のやり方知ってたの、店主ちゃんとリリーしかないなかったから」

「リリアナ嬢、煙草吸ってるだけじゃなかったんだな……」

「リリーはああ見えて器用よ？腕のいい錬金術師だし、ギルドの収入の半分くらいはリリーがいなかったら成り立たなかったんだから」

「ふあえー」

ウィッチかと思ったが錬金術師なのか、錬金術師はゲーム内では文字通り錬金術で薬剤や素材を作るのが主な役割で、付与エンチャント術師としてもなかなか懇意にさせてもらっていたクラスだ。HPMPSPの回復からスキルブースト、生産成功確率上昇までさまざまな薬剤を作れるのが魅力的なところで、いわゆるナモノ系の素材から成分や加工素材を抽出できるのもこのクラスである。

彼らがマーケットに生産用薬剤を並べてくれているいなかったらいまごろ自分は干上がって、マウスをおいしいねえキーボードおいしいねえと撫でていただろう、マケボ戦士達には感謝しなければいけない、あとでリリアナ嬢にも感謝しておこう。

そういえばそれらも製造者ギルドにいるとのことであるほど、こちらにおけるそれらの製造過程を学んでおきたい機会だと思った。

「……つさて！何度見ても華のないとこだこと！」

メイリオの言葉で自分がそこにたどり着いたことに気づき、ほほうここが、と製造者ギルドの外観を見る。なるほど機能美、機能美、といった華のない外観だ。だがこういうギルドの拠点ホムが殺風景なのは割とネットゲームでも見られる光景なので、やっぱり職人気質の人間は似た感じの感性を持つのかな、と。

考えていると、店主ちゃんがノックもせずに入っていく、メイリオもだ。

彼女らは門構えにいる警守を顔パスすると、自分のことも連れだと言い通らせる。護衛という風体じゃないからまるで女の子についていく軟弱者ボーイのようだと見られている自覚があるので、警守さんの目線はスルー、既読スルーである。このオルカ、スルースキルが高い。

「さて内装は」

「なんもおもしろいものはないヨ」

なるほど店主ちゃんが言うと言得力がある。

角ばった普通の、なんというかいかに受付なスペースがあり、入り口にすら資材が置いてある。かつそのままずんずん進んでいく店主ちゃんについていけばそこには、潔

いほどどでかい作業場のようなスペースがあるのだ。パーティーションでいくつものに仕切られた作業場はちらほらみれば炉の密集したスペースで剣を打っている鍛冶職人だの、鉄鎧の留め具をせこせこ留めている職人だのがひしめきあっている。

錬金術系統はさすがにこの作業場と一緒にするとまづいのか分けられているのだろうか、見当たらない、さみしい。調理に関しては調理場だろうし、ここにはなるほど、うるさくして問題ない仕事”が集められているのだろうと納得した。

「ひよつ子オ!!インゴッド十個もってこい!!銀だ!!」

「はいっ!!」

「やっぱニツカ銅!!」

「はいっ!?!」

「ヒエーツ……」

これが体育会系というものか、いや職人氣質というものか。

ヒエーツヒエーツと唱えながらそんな作業場を進んでいくと奥に扉をはさんだ倉庫がありそして、そこは外から開け放たれた搬入口がある場所となっていた。なるほど直接ここに持ってきたほうがお互い都合がいいというもの、ちやうど空き時のよう店主ちゃんとメイリオが倉庫担当らしい方に話を通すとちよちよいと、店主ちゃんが指でここに置き、といった感じで指示をした。

ふむ、ちょうどいい板がある。

「見せない方がいいって言ってた気がしたけど、いいのかな」

「今後取引する相手になら、遅かれ早かれヨ、ランザは信用できるからさあ誰か来る前にはやくはやく」

「ほいほい」

いつものようにインベントリを操作し、トロール脂をほいっと放り出す。

倉庫担当者であるらしい、くたびれた作業服を着て帳簿を手に持ったままの茶色髭ランザおじさんはほう、と軽く驚き自分にインベントリを持っているんだな、大したものだと褒めたたえる。手慣れているあたりがさすがに年季を経ているなと思いついて、メリオにいい人材を引き入れたなとも言った、こうまで褒められると嬉しい。

「しかしトロール脂か、まだ金等級の冒険者が集まってないから本格的な討伐はまだって聞いてたが、西の森のほうはもうおっぱじまってるのか？トロール脂が大量に出回るようになるなら買取価格は引き下げるしかないぞ」

「はぐれ」を仕留めただけヨ、ニツサとオルカがさ。んだから早いとこ捌かないと値下がりしちゃうんじゃない？トロール脂は多分このへんじゃこれだけだシ、うまく捌けばそれなりには儲けられると思うけどなあ」

「なるほどなあ、じゃあさっそく見せてもらおうが……なんだ……上質だな。刈り取りも

本当にうまい、王都のほうでもこれほど上質で純度の高いトロール脂は見ないと思う。これなら十分に買い取り価格をつけられるが坊主がやったのか？えーっとメイリオの嬢ちゃんこの……」

「オルカです」

「オルカか、気に入った。君さえいいならまたこっちに売りに来てくれよ。こいつは逃せるものじゃないからな、色をつけて買い取らせてもらう……しかしわざわざ四角にして持つてきてくれたのか？こつちとしちゃ計量の手間が省けるからありがたいことこの上ないからな、そこも更に色づけしておこう」

「ヒエーツ……」

インベントリに入れたら自動で四角くなったなんて言えないのでちよつとヒエーツでごまかしておく。

労せず得取るってなんかちよつとだけ悪い気がするの、自分が日本で生きていたせいなのだろうか。でも既に付与でたんまり稼げるって聞いているからなんともいかんとも、こんがらがりでちよつとだけ頭お菓子なる。

ランザ氏はトロール脂をよくよく観察すると、“スペクタクル”解析“”のスキルをもつて多分成分

解析なのだろう、純度とかこう、いい感じとか、そういうのをする。そういえばニッサも持っていたし、いうほど珍しいものじゃないんだろうか、というかスキルもいろいろ

ろあるんだろうなあ……あとでメイリオに聞いてみよう。

「品質が本当にいい、本当に見たこともないくらいで……いやすまない、職業柄こういった“銘品”を見ると興奮してね。値段はすぐに弾き出そう、長持ちしないものだからこんなにもいいものはすぐ加工せねば」

「そんなに褒められると自分がつけあがりですよ」

「いいとも、いい腕を持つ人間はどんどんつけあがってそれで、己の限界を知るとこれまでとつとと行くべきさ。自分が“こんなもん”なんて思ってるうちはその先には行けないし、自分の腕を買い叩かれるのがオチつてもんだよ……ポーンギルドにいなけりやウチで雇ってただけどなあ。まあ、そっちはいい人材を手に入れたよ本当」

「でっしよー！こんなナリだもの、この短剣を売ってなかつたらただの貧民街貧相の物売り男と思つてたわよ！」

メイリオに背中をばばんと叩かれ、褒められているのかどうなのか。

だが腰元の短剣、“みつつの付与”がつけられたエルヴンナイフをメイリオがランザに見せるとそんなことも言ってる場合ではなくなる。ランザの目の色が変わったのだ。その目はちよつと自分のような経験の浅い人間には読み切れないが多分、職人の目というやつなのだろう。

Lv40帯の装備なんて店売りでひかえめお値段で売っていて、生産Lv上げのため

に山というほどスロットを使い潰されていたものだがこちらでは相当な業物らしい、使い潰し用にインベントリにそれなりの数が残っていることがなんだか申し訳なくなる。

なおインベントリの同時確保上限数は999で同じ付与の場合また同様にストックされる……まあそういうことである。

「これはどこで手に入れた？」

「オルカが売ってたものだからあたしには……オルカ、実際どこで手に入れたの？」

「ウチもすごい気になってタ」

「ふむ」

三者三様、とはこのさまか。総じて期待値の高い視線を向けられるさまに、どう答えただものかと。

だがしようみ、隠すのも今更という気はする。だが手元にあと六百本以上あると言ったらどんな顔をするだろうか、はてさて、ここでは多分エルフの装備というだけで業物らしい、結構なお値段になるのだろうか。これを売って余生を過ごそうおじいちゃん……このオルカ、怠惰である。

されどこのオルカ、正直者である。

正直者でいれば善き人生を送れると、そう信じている。

「まだまだある」

「本当か!? 君さえよければ売ってもらえると嬉しいんだが! エルフの作る武器を最近壊しちまつてな、参考資料になるものが無くて困ってたんだよ」

「別に一本くらい構わないけど、ふむ」

「あー……オルカ、オルカ、ちよつといい?」

はてメイリオ、なんでしよう。

「エルフの武器がなんで高いか、持つてるなら知ってるよね?」

「わからんちん」

「ああつ、もう……エルフはね、排他的じゃないけど閉鎖的な集落で過ごすのよ、だから当然技術や“モノ”の流出をすごく気がかりにするの。信頼する人にしか武器なんて譲らないのよ……それを知った上で、あたしにこれを売ってくれたのよね?」

「いやエルフの友達はいないからなあ……」

「あなたじゃ奪う盗むなんて器用なことできないだろうけど、あなたほどの人だから信頼してこれを譲ったんでしようね……でもこれの作り手が不憫ね……」

はてさて、このオルカ、やはり無知である。

そんなものだったのか……剣と短剣、弓まで持っていたものだから、どれにするかと聞こうと思っていたのだが。なるほどこれを安易にバラ撒くなど釘を刺されているのだろう。しかし言った手前引きもできない。さあてどうする、ううむどうする。

「まあ売るのはあなたの勝手だから何も言わないわ、あなたほどの人にとってはその程度の価値なのかもしれないし」

「ふむむ……じゃあ剣だけ譲ろう、長剣をひとつ、お近づきの印に」

「譲る？今譲ってくれるって言ったのか？」

「これは別にエルフの友人からもらったものでもないし誰が悲しむでもないから、ならここで生まれるランザ氏との信頼を願って寄贈することにするよ。『付与』は自分たちでやってくれとは言っておくから、まあやっぱりその、仮にも男だし、言った手前だし、だし」

「ありがとうオルカ君！……君の名前をマスターに覚えさせておくよ」

「ヒエーツ……」

このオルカ、見知らぬ人は苦手である。

普段はずかずか人の領域に入っているように見えて、その実内心結構びくついているのだ。まあ考えるより先に身体が動いてしまっただけは仕方ない、つまるところノーカンということである。人見知りというほどではないし恩義は感じるから、コミュニケーションは、きつと。

ランザのハグを全身で受け、おじさんパワーを一身に受ける。このランザ氏コミュニケーション強者である、間違いない。

「んまア、それくらいなら……オルカ、あとでウチからも言うことあるから」

「いやです」

「あ？」

「ヒエーツ……」

このオルカ、お説教も嫌いである……。

結局そのあと、販売のとりまとめは店主ちゃんがこなした。

しかし40帯の装備ですらこの扱いなのだ、50、60だとどうなるだろう。

仮にストーリーイベントの報酬の魔王剣とか出したら、どうなるのか。

このオルカ、ちよつとだけ心がドキドキしている、悪いオルカである。

9話—メイリオの短剣～女王の王冠～

帰り道というとちよつとだけワクワクするものである。

理由はたぶん小さいころに帰り道はいつも冒険の連続だったこととか、歳をとるようになってからは買い食いや寄り道が常套になっていたからだろう。事実いま自分はずらふらと道をそれたり立ち止まりながら、親に手を離された子供のようにあちらの露店やこちらの出店へ行ったり来たりしていた。

無論ママはメイリオと店主ちゃんである、でもメイリオママ……という属性は多分ないし、店主ちゃんママも多分ない。あつたとしても毎朝フライパンをカンカンカン！すごい朝！あさ!!と起こしてくるタイプであるとは思う。

「いいフライパンだ、素材は何を使ってるのかな」

「お客さんいいところに目を！これは貴族様の台所から流れてきたちよつとした趣味品で、中古ですがミスリルが混ぜ込まれてるんだよお！火を使わないでもマナを流し込めば熱がこもるってもんでね、いやあ……このへんじやこんなもんはなかなかお目に

かれ」

「いい音が出そうだ」

「!?」

「買った」

無駄遣いを……、という店主ちゃんの呆れた声をうしろに、お財布から金貨を取り出し支払う。

この世界に来てからはじめての買い物だがこのオルカ、予習は万全である。金銀銅賤といった分類で分かれていて、賤貨を十、銅貨を百円玉基準とするなら銀は800〜1200、金は70000〜14000程度をうろうろしているそうだ。なぜ後者があいまいなのかというと銀相場や金相場で価値がちよこちよこ変わってくるらしく、商業ギルドの公開掲示板で相場はわかるそうなの。

その上に白金やマナ結晶をそのまま貨幣にしたものもあるが、商人の大規模取引や国家としての取引の際に使われるいわゆる“手形”の側面が強く、あまり見ることはないらしい。

そうしていると、金貨を見た露天商さんが苦い顔をした。

「おや金貨か、すまんがお客さん、ちよつと今金貨の値が安くてねエ……もうちよつと銀を積んでくれないか」

「ううむせちがらし……でもやむなし」

「オルカ」

なるほどやむない、人間生活あるもんね、と銀貨を追加で出そうとする。と、店主ちゃんに横合いから止められた、というか前にずいっと出てきた。はてさて何かしてしまっただか、と見ていると、任せな、と店主ちゃんが手で自分を制する。

なにこれかつこいい、キュンとしちゃった。

「おじさくん……このフライパン、だいぶ使い込まれてるよねエー」

「いやあく流れモノだし、多少は、仕方ないよねえ」

「加工が剥がれるくらいに使い込んでるのは、ちよつと違うんじゃないかなア」

「いやあ、でも綺麗だろう？、十分使える、よねえ」

「そうねエ、〃ミスリル粉末がこそげ落ちてる〃のはなんでだろうねエ」

「うっ……」

にらみあい、とはこういうものなのだろうか。蛇と蛇、先に動いたほうが負けるのだ、俺は毒を持っているぞ……というばかりの無言空間がしばし場を包み、通りの喧騒だけが流れては駆け抜けていく。

……先にカエルになったのは、露天商のほうだった。

「参った参った！ 確かに使い古されたものじゃああるけどさ！ でもまだ使えることだけ

は保証するから、な、な！」

「ガラクタ売りつけよってわけじゃないんだネ」

「詐欺ってわけじゃない程度に騙し合いはほどほどがいいのさ、言い訳できる程度のな。編み込まれたミスリルに価値はあるしなにより、綺麗にここまで磨いたんだ……綺麗な飾りにはなるだろ？ なにも完全に使えないものまで売るほど悪辣じゃないよ」

「ふむむ、じゃあ買おう、スロットはないけどこういうの欲しいから」

「毎度毎度、銀貨7枚までまけておくよ、詫び料だ」

おおう、これは勝利宣言。

お財布から銀貨を取り出し渡して握手、ちなみにこのお金は出る前に、メイリオが先立つものは必要だろうということ。店主ちゃんに頼んで自分に渡してくれたスロ3杖の売り値のいくらかだ。店主ちゃんとしても自分にはお金の使い方学んだほうがいいとのこと、補って余りあるくらいの額を渡してくれた。

使いに使って冒険しろということだろうか、ならばこのオルカ、散財の準備はできている。

さあ皆のもの、先へ進むぞ。この世界の出店という出店を買い漁るのだ。

とりあえず日が高くなって暑くなってきたから、飲み物買おうね。

なおそのあと、ちらっと立ち寄った掲示板の銀相場では銀が高騰していた。

が、その出会いも発見もそのすべてがいいものと限らないものがある。また帰り道に息を切らしてしようがない休憩でもしよう、と座っていたベンチにおいて、自分はそれを肌をもって感じるようになった。

「あらまあまあ、あそこにいるのは『いちごジャム』のメイリオちゃんじゃありません
よっぺ。」

さてはて、いかにもな挑発じみた声があからさまにこちらに向けて届けられている。自分にはなんのことやらさっぱりわからんちんであったがふと横に座っていたメイリオを見ると、これでもかというほど嫌な顔をしていた。それこそ不機嫌を通り越して嫌嫌機嫌といった感じで、ヒエーツとつい声が漏れてしまう。

ただ視線はそれとは別に、一直線に別の場所をにらみつけるのだ。別の場所とはど
のつまり——声の聞こえたところだった。

「……メイザバス、今月の取り立てならもう払ったはずよ、消えてくれないかしら」
「あらあらメイリオ、『クイーン』とお呼びするのが筋じゃなくって？あなたが私達か
らお金を借りてる事実は変わらないのだから、少し貸してくれた相手を敬うべきだと思
いますわよ？」

「誰が！新人騙して不当契約結ばせるの、あんたの常套手段だつて知ってるんだから!!」
「口を慎みなさいメイリオ、どちらにしたつてあなたの立場をわきまえることね……と
まあ、今日はデートの最中？それならお邪魔しちやつたかしらと言いたいけれど、ふ
ふっ」

はて、こちらを見てくるのは「クイーン」と呼ばれた女だ、長い赤毛はメイリオと同じ色で、取り巻きを二人も連れてくる。

装備がそれなりに、というかぱつと見てLv35帯くらいのそこそこマシなやつであるところを見るに、いまのところこのあたりで見た冒険者の中ではかなり上等なのだろう。とりあえず取り巻きだけでもメイリオはだいぶ実力差があるように見えた。

防具のLv帯に関してはデータベースに関する知識と経験で予測しているだけだが、赤い軽鎧は覚え栄えあるクリムゾン・シリーズに近いだろう、機動力を高めた反面防御が薄いとゲトゲな外見のタイプである。が、それより気になるのはメイリオの借金漬けというワードだ、これは雲行きが不穏に流れてきた。

「あなたが男を連れてるなんて初めて見たわね、あなた、お名前は？」

「オルカです」

「オルカ君ね、わたしは「クイーン」……あまり自慢するほどじゃないのだけれど、この街の最強ギルド「クイーンズクラウン」の女王よ、以後よろしくね。ところでメイリオと

はどういう関係なの？彼女とは知り合いだからちよつとお姉さん聞きたいなあ」

「メイザベス、あんたね……」

「はあ、行くアテもないところを拾われたというか、ポーンギルドに拾われたというか。あ、付与術師です」

「あらあらまあまあまあ！いい話じゃない、つまり恩があるっていうことね？それに付与術師なんていいじゃない、食いつばぐれもないしポーンギルドが欲しがってもそれは仕方ないっていうことよねえ……そうねえ」

メイザベス、という名前なのか、クイーンはある程度知り合いなのだろう。クイーン氏は自分の前から来ると前かがみになり、紅色の軽装鎧に包まれたそれなり大きな胸を強調するようにしてくる。

だが残念であるな、このオルカ、趣味が違う。

そうしてふふんとしていると、クイーンが話を続けた。

「あなた、よかつたらうちに来ない？」

「メイザベス!!」

「ポーンギルドなんかよりいい待遇を与えられるわよ？付与に使う器具も最高品質が揃ってるしマナポーションも三流品の苦いのじゃなくて、飲んでも楽なものばかり。そ

れにうちはね、女の子だけのギルドなの。ちよつと気になった子がいたらつまみ食いくらい許すわよ？ どう？」

「あんたねえ!!」

「あら？ ただの引き抜き交渉よ、どこのギルドでもよくあることでしょ？」

「あたしへの嫌がらせだけでなくせにッ!!」

突然の引き抜き交渉、そもそもこちらに来てまだわずかの自分としては良し悪しもわからぬ、このオルカ、無知である。だが嫌悪感をあらわにしてメイリオが反抗するのだ、ただし彼女もつかみかかったりはせず、ただ言葉を挟み込むだけ、手の震えが強すぎるあたりつかみかからないというよりもつかみかかれなのだろう。

それだけこの二人の実力差が開いているということだ。個人あたりのレベルはプレイヤーが相手なら見られたが、NPCやMob相手には見られないのはネットゲームと同じ仕様らしい。はて、それでも何か見られるスキルを持っていたな……あれは確か。

「ポーンギルドにいたってあなた、一生貧相に暮らすだけよ？ 付与術師なんて将来を約束されたみたいなものだし……あのウィッチの錬金術師みたいな世捨て人でもなければ、いる理由なんてないもの。特別待遇ってやつよ？」

「ふむ」

「ふふ……」ここで、メイリオの見てる前で決断してくれるなら、ちよつどいいし私がギル

ドの皆に紹介してあげるわ。男子禁制のクイーンズクラウンで唯一の男子なんて、夢のような生活じゃない？ポーンギルドなんて所詮貧民街の廃教会を拠点ホームに持つてるようなところだもの……それに、リーダーはあの——」

「メイザベス!!」

「よしなヨ」

とうとう食って掛かろうかと、脚を踏み込もうかとしたメイリオ。

だが今まで居心地悪そうに、足先でしきりに地面を叩いていた傍から見てもイライラしているといった姿だった店主ちゃんが動きその肩を持つて止めた。

彼女の静止にメイリオが乱れる髪も気にせず振り向くと、それこそ涙目だった。

「チャーニー!!」

「メイリオじゃ勝てないつてわかってるでシヨ。ここで先に手エ出しや警守にもしよつぴかれて損するのはウチらだけだヨ。いまは耐えなメイリオ、こんな人でもないヤツらはお天道様にしよつぴかれてろくでもない死に方するもんだヨ」

「あら商業ギルドの爪弾き者さんじゃない、氣づかなかつたわ。私あなたみたいな弱い人が見えない目をしてるの」

「若作りの年増がなんだつて？こつちからすりや化粧の『アラ』が人混みでも目立ちすぎて困るかんだけどなア？そろそろ引退時期じゃないのおばーちゃん、取り巻き二人

に寝首を搔かれぬようにネ」

「……………あなたの髪色も、気に入らないのよね」

ヒエーツ……………、女の戦いとはこのことか。しかしマーチャントの店主ちゃんが立ち向かうのは度胸がいるだろう、しかし臆せず胸を張りトゲを突き刺す姿はなかなか頼もしい。とりあえず店主ちゃんを怒らせるのはやめよう。

怒りを顔に浮かべ、しかし深く息を吐いてクイーンが姿勢を戻す。

背丈はモデル並であり、自分ととんとんだ、さぞメイリオと店主ちゃんには威圧的だろう。事実店主ちゃんとはともかく、メイリオは目線を受けただけで一步後ろに退いた。

「さてどうするのオルカ君？こんな「爪弾き者」ばっかりのところで骨を埋めるつもり？」

「オルカ」

「ああ、もう決めた」

「ふふ……………いい子ね」

クイーンが笑む、勝者といった顔だろう。

だがこのオルカ、正直者である。

「……………遠慮します」

「あら？もしかしておバカさん？」

「まさか、第一に自分は女性関係がそんな得意じゃないし、女の園の男一人とか地獄だし、第二に自分も〃騙してるとは限らないし、第三に……あんだ、〃カルマ値が極悪だ、つまりどういふことかっていうと——個人的にあんたが気に入らない」

「カル……?」

そう、カルマ値である。

先程思い出したが、スベクタクル「解析」の応用で見られた。

自分のやっていたゲーム内では主に、クエストの分岐などで増減する善悪基準を決める数値だ。この数値によって受けられるクエストや行けるワールドにも違いがあるため、本当にやりこみ要素は多い。ただゲーム内では救済の無限クエストで操作できたというのがあるのだが、しかしここは現実の異世界、所業がまんま反映されていると言つていいだろう。

ちなみにこのオルカ、中立である、正直者である。

「……はあ、まあいいわ、ちよつとメイリオを懲らしめてあげようと思つたけど……それなら仕方ないわね」

「ごまあないわメイザバス、高貴なお方はお部屋に籠もつたらどう?」

「あらご丁寧に、でもどれだけ言つてもあなたが不利な立場に変わりはないのよ……あら」

「あつ、それはダメっ」

冷めた表情をしたクイーンの顔が再び温度を増す。

視線と伸びる手の先はメイリオが右に携えていた短剣だ、自分が付与をしたものでみつつの付与のつけられたエルヴンナイフ。クイーンは鋭い手付きであつというまに鞘から外し、メイリオの止める手も意に介さず自分の手元まで手繰り寄せる。

膂力が違うのだろう、レベル帯も相当違そうだ、メイリオの悔しそうな顔が痛い。

「……………エルフのナイフね？ いいものを持つてるじゃない、借りたものを返す余裕はないのにこんなものは手に入るなんて儲かってるじゃない」

「それはあたしのよ！ オルカから買ったのッ！」

「ふふん……………これは今回の迷惑料と、借金のカタにもらつていくわ。ちゃんとこつちで査定して減額しておくから安心なさいな、それにそのオルカ君がいるならいくらでも作れるでしょ？」

「そんな言い訳が通用するわけ……………」

「メイリオ」

ふむ、これはよくない、かといって自分でもこのクイーンというのには勝てない。

このオルカ、攻撃ステは1である。

かといってこれを見過ぐすとちよつと寝覚めが悪いのだ。

このオルカ、大反抗作戦は常に策士として行う。

「短剣もう一本貸してくれるか、余ったほう」

「は？こんなときに……はい、何に使うの」

「見てなつて……スローか、十分」

ノーロットだったら少し不安だったが、メイリオが渡してくれた短剣はスローは確保していた。

ならば十分である、受けるクイーン！このオルカの必殺を！とばかりに自分が気合の入った付与をしそして、できあがるのは美しい白色のオーラをまとった短剣なのだ。もともとは安っぽい外見であったが神々しいオーラが見えるとなかなか映える……いい仕事をした。

「あら……面白い付与ね、見たことがないわ」

「オルカ、何を……？」

「ああ、もちろん……」

そうとも！くらえ！必殺——

「お譲りします」

「えっっ」

「あら、いいの？」

「もちろん、お近づきの印とあとよかったら、メイリオの借金のカタにでもしてもらえると」

「ふふ、いい子ねオルカ君。気に入ったわ、さっきのは許してあげるからポーンギルドが潰れた時にでもいらっしやい、待ってるから」

何をしているのか、という顔のメイリオと店主ちゃんをよそに、自分はメイリオの光る短剣を手渡す。

すると付与の異変には気付くだろう、この付与、もちろん効果はある。それは“無重力の”であり、重量を0にするものだ。とはいえ実際には小数点以下で重量が設定されているらしく、ちゃんと地面に落ちるからそのへんに吹っ飛んでったりしない、安心である。

クイーンは軽く短剣を振りその気配に気付くと、短剣に軽くキスをしその場を去っていく。取り巻き二人もメイリオと店主ちゃんには軽蔑の顔をしたが自分は気に入ったのか、軽く会釈をして去った。

——あとには沈黙が残り、しかしすぐ破られる。

店主ちゃんが嫌な目を送り、そしてメイリオがとうとう自分につかみかかってくるのだ。

レベルは比較にならないだろうが臂力の差は相当で、がくと首が揺れた。

「……なんであんな女に尻尾振ったの」

「まさか、尻尾なんか振っちゃいない」

「でもッ!!」

「自分の付与—— “地雷” だから」

そう、地雷なのである。

メイリオが首をかしげるので、やはり説明のしようがあるだろう。

そう、“地雷”とはネットゲームにおいて、災難が降りかかる爆弾といったものだった。

「じら……地雷?なにそれ?」

「あの付与、役に立たないんだよ。とかいくつか強力な“付与”エンチャントにはデメリット

付きのものがあつてき、【無重力】はそれなんだ。装備の重量がゼロになるメリットは大きいんだけどね」

「そこだけ聞くと、すつごーいメリットに聞こえるケド」

「装備重量がゼロになるかわり自分の重量が増すんだ、つまり攻撃速度が低下する。おまけに重量0だから重量を武器にする近接武器に使うと威力も低下するし、踏んだり蹴ったり——タンクがたまに防具につけて変わった使い方をしてるしか見ない」

「そ、そうなの、ね……」

溜飲が下がったのだろう、説明を終えるとメイリオが手を離す。

そして自分が襟を整えると、メイリオが続けて質問をした。

だがそれも想定済みである、このオルカ、鋭いのである。

「でもそれだけなら持たなきやいいんじゃないの？ 結局あたしの短剣渡しただけじゃ

……借金のこと、気にしてくれたことは嬉しいけど」

「そこはおいおい聞かせてもらおうとして、まあ、呪っておいだから」

「は？」

「はア？」

「呪っておいた」

呪いである、呪い装備である。

名前で十分なくらいにはデメリットなのだ。

「——取り外せなくなる」

「ええ……」

「ウチらでもそこまでやらないヨ……」

「え？ え？」

ドン引きという言葉を表情にするとそうなのだろう。

メイリオはちよつと嬉しそつだつたが、店主ちゃんはドン引きだ。

ううむ、やりすぎたか、そんなことないよな。

上位ヒーラーなら取り外せるし、自分もスロット潰せば解除できるしそれに——あれ、さて、それできる奴こつちにいるのだろうか？ オルカは訝しんだ……でも考えても仕方ないしもう過ぎてしまったことなので、なにもなかつたこととした。今日も昼下がりは暖かい。

10話—メイリオの短剣とポケットの中

「それで、あたしのはどうするのよ」

「おや」

「短剣みんな持ってかれちゃったんだけど……そのうちスカツとする噂が流れるだろうし、オルカが悪いってには言わないけど武器が無くなっちゃうとねー。倉庫に置いてある古いナイフ研ぎ直そうかなあ」

「ふむ、それなら」

確かに勢いづいてしまったとはいえ、メイリオには悪いことをした。

なるほどそれならかわりをあげるべきだろう……うむ短剣か、ナイフ系列は他の武器に比べて安価にスキルレベルを上げられるから人気なんだよな、生産職は暗殺者よろしくだいたいナイフをいっぱい懐に忍ばせているという——もちろんこの自分も例外ではない、なおサブクラスはアサシン系じゃない。

休憩所の天幕の下で、懐から二本のナイフを手に見せる。

さてあなたが落としたのは。

「このLv40帯エルヴンナイフでしょうか、それともこのLv70帯クリスタルナイフでしょうか」

「アワワワワ」

「綺麗……見惚れるくらい……じゃなくて！オルカ、オルカしまつて!」

「あわわ……」

言われるがままにナイフをインベントリにしまう、うむむバレないようこっそり出したのだがまずかっただろうか……エルヴンナイフが業物と言われるとはいえ、先程宝石店に通りかかった感じクリスタルの値段程度はそれほど高いものではないと認識していたのだが。クリスタルナイフも店主ちゃんとメイリオが動転するほどのものであったらしい。

「ど、どこでそんなものをををウオツ」

「店主ちゃん落ち着いて……落ち着いて、オルカ、どこでそんなものを手に入れたの？」
「70帯のナイフはスキルレベルリングにちょうどよくてなあ、コスト比を考えると40と70に行き着くんだ、Lv110装備はひとつしか手に入らないし90帯100帯はコスパが悪すぎるから持ってないからそこはごめんね……」

「は、はあ……もうあなたには驚かないほうがいい気がするわ」

呆れた、とメイリオがため息。

苦労のこもったため息だ、またやっちゃいました？

ううむ、うむ、うむと唸った。

「その「なんとか帯」ってのがよくわからないケド、ヒツヒツフー……うん、落ち着いタ……ウチもある程度ポーンギルドで過ごしてたカラ「業物」ってのはよくみてきたけどさア……ここまで、ここまでのモノ見せられると全部吹き飛んじやうよネ」

言いつつ、店主ちゃんは周りをみる。

特に誰も見てくる気配はなく、ちらつと顔見知りの手を振ったらしい以外は何もなかった。

「誰も見てなかったのが、よかったネ」

「うぐぐ……帰ったら詳しくおはなしきかせてもらえると」

「そうねエ、オルカにはそこんどこも教えないとネ。メイリオ、とりあえず今日はかえろ、夕暮れ近いしつかれたつかれた」

「おっけー、まあお夕飯前にでもこの話はしましよ、リリーやニツサもそろそろ帰ってるだろうし。オルカが規格外とはいえ、こうもされるとあたしも参っちゃうわ、いろいろ教えないとね」

「ヒエーッ……」

スパルタ教育だろうか、圧倒的劣勢を強いられる教育だろうか。しかし確かにまだまだ常識が足りないというものはあるのは違いない。ううむ。



ポーンギルドに帰って来るころには夕暮れが近くなっていて、なるほどこうやって一日を終えるのだという空気が道を伝ってくる。

出店はしまわれ、歩く人はまばらになり街の衛兵がちらほらと数を見られるようになるのだ、やはり勝手知らぬはファンタジー世界、夜の帳が下りるころには街の治安も一段と悪くなるのだろう。女子供だけで出歩くにはよくない時間がそろそろくる、このオルカ、二人を守らねばならぬ、STR1だけど。

ただいまを言つて門構えをくぐればすぐに始まるは誘導尋問、さああれを出せこれを出せ、イチから常識おしえたるのオンパレードなのだ。あらためて自分の持ち物を検査してみないと落ち着かないとのことで、堂々集まるわ店主ちゃんにメイリオ、ニッサにあとりリアナ。ケイはまたどこかに出ているらしくアーリン団長も書類仕事が終わら

ないと嘆いていた。

はてさてどこから出していくかはたまた。

出品No. 1の座を勝ち取るのは一体何者か。

「とりあえずしたいことは、あなたが何を持つてるか、何を即座に出せるかの把握よ。街に出る前にやっておくべきだったのかなって思ってるのはまあおいとかせてもらおうとして、あなたがどんな爆弾を抱えてるかやっぱり見えておく必要があると思うわ」

「つてなワケで、協力して欲しいナーなんて店主ちゃんのお願いだヨ」

「それは構わないんだけど、ふむむ……ああ、そのためのフードちゃんか」

「わ、わたしが、^{スバクタクル}解析スバクタクルするから……大丈夫」

出てきたものがものごととして、どうやって価値やら効果を説明したものかと考えているとなるほど、ニツサがいるから大丈夫となる。彼女はどうかやらギルド唯一の解析スキル持ちのようで、近くでリリアナの煙草の煙を吸ってけほけほと咳き込んでいる以外はとても頼りがいを感じられた。

というか本当にここまでずつと煙草吸ってるなりリアナ嬢。

「ふはあ……強心剤はストックしておいたから、はあ……ニツサが驚いて倒れても大丈夫よ……」

「ヒエーッ……」

そんなになるまで脅かしてしまつたらこちらのほうが申し訳ない。

が、クリスタルナイフ程度であわわと店主ちゃんが言うあたりなくはない。

まあやってみないとわからんどもん、さて十分なスペースを空けよう。

「とりあえずじゃあ、テーブルを端に寄せよう」

「なんデ？」

「たぶんいっぱいになる」

そう、ライドパートナーのような大きなモノも結構あるのだ。

このインベントリ、原寸サイズだとしたら死活問題である。

「さて、じゃあ……そうだな、まず一般的なものからいこう」

「逸般的じゃないことを祈るわ」

「E X ヒールポーションだ、使うことがないからフルストックしてるんだ。こっちはE

X マナポーション、職業柄割と使うことがあったから700個しかない」

「……ニツサ、いやリリアナ、鑑定できる？」

インベントリから取り出すわ緑色の透き通った飲料、まずい、苦い、でもものどごし最高なニクイ飲料E X ヒールポーションである、HP最大値の50%を即座に回復してくれるすぐれものだ。基本的にはスロットに入れておいてやばい死ぬ、となった時にキーを連打し、ゴリ押しでダンジョンから帰還するときなどに使う。

マナポーシオンはそのMP版であり、これは付与術師の都合柄ある程度使っていた。というのも付与自体がMPを急速に消費するため、そりゃあたまの付与なら問題ないがスキルレベリングのためにひたすら付与を繰り返すときには同様連打するものであるからである。

メイリオや店主ちゃんがじっくり見るも、薬品ということでは造詣がなかったであろう、首を振る店主ちゃんを見て、傍で興味なさげにしていたリリアナに声をかけるのだ。相も変わらずどこを見ているかわからない魔女はスパSPAと煙草を吸っていたが、頼まれるとはいはい、といった感じに座っていたテーブルから腰を起こしてEXヒールポーシオンを受け取った。

「…………ふあー…はあ、はあ…………はあ…？」

息切れた麻薬中毒者みたいな息の整え方をするのがリリアナだ。

本家の錬金術師が見た場合どうなるのかというのはいかんとも付与術師でありかつ、この世界に常識に疎い自分には見当がつかないがしかし、リリアナは眉間にしわを寄せ、ポーシオンをひたすらに眺めている。ときにはひっくりかえしたり、またこんどは軽く振つてみたりだ。上位ポーシオンとはいえ兼価版で最上級ポーシオンなどはごろごろしているため、そこまで価値のあるものとは思えないが。

そうしていると、リリアナが突如ビンのフタを空けおや、おやや、飲んだではないか

！ああそんなまずいものを一気に！ぺっ！ぺっしなさい！あわわ……自分でもヤケになつてちびちびやったときが結構キツかったのにあわわ。

しかしはて、それほど嫌な顔をしていない。

煙草のがまずいのだろうか、喫煙者にはならなくてよかつた。

「……イルカ、だっけ」

「オルカです」

「ああ、オルカ……うん、いいねコレ。苦味もマイルド、のどごし最高で飲みやすい、おまけに治癒力も相当だねコレ……ははっ、王宮あたりの流れ物？そうじやなきや説明つかないくらいだよ……あー、煙草でせつかく酔つてたのが切れちゃったわ……うん、それくらいすごい、ふああ……」

「ふああ……よくわからぬ」

きだるげに、でもちよつとだけ正氣に戻つたみたいな喋り方をするリリアナ。

途切れ途切れに言葉を出しているような喋り方もあつて、いまいち理解はしがたかつたがしかし、そうしているとまた煙草に火をつけてつぶやいた。再び明後日の方向を見て煙をふかすのが印象的で、たぶんまた呼ばれば振り向くのだろう。

そうしつつぶししかし、最後にぼそりとだけつぶやく。

「……………コレいつも持ち歩けば、……この連中は寿命まで生きられるかもねエ……つて、く

らい」

「リリーが言うなら信頼できるネエ、それならニツサに鑑定させるまでもないネ」

「はい次！」

急かされるがちよつと、ちよつとまってくれ……はて、次に出せるものってなんだろう。

スロット用穴あけドリルはなんか違うし、ガチャチケットは使いみちないし、はて……じゃあとりあえず先に話題になったこれを出しておこう。

クリスタルナイフ、そんなに価値のあるものにも見えないが。

「たかだかレベリング用装備だし、クリスタルナイフに本当にそんなに価値があるのか？」

「……………うーん」

言えばすぐに頭を抱えるのは店主ちゃんだけではない、メイリオもだし、なんならニツサはあわあわしていてリリアナはまたどこ吹く風だ。

確か設定上におけるクリスタルは加工が容易で装飾品に使われているといった設定で、しかしマナの伝導率が高きさまざまな魔法を付与できるといった性質を持つ——といったものがある、が、実際には設定だけで他の武器と付与種類も強化の伸び率も同じだったはずだ。

それに各生産ポイントで簡単に採掘できるため、大量生産も容易でマーケットには安値で並んでいた記憶がある。というのがこちらの常識だったが——様子を見るに違うらしい。

ちなみに等級はLv10帯から10区切りで素材が変わり、鉄、鋼鉄、銀、エルヴン、ドワーフ鉄、碧鉄、そしてクリスタルと移ろいゆく。さらに上位になると黒鉄エボニーや禁断シリーズ、古代の遺物やユニークといった感じに分化していくが少なくとも黒鉄まではただの上位互換の並びであった。

「いいオルカ、そのナイフ一本であたし達は何日生活できるかわかる？」

「えーっと……3時間」

「なんでよ!？」

マケボを漁ると金銭などあつというまに消し飛ぶのだ、マケボ戦士の道は険しい。

と、いうのは冗談として、さてはて、あの銀杖ですら結構行くということなのでそれなりに行くのだろう、このオルカ、金の価値もまだ把握しておらぬ。

「半年よ、〃ギルド〃が半年過ごせるだけのお金が手に入る……わよね、チャーニー？」

「ウチの鑑定は当たるヨ」

「そう、食費に売り物の材料費、ここの維持費に出張費用、装備調達費からあたし達の給料に至るまでゼーンぶまかなえるのよ、おまけにあなたが持つてるものだからまさかと

思うけど『付与』されてたら……」

「スロットは無事だが何も入れてないぞ」

「それならよかった……ってそうじゃなくて！」

「……まあ、オルカに言っても割と仕方ないことはあるシ、とりあえず出せるモノ出してもらってこれは簡単に出しちやダメーって言えばいいと思うヨ。ニツサは都度
スベクダクル
 『解析』お願いネ、ウチはメモるから」

「わ、わかった……！」

店主ちゃんがすらつと羽ペンのメモを用意し、ニツサはクリスタルナイフを手に取り
 る。

それにしてもニツサ、フードちゃんと自分が呼ぶのはフードをかぶっているからだが、ここでも脱がないんだな。お部屋にいるときくらいは脱いでいるのだろうか、ここには仲間しかいないはずだが宗教的な理由でもあるのだろうか。

そうちらちら見ていたら目が合い、フードを深被りされた、なきそう。

「……にしてもクリスタルの武器、ねエ」

「そんなに珍しい？」

「オルカの故郷じゃありふれたモノだったのかもだケド、このラインゲルト王国の、それも生産地からずーっと離れたスピエールの街じゃアそうそう見かけられるモノじゃ

ないネ、一生この街で暮らすなら毎日製造者ギルドに通って一回二回見かけられるくらい？それくらいには貴重だよ、クリスタルならともかく、クリスタルの武器”なんテのは”

「はえー……鍛冶師の知り合いは山ほど持ってたけどな……」

「ツテがあるならそのうち紹介してネ？まア、知ってるかわかんないケド、クリスタルつてのは加工が難しくテ……このへんはニッサが詳しいか」

「ふえっ……」

フードを深被りした矢先でのキラークラスだ、ニッサはふええとなるし、自分もヒエーツとなる。

とはいえ言われて説明しないのも悪いと感じたのだろう、ニッサはおどおどと説明しだした。

「えつとね、クリスタルはね……装飾品としては人気だし加工が簡単なんだけどね、武器にするには加工も取り扱ひも難しいの」

「加工が」

「うん……もともとマナが水晶に宿つたものだからすつごくキレイだけど、だから簡単に壊れちゃうくらいには硬くは、ない。でも正しく加工すれば、正しく魔術を書き込めれば……マナを流したときに何にも負けない武器になるの、マナを流したときだけ機能

するからすつごく……すつごく、取り扱いがむづかしいけどでも、まさに……『魔剣』になる」

「それはなんとというか物騒な……でもなるほど、なるほど」

「それと、ね、クリスタルの鉱脈の取り扱いはエルフ、しかできないから、あんまりこっちに、でて……こない」

なるほどこちらではだいたいぶ事情が異なるらしい。

加工も難しい、生産元も不安定、おまけに強力とあつては確かに価値も高騰しよう、なるほど。

「それに、オルカのそれ……すつごく、よくできてる。エルフも簡単には作れないくらい、本当に『不自然なくらい』精密」

「製造元が製造元だしな……ううむ、ありがとう、なんとなくわかった……これはうかつに出すとあぶない、と」

「まあ、それを持つてるオルカをたどればそのナイフ、その製造元、その流通ルート、芋づる式に手に入るだろうーっテ思うだろう連中がこの街にもわんさかいるーってことだね。だからそいつは封印封印、さあ封印よー」

言われるがままにインペントリにクリスタルナイフをしまいこみ、はて、次は何をと思ふ。

クリスタルでこれなら黒鉄エホニなんかはどうなってしまうのだろう、あいにくと持っていないがでも、相当の値打ちになることは間違いないだろう。はてさて、注意深くひとつひとつ出していかねば……おっと、これは。

「ガチャチケはどうだろう」

「どこの商品券？」

「うう……」

当たれば一攫千金のガチャチケが商品券……うう。

とはいえここでガチャをどうやって引けばいいのかわからないし順当か。

そうなると、ふむむと頭を悩ませる、悪いお知らせか良いお知らせかどちらを先に聞きたいかのアレだ、はてさて自分から見ても紙くずなものから順次出していくかはたまに“とんでもないもの”から出していくか……はて、どうしよう。

「心臓がもたないから、一番いいのがあるならそれを見たほうがいいかもね」

「なるほど納得」

メイリオの言葉を信じよう、確かになるほどクリスタル程度でこれなら最初にどでかい衝撃を与えておけばあとから驚かれることはそうそうないだろう。カモフラージュ作戦だ、これは前のより大したことないですよ、先のを今買ってあげばお得かも、なくなっちゃうまえにさあさあ、みたいな。

なるほどこのオルカ、納得である、では出してみようではないか。

といっても非常に自らの目から見ても高価で効果てきめんだと思うものは複数種類あり、しかしぱっとみて「凶悪」なものはいっしょにしかないだろう。

インベントリの隅にしまいこまれていた黒色剣のアイコンをぴびつと押し、スライドさせてお外に放り出す。さて、皆の衆これが我が全力全開、とくと見よ、ストリーイェント最終報酬、されど使わない皆も持つてるといふことでインベントリにしまい込まれていた不憫最強である。

「必殺——」

ゴトリ、と置かれるは黒色の剣一振り、豪華な飾りはなけれど洗練された刻みのある一振り。

かつて魔王が振ったひとつで今亡き主を待つ一振り、ポケットの中の戦場である。

——魔王剣。

11話―メイリオの短剣と魔王剣―

ストーリーイベント、というものはネットゲームプレイヤーなら誰もが体験するものだろう。

というより、操作方法を覚えたりクエストの流れを学ぶチュートリアルがストーリーに組み込まれているネットゲームがほとんどだ。その過程でネットゲームにおける「物語」に足を踏み入れたプレイヤーはそのままストーリーを追ってもいいし、横道に外れて世界を楽しむ、ハウジングに勤しむ、ガチャ課金による商人プレイに入る……エトセトラ、やまほど楽しみ方がある。

とはいえ昨今のゲームは最高のレベリング法がメインクエストのクリアであったりするのでも事実であったり、はては特定レベルまで機能が解禁されないなどは日常茶飯事なもので、そうでなくともメインクエストの進行には何かしらの「特典」がついていたりすることはよくあるものだ。

——この「魔王剣」も例外なく、その特典であった。

「ストーリーイベントのクリア特典でありふれたものだけど、性能は折り紙付きだ。自分は

あいにくと使うにはステが足りなかったからお蔵入りしてただけどまあ……ソードマン系列のジョブ持ちはこの中にもいるし、誰か使えるだろ、なんと業魔爆炎剣なんていうすごいのがつかえる」

ある時、レアドロップによるドロップ武器がMob狩りやボス狩り、PvPを席卷したころの流れとして、“これを持たない者は人間にあらず”のような論調——つまり“人権装備”といったものが自分のプレイしていたネットゲームにおいてあふれるようになった。

割とどこでもよくあることだがこれの面倒なところはそこに至るまでの過程、低確率のボスドロをひたすら狙う、マーケットに流れる高額な装備を買う、といった点において入手難度が跳ね上がっていたことで、重課金者とそうでない者に大きな格差を生んだとともにこれを持つていないととともにPTを組んでもらえない、などの事態が発生することにもなった。

おまけに、これを手に入れた者がその装備を生産するボスを狩り続けるなんてのもあったわけだから未入手者は本当に手に入らなくなるわけで、批判が続出しその対策として生み出された“基準点”の産物がこの魔王シリーズの装備である。

ストーリークエストのクリアによって手に入るこの装備の取得を基準にしてエンドコンテンツが設定されたといういわくつきなのだ。

「最高の性能、最強の見た目、さいつよの入手難度……あのネットゲームにおいて必要だったのは、どこに基準を置くかだったんだ。それを置かないまま人権装備なんてものを実装しちやつたからステに乖離が発生しちゃうのも当然だったわけで、じゃあ、ここに最高レアの基準を置こうって生み出されたのがこの魔王剣だったんだよ。

だからこれ以降の装備に関しては魔王剣が基準になされたからインフレも起こさなくなつて、人権装備も鳴りをひそめて成功したのさ。まあ新規実装スキルでインフレしたんだけど……あれ、みんな」

興味のあることだといついでに長く語ってしまったのは悪い癖かもしれない。

だがはてさて、語っているのに誰も止めないのでつい語りきってしまったところで、自分が口を止めたことよって場が静止しているのに気付くのだ、誰もが静まり返りそして、もはや自分などに目が向いてないことに気付く。

皆、魔王剣に目が釘付けである。

禍々しくも洗練され、ゴテゴテとしない程度に装飾が施された運営のデザインセンスを感じさせる逸品。ステータスも最高ランクの登竜門であり申し分なく、自分に適性がないという点を除けば欠点という欠点の見つけられない武器だろう。

見つめるのも仕方ない。

そんなふうに内心で笑っていると、はて、ニッサがフードをまた深被りしたではない

か。

そんなにこわいの。

「……オルカ、これをどこで？いや、これは……何？」

「メインクエ報酬の魔王剣」

「あなたに聞くとそうなるのはわかってたけれど……はあ、いや、はあ……うん、持ってみても大丈夫？その……呪い装備じゃないわよね？」

「見た目は闇っぽいけど無属性だから大丈夫だし、なんなら呪われてもないしデメリツトもないから大丈夫」

「おっけー」

最初に口を出したメイリオの頼みを承諾し、ほら、と手渡す。

ちよつと武器にしては雑で危なかつただろうか？皆が一步後ろに引いたので悪いことをしたなと思いつつ、今度は丁寧に両手に乗せて手渡す。黒煙のエフェクトが立っているが別に熱くも冷たくもないようで、なるほどこのあたりは雑だなとちよつとだけ内心笑った。

メイリオはその右手に魔王剣を持つと、はあ、と一息つく。

その顔は単純に言えば見惚れているようで、武器というよりは芸術品やあこがれの人物に出会った、憧憬の目といった表現が近いだろう。あの店主ちゃんですら周りをぐる

ぐる回って四方八方、あちらこちらから穴の空くほど見ているものだから、なるほどこれは確かに価値のあるものである、ということ自身も認識する。

——メイリオは少しだけ自分たちから離れると、試し斬りのように一振り、空を切った。

「すごい、この剣すごい、あたしがついていけない……振ってるのに振り回されてる、そんな感覚。今まで見たどの剣よりもすごくて、強い——あたしが持つてちゃいけないんじゃないかってくらいに、すごい」

感嘆するメイリオは新しいおもちゃを手にした子供のようには手を震わせている。

そういえば装備にも当然、装備可能Lvといったものがあるはずなのだがクリスタルナイフといい魔王剣といい、どうやらここにはそれがあてはまらないらしい。ただメイリオが言うように剣にふりまわされると言うことは、Lv110装備の魔王剣に対してメイリオのレベルは乖離していると言っているだろうか、レベルが低ければ装備できても、武器についていけないのである。

その理論で行けば自分はLv上限、あらゆる武器を使いこなせるのだが——このオルカ、STR1である。強烈な攻撃力減衰がかかるせいで草刈りにしか使えないのだ、この強烈な草刈り性能でお値段なんと無料、メインクエストクリアで手に入る優良芝刈

り機である

「それにしても、またア……もう、驚かなくなってきたって思ったケド、とんでもないモノばかり持つてるよネ……はあ、いや……ほんとにこれはホントにもう、なんて言ったらいいか、その、ああつ、ごめん語彙が出せないからニツサ、解析お願いネ！」

「や、やらなきやダメ……？」

フードを深被りしていたニツサがおずおずと顔を出し、店主ちゃんに聞く。されどやつてみなけりや先にも進めない、これがなにかも知っておかなきやいかんどんもんと店主ちゃんが言うものだから、ニツサは名残惜しそうに剣を何度も振っていたメイリオから魔王剣を受け取った。

ここからでも、ニツサの目がまんまなくなつて冷や汗が垂れるのがわかる。

悪いことさせてるな、やつぱりあとでペット用キャンディをあげよう。

「……
// 解析 //スベクタクル！」

いつものように魔法陣が展開し、魔王剣を調べる。

そういえば気になるのは、こちらでの解析はどこまで調べるのだろうか。Lv、名称、攻撃力や防御力、おまけにフレーバーテキストまで調べるのが解析スキルであったものが、現実的なこの世界だと勝手が違う可能性もありありのありである。

「………ほんもの、の、魔王の、剣……？」

「ホンモノって、そんなことはさすがにないでしょ……って思いたいケド……」

「いや、いや……！ 前の魔王」とは違うかもだけ、ど……！ 本当に、魔王が、使ってた……！ 剣だつて、わかる……！ それに武器としての質も、すごく、すごく……メイリオがいうとおり、これ、ただの剣じゃない」

「だとしたらア、こんなモンがここにあるツテのは、とんだ問題な気がするケドなあ……」

店主ちゃんが苦い顔をして、頭を抱える。

はてさて、そこまで問題があるのだろうか、強すぎるといった点であろうか。

なにぶん魔王はもとのネットゲームにおけるラスボスの存在であったのだが、ストーリー上の存在だからカンストプレイヤーにはゆるめの相手だ。はたしてこちらにもいるのだろうかと頭を悩ませつつ、そうしているとカツカツと、上から音が聞こえるのを感じ振り返る。

カツカツ、というよりはガシャガシャであったか、白銀の全身鎧が階段を伝って降りてくるさまは、ああ、アーリン団長のお出ましであった。

「実に威圧的な気配を感じて降りてきてみればなるほど、オルカ君がまた何かしてくれたいかな？」

「アーリン団長オツスオツス！」

「オツス……ああ、うん、とりあえずは」

「またも歩を進めて寄ってくるアーリンは、魔王剣のすぐそばまで寄る。

そうすると、ほう、とヘルムの下からでもわかる感嘆の声をあげるのだ。

メイリオよりもずっと、思い入れのある声だった。

「魔王剣か、私の知っているものと違うが……いや、それよりも遥かに強力だ、実を言うと王都の地下に嚴重に保管された先々代魔王の剣があるんだが、それもこれと打ち合わせればポツキリ折れてしまうだろうね……私にはわかる」

「魔王？」

「そのあたりは生きていれば大抵は知ることだと思っただが……本当に知らないんだね
オルカ君は。いいよ説明役を買って出よう」

ほう、この世界のメインクエストの履修というわけだ。

アーリンはそのまま手頃な椅子を探そうとするものの、テーブルや椅子を軒並み片付けられていたからか適当な樽を転がしてそこに座る。されどさすがに全身鎧、重くて樽が悲鳴を上げましたので、仕方ないと立ったまま話を続けた。

「私が現役……ああ、まあぶいぶい言わせてた頃の話なんだけどね、もう何十年前かなあ
……それはそれはひどい戦争があつたんだ、それはひどかった」

「ぶいぶい……いっくつなんです？」

「女に歳を、と言う歳でもないからね、私はもう70越えてるんじゃないかな」
「はえーすつこい……」

この全身鎧の下にはものすごいおばあさんがいるのだろうか、素顔が気になる。
でもそれにしたって声は若々しい、何か秘訣があったり。

「当時の名残でまだ魔族……が通称かな、彼らはエビリアンとも呼んでいるみたいだが、そんな彼らの首魁が『魔王』だったんだ、当時は平和な時代が続いていたものなんだけどそれまで不干渉を貫いていた亜人や魔族、人類の間に彼らが侵略戦争を仕掛けてね。その魔王が持っていたのが通称『魔王剣』だったんだよ」

「なるほど」

「一度私もあれが振るわれるのを見たことがある。万物を両断するとはあのことを言うんだらう、マナを無尽蔵に吸い込み周囲の命を刈り取り、そして強大な一撃を放つさまは剣というよりもつと、理不尽な存在が近かった。魔王という存在自体後世イレギュラーになつてわかつたことだが、もともとマナに適正の大きい魔族のなかのいわゆる規格外が擁立される存在だったみたいだね、政治に長けているとかそういうわけじゃなかつたらしいんだが……なるほどしかし、個の存在がここまで強大になれるものかと思つたよ」

「亜人に人類に、魔族に、いろいろやつぱりいるんだなあ、でもなるほど、魔王の設定はあんまり変わらないんだな」

プレイヤーが選べるのは三種のみだったがしかし、人類種^{ヒューマン}、魔族^{ドミニオン}、亜獣人《ミケ》と亜人に連なる存在は確かにいた。自分のこの姿も人類種のアバターであり、なんの変哲もない初期髪である。

ラスボスである魔王も確かに、魔族のイレギュラーであるという設定があり、侵略の末最後にはプレイヤーの手で討たれるシナリオだった。

「ふふつ、設定、だなんて面白い言い方をするね。でも本当にそうだった、物語で設定された存在だったってくらいに理不尽だった……それでもまあ私がここに生きているのは、私達にもそんな〃設定された人間〃がいたからさ、よく吟遊詩人が歌っている〃英雄〃達なんていう存在がさ……つと、魔王の話だったね」

「英雄も気になるけども、先を頼むよ」

「侵略戦争では魔族が〃魔王〃を、亜人達が〃獣王〃を、そして人類もまた〃霸王〃と呼ばれる英雄達を擁立して戦ったんだ、精神的支柱だったかもしれないけどそれが原因で〃王立時代〃なんて呼ばれ方をされてね、結局みんな死んで戦争が終わってしまったわけだがまあ……そんなわけで、後の世代の今になって彼らの遺した遺物もあるわけだよ」

「なるほど」

「それが魔王剣」

バックグラウンドはある程度似通っているのが通づる物を感じるが、なるほどこの世界にも魔王剣があるらしい。はてさてスロットはいくつか、売値はどうなるか、パツシブは？アクティブは？付与制限や呪いはあるのだろうか？

そういったものばかり考えてしまうのは悪い癖だろう、このオルカ、付与術師である。「侵略戦争をしていたあの魔王が使っていた魔王剣のはるか上の魔王剣……:というところ、これがいかにすばらしい性能をしていて、そしていかに危険かは分かってくれよう。これには値千金の価値があるがしかし、これが表に流れることにより君や我々に降りかかる危険は計り知れないっていうことを先に言っておくよ。もちろん、私には君にお願いすることしかできない」

「もちろんよくわかった……:けど、ギルド長なんだし命令できるだろ？お願いっていうのは」

「君、私より強いだろう？」

「えっ」

こやつ、できる。

はてさて、アーリン団長のレベルがいくつかは知らないが、自分のレベルはカンストだからそれを強さの指標にすれば確かに上ということになるのだろうか。事実 I N Tインテリジェンスや P E R 《パーセプション》は上限突破済みなので誰にも負けないだろう。

されどこのオルカ、ストレングスSTRもバイタリテイVITも1である。

おそらくそのニッサとはたき合っても勝てない、情けない男である。

フフ……しかし団長、さすが人を見る目はあるものよ。

「フフ……このオルカ、運だけなら誰より強いものよ……」

「ははっ！本当に君は面白いね。まあそういうことだから、それはしまっておくといい、歴史にはニッサが強いからほかのことも聞きたいならあとで彼女を頼るといいさ、でも部屋に上がりこんじゃだめだよ？」

「このオルカ、タンスを漁る趣味はないので大丈夫」

「それならよかった」

ヘルムの下ですら笑っているのがわかるアーリン団長の顔を想像しつつ、魔王剣をしまいこむ。店主ちゃんどメイリオが、あつ、とちよつと名残惜しそうな顔をしていたのをていねいにスルーしつつニッサのほつとした顔を見て、これが正しかったんだと自分を納得させた。

さてはて、全部出したらややこしそうなことになってきた。

ここらでごまかしてもうちよつとでとどめておこうか、悩ましい。

12話―メイリオの短剣くちゅけけく

「それで残りはこれ、と」

「これとはなんだなんだ、最速ライドにスロ増設確定ドリル、ガチャ券にその他エトセトラだぞ」

「まったくもって意味がわからないんだけど……あなたが一番大事そうに取り扱ってたのは、これかしら。ニッサ、これ何かわかる？」

「スペクタクル解析」してみた、けど……有償がちや用」ってしか書いてない、から、わからない……チャーニーはわかる？」

ああつ、やめてください泣いてる自分がいるんですよ。みんなの手をたらい回しにされてるガチャチケットをあつやめてとながめつつ、やがてチケットは店主ちゃんの手に渡り団長と一緒にまじまじと見られる。

「商業ギルドの連中がたまーに客寄せに使う割引券と似てるケド……書いてある時がわからないネエ……これ自体に値打ちがあるとは思えないけどアーリン、何か知ってる

「？」

「昔の職場にいた頃、こういった国外由来らしいものやいわくつきのものを集めていた人間ならいたが、私もこれがどういったものなのかは知らないね。オルカ、君にとつてこれはそんなに大事なものののかな？」

それは当然ですとも！

「これを使うために一ヶ月だ……一ヶ月待ったんだ……前回ガチャをあえて見逃して今回の限定を手に入れるために待ったんだ……待っていたのに使えないんだ今は……ガチャはどこ？ここ？ううっ涙が」

「よくわからないけど、そんなに大事なら乱暴には使えないね、ごめんね」

「いいのよ」

「そう言いもういいよ、と言う団長。もう荷物をしまつてもいい頃なのだろう、まあスロット开拓ドリルや魔法の番傘、ガチャ券なんてものはぱつとみでやつぱりあの魔王剣を上回ることではできないだろう。要警戒対象が絞られた今、ほかが見逃されたということだろうか。」

ああ、今は遠きガチャが恋しい。

今回のピックアップは可愛いパトナーと便利な家具だったのだ。

「んまア、うかつにポンポン出す前に言ってくれればいいかな……オルカがそれだけ守

れるなら、持つてることを別にとやかく言うつもりはないヨ。あんま魔王剣！みたいなものを突然広場のど真ん中で振り回したりしなければまア、まア」

「その節は本当に申し訳なくウフフツ」

「反省しないでシヨ」

「ごめんねごめんね常識知らずでごめんね。」

「まあいいさ、一朝一夕ですべて教え込めるでも、慣れるわけでもない。少しずつ我々の常識に合わせていけばいいさ。そのためにはできるだけメイリオやチャーニーみたいな先輩の言うことを聞くことを推奨するよ。まあ、今もしていると思うけどね」

「先輩お願いしやす」

「あつ、はい……」

「じゃあ解散だ、片付けて食事にするでしょう。一晩明けたらまたやつてほしい仕事があるからお願ひするよ」

アーリン団長のパンつ、と叩く一拍で皆が動き、机と椅子が片付けられていく。

最初のときもそうだったがみんな力あるなあ、すごいなあ、自分STR1だわ。

だからがんばれがんばれって見ていたら、頭をぱしんと店主ちゃんにはたかれた。

その夜はむせびないた。



朝というものは非常に心地よいが、血圧があんまり高くないのでちよつとだけ起きるのは苦手だ。できることなら朝起きたあと水を一杯そこから更に二度寝をし、それから満足行くまで寝たあと起き抜けのぼんやりした状態で小一時間ほど外を眺めて外界と思考をリンクさせたのちに世界へと羽ばたいていきたい。

と願う心はどうやら世界に受け入れられないようだ。UIの時計があるからわかる朝の六時という実に出勤登校出撃お散歩、どの時間にも該当しない時間に起こされることとなった。起こしに来たのはメイリオで、鎧を脱いでインナーの防護服だけを身につまるとった状態である。

初めて会ってからは軽装鎧姿しか見ていないものの、こうしてみるとやはり女性的というか女性そのものだ、明るい赤めの髪——朱色という表現が近いだろうか？それはロングとセミロングの中間くらいで整えられ、起伏には富まないものなでるラインは女性を描いている。

ふむ。

「あなたは偏屈だから女の子に興味ないって思ったけど、そうでもないのね」

「観察眼には自信がある」

「やつぱり偏屈……見せ物じゃないの、早く着替えたらご飯食べるわよ、そしたら仕事に出なきゃ」

「仕事」

「下で説明するわ」

はてさて、言われるがままにインベントリから装備を装着し、いつもの地味目の最上位装備となつてひらりと扉を出る。寝間着なんていう洒落たおしゃれアバターアイテムは用意していなかったたのでここにあつたものを使ったのだが妙にぶかぶかだ、ギデオ副長のものではないだろうか、インベントリではなくここに置いていこう。

なお寝間着はスケスケだったりフリフリだったりすると値段が跳ね上がった記憶が新しい。みんな考えることは同じだし、これをガチャに入れてくる運営の気質というものもどこでも同じなのだ。一部ではモーションとあわせて寝る権利など言われているのかなんとか。

座る権利と寝る権利は高いのだ、人権とはかくも厳しい。

木目が古い、なるほどやつぱり古い古い廃教会の階段をギシギシと降りていくと、皆が一同に会している。なるほど冷蔵庫もないのだ、食事は皆で一同にということだろう、自分のぶんもしっかりギデオ副長が用意しているのを目にし、たんまり食べるんだぞとの激励を受け席についた。

「オルカ君が我らと朝食を摂るのは初めてだからね、少しだけ豪華にしておいたよ」
「腕によりをかけ、そしてちよつとばかりポケットマネーを使わせていただきましたが
なハハハ！」

「朝からうるさいよオー……副長オー。んまア、ウチは夜もこれでいいけどネ」

「ほほう、ほほう」

ほほうほうほう、ほうほうあさほー。

食卓に並ぶはあつさりめのスープや柔らかかめのパン、謎肉ベーコン焼きなどを筆頭に朝に食べるならおなかにもやさしいタイプのものが並んでいる。飲み物もホットミルクが用意されているあたりなんというか、ファンタジー世界の突撃朝ごはんといった趣が感じられる組み合わせであった。

謎肉、ここでも出てきたか。

「メイリオ、気になっていたけどこの肉はいつたいたなんの肉なんだろう」

「チュケケパブラよ、よく見るでしょ？」

「チュケケ……フードちゃん」

「た、たまに飛んできます……」

「チュケケ……」

チュケケ。

そうして食事が始まってからしばらく、皆が食事を続けているのにおそろおそろ手を出せないでいると、横から店主ちゃんがフォークでかつさらつていった。いや別に苦手ってわけじゃないというかそも食べたことないんだが、まあ確かに手をこまねいていたところを見たら気を遣われても仕方ない。

謎肉はまた今度にしておこう。

このオルカ、それよりもテーブルマナーを覚えるのに必死である。

「さて、じゃあ今日の割り振りだがリリアナは薬剤の作成、私とギデオンは街役場へ、店主ちゃんは事務待機でニツサは非番、それからケイとメイリオはオルカの戦闘技能に関して測つてやつてくれ」

「ウチはどーせ箱入りですヨオー」

「君がいなくてここが回らないんだ、昨日の私の書類見ただろう？」

「修正箇所のない書類を見つけるのが大変だったヨ」

「ごめんね」

言いつつ頭を下げるアーリン団長に、じとじととした目を向ける店主ちゃん。

歳でいうとアーリン団長のが遥かに上そうだが、この二人には奇妙な力関係があるのだろうか。

というかアーリン団長、案外ほんこつ属性持ちでは？

そうしているとケイがいつのまにやら背後に回っていることに気付く。

「ふふっ、メイリオは別に休んでてえ、私とオルカ君の、マンツーマンでもいいのよお？」
「オルカです」

「ケイはいつつもそれなんだから……オルカも男だつてわかったからやめてあげて」
「男です」

「いけずう」

ケイが自分の腕を抱きながら寄るものだが、その薄着で寄るのはいかがなものか。

なおこのオルカ、不能ではないが属性でもない。

このオルカ、好みはちよつと小さめのナースさん属性である。

「ほんとにいけずう」

本当に申し訳ない。

「しかしアーリン団長、自分は付与術師、技能職で戦闘のいろはは必要ないように見えるが訓練しなければならぬだろうか。無論戦闘経験がないわけじゃないしなんならEXP24倍課金ポジションがぶのみイベント8時間耐久狩りやエンシエントダンジョン虹箱出るまで帰れません耐久レースもしたことはあるがいけません、いまとなつては後方支援の城下町警備員が仕事だ」

「ごめん頭に何も入ってこない」

「修羅場はそれなりにくぐっているものの、ここで装備を作るのが自分の仕事ではないだろうか、ということです団長、なによりなんというか訓練つてすごい怖い、字面が怖いしなんかすごいなんかこわい、なきそう」

「ああそういう……」

ポン、と手をたたき、納得したように言うアーリン団長。

だって怖いもの、訓練ですよ訓練。朝5時にラツパで起きて整列させられて10km マラソンとかさつそくさせられるんだ、いや今6時だけど。

「君の戦闘技能に関してには預かり知らないが、確実になんらかの技能で私を上回っているという感覚を私は感じているんだ。それは付与技能とは違う——」
「強者だけが持つ何か」であることを私は知っている。こう見えて結構、前線には長くいた人間だからね、それを知りたいからじゃあダメかな、それを知っておけば君に役割を持たせるときに幅が広がる」

「レベルでは？」

「レベル？まあ、確かにその分野においては君は何段も上なんだろう」

「アーリンがそう言うなんて、よっぽどね……でも本当にそうなの？あたしから見たら、付与は一流だけどひよる長いようにしか見えないけれど……あ、ごめん、悪く言うつもりは……悪くなっちゃわよね」

「いいんだ」

アバターがひよろ長いというかJ R P Gの脇役っぽいとはよく言われてたし。

しかしなんだろう、こうも褒められるとみんなの目もだいぶ神妙さを帯びてきてなんともこわい、なきそう状態になる。なおこのなきそう状態というのは当のネットゲーム本スレにおける用語だ、あそこにいた彼らはかわいく着飾ったアバターを娘と呼び可愛らしく振る舞ってくれるパートナーをべろべろするのが日課だったが、アップデート等における情報交換が活発だったので情報は最速だった。

その姿たるや、日頃公園でじゃれているご老人達が街の危機にはヒーローになるかのようで……。

「わかった、でもやさしくしてね」

「初夜のオンナノコみたいなこといなこというなヨ」

「未経験なので」

「あつ、そつか……」

おっとこれはセクハラポイントプラスですなデユフフ。

と、こじやれた考えをしているときにふと思う。

分野のレベルとアーリン団長は言っていたが、そういえば団長は何に特化しているのだろうか。あのネットゲームと非常に似通った世界だし、クラスレベルというものは誰

しもあるだろう。それが団長ほどの方に無いと思えないのだが。

「そういえば団長の得意分野とは？」

「私かい？」

「はい」

「うーん……昔は剣が純粹に得意だったんだが、だいぶブランクがあるからなあ……」

兜の顎をガシヤツ、と持ち、少しばかり考える仕草をする。

外見からはパワフルで筋肉質な男か百歩譲ってアマゾネスが入っているように見える鎧だが、はてまあ仕草をみてみると結構女性らしきはある。お歳がいくつかは考えなければかなり、それっぽいというものだろう。

「今となつては、皆の指揮が得意じゃあダメかな」

「なるほど」

となるとコマンダーあたりのクラスだろうか。ほぼほぼPT限定で効果を発揮するのでソロで取ると地獄を見たのが以前だったが、召喚系サブクラスとあわせると真価を発揮するということで育成が長き道のりであったな。

「こちらでも召喚術、あるのだろうか。」

「どちらにしろ私はもう最前線からは取り残された人間さ、いつ寝首をかかれるか！」

「団長殿は冗談がうまいでありますなあ!!」

「縁起でもないこと言わないでよアーリン、誰か一人欠けても回らないんだから」

メイリオが諫めるのを聞いて、アーリン団長とギデオ副長がこれは失礼と頭を下げ
る。

「この力関係、なかなかわからない。

「フフ……この自分がいなくなっても回ら」

「それはこれからね」

「なきそう」

正論だが即答はなきそう。

そうしているといつのまにやら、アーリン団長が食事を終えたようだった。

……兜つきでどこから食べたのだろうか。

「とかくオルカ君達は今日は裏の庭を使ってくれ、普段からそこが練習場になってる。

それが終わったら今日は非番にして構わないからさ」

「あら、一日寝ててもいいのかヨ?」

「君は言わなくても居眠りしてるだろ」

ぐぬぬ、と言い返せなくなる店主ちゃんをよそに、自分も食事を終える。

思い返せばとても短い時間だったがしかし、食事は至福であった。

向こうにおける味の濃さには及ばないがまあ、こういうのもこれはこれで。

「じゃあオルカ君、メイリオ、ケイ、今日はよろしくね。みんなも頼んだ」
了解です団長、アイサー。

なるほど確かに自分の力量を測るのも大事だろう、ここにきてから自分の非力さはおもう思い知っているが、それにしたって把握ができていない。……さてやろう、それから食事を終えてやることもない、スマートフオーンもいじれないのでしばらくメイリオを見ていたら目をひたすらそらされた、なきそう。

13話—メイリオの短剣〜マジカルミラクル〜

この廃教会の裏手にはたしてかつては自家栽培の畑でもあったのか、隅にある物置から農具がちらつと見えるちよつと広めの井戸付き広場が用意されており、そこにカカシや木偶が立てられていた。

一見にして練習場だとか、的当て場だとかがわかる場所だろう。自分は言われるがまま、先を行くメイリオと横に並ぶケイについていきそこへと降り立つ、なるほどここから自分の最強伝説が始まるというわけだな、すいません嘘つきましたSTR1です、装備補正入れても4です。

「自分には学歴と腕つぶしで赤ちゃんにマウントをとるしかできない……」

「だいじょうぶう？赤ちゃん？あら、お盛んね……」

「いちやついてないでこつちこつち！」

急な落胆をケイに慰められているとまたふと、メイリオが呼ぶではないか。

はてさて彼女が示した場所を見ればそこは武器置き場、といつても刃を潰した剣や先

の丸い矢などばかりでなるほど練習用、とぱつと素人目にもわかるものばかりだ、ただ刃を潰してもメイスと斧は痛いと思う。

彼女は相手をするからどれでも好きな武器を使っていよいよ言うものだがうむ、武器と言われても自分は生産職、何を手にとつたらいいか。というよりはまず、ひとつ見てもおかねばならないものがあつた。

「この中に自分を『喚ぶ』武器はないようだな……」

「？」

「自前で用意するんだけどそのまえに、ひとついいだろうかメイリオ」

「どうしたの改まって？ 怖気づいた？」

はい、こわいなきそう。

それはおいといて。

「自分はスキル戦闘のクリッククゲーしたことないからこう、実際の対人戦を見たい」

「クリ………何？」

「単純作業しかしたことがないから、よければ二人の練習風景を見たいかなと」

「あー」

気のない返事をして、メイリオが応える。視線のちらつと向かう先はケイでそして、アイコンタクトを受け取ったケイがばちこんこん、とウインクで答えながら刃の潰れた

短剣を手にとったことでメイリオも仕方ないなど、同様の短剣を手にとったことで了承となった。

「あたしが働きたんじやないんだけど、そういうことなら仕方ないかあ」

「露骨うーに避けられると、私もちよつと泣いちやうわよ？」

「だってケイとやりあつても、ねえ？」

「ふふっ」

ケイは笑つて余裕を見せているがしかし、一方短剣をくるくる回しているメイリオはあまりやる気に満ちてはいない。むしろ敬遠気味といった感じでなんともといった様子であり、はてさてどうなるのか、これはこの世界の戦闘を見る上で参考になるのかという一抹のなんたらがよぎる。

そういえば鑑賞するならポップコーンでも用意すべきだろうか、アバターアイテムに手持ちポップコーンなんてものがあつたが、モーションの都合食べても食べても無くならなかつたのでこちらにおいては無限ポップコーンになつたのだろうか、はてさてああいったものを持ち歩かず、倉庫に置きっぱなしにしたことは実につらい、つらたんである。

「よそ見してたらなんかトンでくるわよ！始めるから見てなさい！」

「お姉さんをおーえん、しててねオルカ君」

「音頭はとろう」

「では——」

こう、鬨の始まる瞬間というものはなぜ音が止んだような気になるのだろうか。

個人的な解釈では気を張って集中するから他の音が聞き取りづらくなるからだと思うのだが、演出として音が止むところを考えた人は素晴らしいと思う。今から何かが始まるのだという空気を音を消すことで表現しているのだ。

一瞬の視線の交錯は戦闘開始の合図、それは自然界では当然の摂理。

ふたりの視線が交わって一瞬目が鋭くなったのを、このオルカは見逃さない。

では、はじめ。

「やっー」

「あら、早いよね」

メイリオの急速接近からの刺突、それを難なくケイが刃の先をそらしている。

メイリオが急襲に出てケイが受け身の姿勢をとったのもなるほど、二人のクラス差にあるだろう。互いに双剣、互いに同じ軽装備、そうなると残るはレベル差やクラス差に出てくるのだ、メイリオはローグでケイはイレイザーで簡単に言うとは一次職と二次職の差となる。

この世界の人々にレベルによる転職が機能するかはわからないが、ローグは軽装備近

接系の一次職に相当しいわゆる“初心者”がなるものに相当する。対しイレイザーはLvを50まで上げて転職を行った場合に分岐するローグ系列の職のひとつ、いわゆる上位職なのだ。

単純に見るなら、相応にレベル差があるんだろう。

「このっ！逃げ回って！」

「可愛いんだから、もうちよつと優雅に戦いなさいな」

メイリオはその点を理解しているのだろう、守つたら負ける、攻めるとばかりにひたすらに前のめりに自らの“強み”を押し付けているのに対し、イレイザーであるケイは本来弱みである防御を重点的に行っている。それはすなわち弱い点ですら対等以上に戦えるということであり、ここに明確な職差があった。

そうして埒があかないのが見えてくると、メイリオが片方の短剣を逆手に持ち帰る。

おおつ、あれは。

「！」

一瞬にして背後に回ったメイリオの姿を追えたのは、傍にいた自分のほうだったろうか、いや、ケイも目で追っていた。

メイリオが逆手の短剣を背中に突き立てようとする——いわゆるスキルのひとつ“バックスタブ”である。防御力を無視した一撃を叩き込むローグ系列の強力な技で、

終盤まで使つていける、とりわけ対ボスやユニークで大きく役立つものだ。

これを受ければ模造剣と言えども無事では済まないだろう。

だが。

「間合いがすこし遠くてよ」

「ああつ、もう、ツ！だから——」

おおつ。

今のケイはメイリオと違い自分はもはや追いきれなかった。尋常でない素早さの身体運びをもって、どうやったのかすら理解がおぼつかない速度でメイリオの背後に回ったケイが同様、メイリオにバックスタブを仕掛ける。速度それはすなわちパワーとなるとは言つたものの、絶妙な手加減具合も彼女が一枚上手なことを物語るように、ペこ、とメイリオの華奢じみた腰元に刃の先を当てるのだ。

この滑らかなカウンターに敗北を悟つたのだろう、メイリオは身体を止め、そしてため息を深くつきながら一言、残した。

「——何度やつても勝てないのよ……」

「でもやつてくれるんだもの、いい子っ」

えらいえらい、とばかりに背中からメイリオを抱き、そつと頬を添えるケイ。

傍から見ると軽装備の乙女ふたりが寄り添い合つてゐる絵面で非常に危うい、ああ〜つ

と声が出てしまいかねないものであるがメイリオは正常、ノーマルなのだろう、ケイからやんわりと離れると少しばかり気恥ずかしそうに待てのジエスチャーをケイに取った。

「あら、いけず？」

「ケイ、あなただと本気か区別つかないから……」

「そお？あなたがいいなら私はいいのよ？」

「また言う……」

百合の園はここにあったのだろうか、趣味ではないが微笑ましい。

そうしているとメイリオが逃げるようにこちらに駆けてくる。実際逃げているのだろう、不満げなケイをよそに短剣を手渡してきて、次はあなたの番、と言うのだ。ああそういえば、本来は自分の戦闘訓練、技能把握が目的であったなとふと思いついた。

「次はあなたの番よオルカ、好きな武器を取りなさい？」

「短剣は付与スキル上げにはちようどいいんだが、使ったことがない」

「そこに並んでるものになれば、あたし達で用意できるものつてないけど」

「ふむむ……」

言われてはてさて、頭を悩ませる。

天幕の下に並べられていたのはすべて訓練用の、刃の潰れた剣、弓、槍、斧、杖、あらゆるものだ、だがはてさて付与術師を開幕から目指していった自分はウィザード系列であるからして杖適正は若干あるもののスキルを上げていないのでLv1、ちいさなファイアボールならなんとか使えるレベル程度だ。

たいまつを振り回したほうがマシかもしれない、いや実際マシだろう。たいまつは殴打武器ながら炎属性がついており、対アンデッドにおいては最終手段になりうる。ちなみにアバターアイテムにいかにもな聖なるたいまつがあったがあれは飾りだった、たいまつに聖なるたいまつを見た目合成する強者もいた記憶がある。

「あなたって付与術師よね？魔法は使えないの？」

「小さなファイアボールなら使えるが実戦レベルじゃなくってなあ……スクロール召喚からエンチャぶっかけて無双してもらって自分はひたすら逃げ回るのがメインの戦術だし、よっぽど貴重な素材がないと取りに行かなかったし、そもそもお庭で生産勢だったからたいていは知り合いになんとかしてもらっていたからな……」

「ごめんよくわからない」

「戦えなくもないが、期待するほどじゃあないっていうことかな」

どつとはらい。

戦えなくもないのだ、付与術師に限らず生産系職業にも適正装備でかばんというもの

があるが、いかんせん戦闘系ジョブには劣る。この訓練では自分の戦闘技能を見たいということだから手を抜くのは無礼だろう、できる限りのさいつよ装備をしていかねばならない—— が、戦闘用はホコリをかぶって倉庫にしまつてあるのが悔しい。

となると今の手持ちで使えるものは何だろうか？ ……そこでふと思った、この世界は現実だ、ならば本来は装備不能アイテムだったものが装備できるのではないか？ わたしはいぶかしんだ。

「よし決めた、これならなんとなく戦える気がする」

「ふふつ、オルカ君の戦い方、楽しみだわ……なんせあのアーリンが言うほどだもの」

「善処するけど、本当に戦闘は得意じゃないんだ」

このオルカ、生産職である。

だがゆえに、いまできる全力を尽くさせてもらおう！

自分の準備ができたんだろうと察したメイリオが、ケイと手をタッチして入れ替わる。このちいさな修練場に吹く空気が白熱するのだ、このオルカの進む道を祝福しているかのように、この自分の覇道が今開くぞというように後押しするのである。

「それで？オルカはなんの武器を使うの？」

「フフ……理解したんだ、最強の武器には最強の理由があると」

「魔王剣はなしね」

あれはもちろん、そも適正Lvがあってもスキル適正がないのでまともに使えない。そのうえで自分に適性のあるものといったら——あれしかあるまい、最も使い慣れ、最も価値が高く、最も寝食を共にし最も壊れない……そんなものだ、自らの血汗が最も染み付きなにより「壊れない」ことこそ最強の理由だろう。

さあ、出てこいこの自分の——

「——すり鉢」

「えっ」

「すり鉢だ、こっちはマジカルステッキ」

「えっ」

驚くのも無理はない、このすり鉢、とある天下人が代々餅をこね続けたという逸話に従って『天下の流れ人』という名前だがなにより、最上級の付与用装備なのである——これを装備するだけでなんと付与可能スロット数がふたつが上昇し、成功率は三割増し、付与速度も急速に増加しなにより壊れない。彼女もできて就職も決まり大金持ちになりました、ありがとう天下の流れ人。

事実作業速度的にひたすら付与品を作ってマーケットに流せば大金持ちにはなれる

が、あれは心が壊れるのでやめたほうがいい。

もう一点のマジカルステッキはイベント品だ、もともと武器に関しては生産職の都合知力INTが上昇する以外のメリットが薄いためあまり収集していなかった自分にとつては、これがベストアンサーとなる。イベント品なので救済措置で「不壊の」がデフォルトでついているのが儲けものだ。

その気になれば自分でつけられるのだがはじめからついているに越したことはなく、かつ基礎ステータスも非常に優秀なのでそこそこの強化だけして使っていたものだ、なお「魔法序章マジカルひとは」とかいう作品とのコラボ品だそうで全体的にフリルフリフリである、作画やモデリングのコストはさぞ恐ろしかりう。

「……一応聞くけど、諦めてるわけじゃないわよね？ そんな痛くはないけど」

「無論問題ない、このオルカのさいつよ装備……はちよつと手元がないが、現時点での最適解がこれなんだ。なんならこれを壊せたらメイリオにさいつよ装備作ってあげちやう、8つくらい付与ついたらやつ」

「それは素敵ね……できればだけれど！ じゃあオルカ、なんでもいいから攻撃してちやうだい！ 受けるだけ受けてみるから」

「御意」

フフ……いいのか？ この自分に先手を譲って……泣きを見るのはそつちだぜお嬢

ちゃん。

ケイ嬢がくすくす笑っているのをよそに自分は構えを取ると、攻撃行動に移るのだ。はて、しかし攻撃スキルはどうやったたら発動するのだろうか？ 唱える？ クリックゲージに依存していた自分ではちよつとこころもとない——ならばそうか、この現実に自分を重ねることが最適解なのだろう、つまりモーシヨンだ、当時のスキルと同じモーシヨンを取ればいいのだ。

頼むぜマジカルステッキ！ くるつと回つて腰に手を当てムーンプリズム爆破！

メイリオ今笑つたな、超笑つたよな。

「ぎ、めんつ、ふふつ」

「余興だから気にしないでくれ……おや」

マジカルステッキの先端が光り、ハートがふよふよとメイリオへと向かつていく。

あらかわいい、というメイリオはそれがあまりにも遅く向かつていくためにはてさてどうしたものかという対応で、やがてそれをとりあえずは弾いてみようという結論に至つたようだ。短剣を滑らせるように飛んでいくピンクのハートにぶつけ、あ、待つて確かそれつて。

記憶がいまになつてわらわらと蘇ってくる。

あつ。

「メイリオ!？」

「やべ」

ムーンプリズム大爆発だ!!

メイリオが刃を入れた場所から突如轟音とともにピンク色の——うなれば特撮ヒーローの背中で起こっているようなタイプの爆発が起こり、一瞬にしてメイリオが爆炎に包まれる。これはやってしまっただろうか、さらばメイリオグッバイ、メイリオ。そんな不謹慎を頭に滑らせてなんとか冷静を保っているがこれはまずいのではないだろうか、ネットゲームなら戦闘不能になつて街のどつかの復活の騎士さんのところでもリスボンするだけだが、この現実で爆散したらどうなるのだろうか。

やがて爆炎が晴れ——やっぱ晴れないで、自分スプラッタはそんな得意じゃないんです。

だがはてさて、黒煙のなかに咳き込む声と人影が見えないか？目を凝らしてもはてさて？

——あつ。

「げほつ、げほつほ、げほつ！」

「メ、メイリオ!?!無事なの!?!」

「ヒエーツ……」

生きてた、メイリオが生きていた。

死地からの生還だ、無事だったことに安堵しつつしかしはて、彼女は無傷ではないか。そんな疑問を浮かべた矢先メイリオと目が合い、あつ、これはやばい、やらかしてしまつたことにちよつとだけお怒りのご様子なのだろう、つかつかと歩み寄ってくるではないか。手にはハートを切つた短剣を手に自分のハートを叩き斬るのだろうか、やあお嬢さん。

「ハアイ、メイリオ」

「はあい、オルカ。なんでもって言ったのは悪かったと思うけどただ、あのね」

つかつかと歩み寄ってくるメイリオ、歩みを止めることはない。

やめてくれ、きょうび暴力はよくない。

「もしあなるってわかつてたなら言っただけでほしかったというか、ちよつとびつくりしちゃつて今すつごい頭ガンガンになつてゐるっていうか、ほんと……死ぬかと思つたっていうか……ごめん、次あたしの番だよ」

「メイリオ嬢、冷静さとは程遠いところにいるご様子であります、ラマーズ法というものがありません」

「オルカ、ケガしたくなかったら受けなさい！」

「はひいー！」

すり鉢ガードだ！天下を流れ続けたこの逸品による防御力はすべてを超越し、いかなる攻撃でもここに染み込んだ人々の想いを消せやしないのだ。

わかりやすいくらいに最上段でふりかぶるメイリオの攻撃をすり鉢は受ける、やはり傷一つついていないだろうその防御力は万全、この世界において壊れないオブジェクトというものはそれだけで驚異的な能力を獲得できると証明された瞬間なのだ、なのだ、なのだ——。

「ぶべら」

「あっ」

——それを受けるのに、自分の膂力が加味されなければ。

受けたすり鉢がまんま押し出されて自分の頭を打ち据えるとは思うまい、事実メイリオもそこまで自分が貧弱であるとは思っていなかったようである。申し訳無さそうな顔をして、視界がぐわんぐわんするのを凄まじいこの痛みとともに耐える自分を見下ろしている。

このオルカ、STR1である。

……はて、メイリオはなぜダメージを……ああ。

「ごめん大丈夫？そこまで貧弱だと思わなくて……あつ、ごめん、腕つぶし……えーつと」
「大丈夫傷ついてない……」

——あれ、物理属性だわ。

14話—メイリオの短剣～夕暮れの写真は苦い～

たんこぶを作ったのは多分高校生とか、それくらい以来だろう。あのときはもうちよつと人生が輝いていたかもしれないし、なんとなく平凡だったかもしれない。とりあえず言えるのは頭にときたまたんこぶを作るくらいには動的な人間だったということだ。

写真部だったが。

「ごめん、ごめんなさいね？ ついその……ちよつと、ああいう大きな音にはトラウマがあつて、ね？」

「大丈夫だとも、誰しもトラウマはある……このオルカも小学校の音楽の発表会で笑われたのがトラウマになっていて……」

「はいはい、異常はなーし。大げさに連れてきたけどなんてことないわー……んじゃ、私戻るから」

「ありがとリアナ、あとで飲み物買いに行く時なにかいる？」

「チュケケパブラのエール漬けひとつ」

「チュケケ……」

メイリオに頭のこぶを冷やされながら、リリアナが言ったチュケケ……に関してまた興味を惹かれる。一体なんなのだチュケケ……チュケケ。

「よし、腫れは引いたかしら。……ほんとにごめんなさいね？オルカ」
「気にしなくていい、こちらも派手にやりすぎた」

「あれはまあ……先に言ってくれたら良かったかな……」

攻撃のテストとはいえどんなものは言っておけばよかった、確かにそうだ。このたんこぶはその罰として受け取っておこう……しかしながら、あのド派手な攻撃はまあ、二度はやるまい、やるまい。

メイリオにもう大丈夫だと言い、部屋に戻ろうとする。

まだ少し引きずっているようだが本当に大丈夫だと言うと、安心したようだ。

このオルカ、人を落ち着かせるのはそれほど得意ではない。
「もう少し器用に喋ればいいのだが……」

「オルカは不器用だからネ、わかるヨ」

「ウギーッ」

単刀直入に言われるとダイレクトヒットが当たるといふもの、事実結構苦労してきたし、人と話をするのは苦手なほうだ。テキストチャットなら素晴らしい弁舌を持つのだ

が実際の対話となるとこうもいかならない。

どもるってわけではないが、言葉がうまく出てこない。

口数が少ないというか不器用というか、まあそのとおりだ。

うぎー。

夕暮れ時ということで太陽は沈みかけており、そのころには皆も仕事を終え暇になるとともに、夕食の準備でこのギルドからも二人ほどいなくなる。いつものギデオ副長と今日はリリアナが補助を担当しているらしい、調理室で煙草吸ってないだろうか。

そうなると思えば暇ということで廃教会内をうろろろとしていたのだがはて、ところどころ掃除の行き届いているはずの廃教会内にひとつ、ちよつと汚れた感じの階段があるではないか。はてさてこちらはどこにつながっているのだろうか。

好奇心は猫をも殺すが殺され覚悟なしには歩けまい、つかつかと階段を上がるのだ。

階段は螺旋状になっているようで、しかしそれほど高さのないようですぐに自分を上
の階層へと導いてくれる。しかしああ、なるほどこれは階層というほどではない、途中
にある扉のひとつが屋根裏部屋へ通じてることから察したがどうやら教会の展望台へ
通じる階段だったらしい。

夕暮れが迫っているからもうそれほど遠くまでは見えないがしかし、この街の全貌を見るには十分なほどの景色が一望できるものであった。

あたつ。

「……勝手に入るワルイコはおしおしだヨ」

「ヒエーッ！悪気はないんだつい足が」

「悪気のある脚はこうしてやろか……」

「ヒエーッ！……店主ちゃんちゃんか」

「ちゃんちゃんは余計だヨ、まあ別に登っても悪くないけどサ」

展望台へ上り景色に感情を撫でられているとうしろからかけられた生意気声に驚きつつ、ああよかった店主ちゃんだあーよかった、とホウキで脚をぺしつと軽く叩かれる。

いつもの赤紫のベレー帽じゃなく白い頭巾をかぶっているからお掃除ついだったのだろうと思いつつ、しかしそうだ、せつかくいるなら聞いてみようよこの場所のことを彼女に聞いてみることにした。

「んまア灯りつけたりもしてたんだケド、登ってく姿が見えたからサ。おどかしてごめんネー、つてわけでようこそ展望台へ、この場所唯一の自慢で心霊スポットだヨ。

「……大丈夫なん？オルカ付与術師みたいだケドなんもないノ？」

「今異常にかかった、ここを見てくれ鳥肌が……」

「怖がりなだけじゃないのヨ……いやまあね」

店主ちゃんがあちらこちら、自分を見てくる。

フフツ、そんなに魅力的だろうか。

「なーんか魔法使えるのがここ登ると酔うらしいのよネ。オルカは付与術師のはずだけ
ド」

「レベルカンストだから低レベルな呪いの影響は受けないぞ」

「言うウ〜」

こいつめー、と腰を小突かれ、そのまま店主ちゃんは沈みかけの夕日がよく見える欄干へと移動するのだ。この世には組み合わせると美しいものがある、美女と太陽だ。あいにくと自分に美女の選別はちよつと慣れていないのでわからないが、夕日に店主ちゃんの赤い髪が照らされているのはなかなか映える。

だからはてさて、こういうときは何を言うべきかと思案していると、先に口を開いたのは店主ちゃんだった。

「それでー、慣れた？」

「ここでの生活なら、まだ」

「だよねエ、オルカのいた場所がどんなだったかは知らないケド、ウチらのトコとはだーいぶ違うんだろなーってのだけわかるもん」

そうじゃなきゃこんなにも知らないのはないよね、と。

「どこからどうとか、ここにいる連中もそうだから詮索しないけどサ」

「……ここに居るのは、個性が強いばかりに見える」

「控えめな表現にかけては詩人だね」

「ありがとう」

「どういたしました。まあそのへんは信頼勝ち取って聞いてみるといいヨ……なんならウチのことなら話してもいいケド」

「ほう」

このオルカ、アーカイブ記録に関しては大好きである。

ゲームにおけるストーリー、裏設定、NPCのエピソードに関しても結構な量を読み漁ったものだ——とはいってもこの店主ちゃんが現実の存在であることは疑いようもないが、それでも人の秘密やエピソードを聞いてみたくなるのが人間の性である。

自分に関しては……ややつまらないエピソードしかないが。

「お願いするよ、こう……親睦のために」

「手付きがいやらしい」

「ウギ……」

仕方ないじゃないやい。

「んまア、ウチの家はいわゆる貧民街、ここの区域でやってたちよつとした商店だったんだケドね」

「なるほど……じゃあ天職だったわけだ、ここは」

「ここに落ち着いたのは天職だったかもだケド、それまでがネ」
「？」

白頭巾が夕日を照り返し、ちよつとだけ目がくらむ。

それを察したのか頭巾を外していつもの姿を晒すと話を続けた。

少し重そうで、少し吹っ切れたといったようで。

そんななげなさと少し離れた話し方で。

「家を出て商業ギルドに入ったのヨ、ここの組合は大きいからいい修行になるとか、ここでその……現金だけドネを作って親を楽させよーってサ。でも現実は違ったのヨ、商業ギルドっていうかさあ……金が好きな連中が集まるとロクなことないんだなって」

「ふむ」

「結局は利己主義資本家が作り上げた産業構造のひとつでしかなくって、でつかい権限で商業流通を派手に取り仕切ること下を絞って上を太らす、そんなもんで……まアそれだけなら良かったんだけどネ」

「どこも資本家は一緒か、でもそれよりひどそうだ」

「まあね」

資本主義に共産主義に、社会主義とこちらの世界にも色々出てきたけど。

やっぱり最適解ってないのかもしれない。どこでも貧富はあるのだろうと、この街を最初に見て思ったことだ。

でもきつと店主ちゃんは今もつとこの世界のその側面を見ていたんだろうと、だから聞いてみたいと思ひ話を聞き続ける。

「自分と同期で二人いたんだけどサ……商業ギルドつていろいろ新しく入ってきた人間に“コース”を用意してるんだよね。どういった道を進むとかサ、んで自分は先輩に弟子入りしてシゴかれるほうにしたんだけどサ、友達は『店舗出店のオーナー』つて道を選ばされてサ」

「ああ……」

「よくやるもんだヨ、だまくらかして契約書書かせてオーナーなんて甘い蜜で誘っていったと思ったら実際は計画的にノルマを未達成させて契約違反させるつて奴。そしてたら契約上の罰金とか、上納金とか、いろいろ重なるわけで……使い潰して借金背負わせて、そしてたら奴隷落ち、ハイつてサ」

「……まるで中世時代だ、こちらにも奴隷が？」

「^{スレイブ}奴隷”として魔物を扱ってるトコもあるけど、人間だつて奴隷に落ちるのサ。そ

りや人を攫って〜なんてのはもちろん違法だよ？でも魔法なんて便利なものがあるからサ、犯罪者や借金者、捕虜なんかは隷属できるわけで……人権をいくら剥奪して、借金を返すまでとか刑期を終えるまでとかそういうのでサ」

「よくないな」

「商業ギルドの欲しがる物ってなんだと思う？」

「給料のいらぬ従業員」

「大当たり」

すべての資本家の夢、とどこかで聞いたことがある。

受け売りだが効果的だ、誰だっけ欲しい。

「いまじやナリを潜めたとか聞いたけど、三年でどこまで変わったもんだか……」

「三年、という店主ちゃんが本格的にここで働いてもうってことかな」

「ギルドがまだ始まってそれほどももないころだったかな、んなのばっかだったから商業ギルドを飛び出してぶらぶらして、あー家にも帰ろっかな……って思ってたところにアーリンに拾われたってことだねエ。まあ親父の昔なじみだったこともあったからサ……んまア、苦い思い出ばっかりだったけど、ここにきてからは結構いいかなって」

「うむ」

「だから気に入ってくるといいヨ、ここはいいトコ長いなーってサ」

「……ありがとう、でもそこまで包み隠さず言っても、良かったのかな。自分のことでも話す？」

話せるほどの話題があつたかはともかくとして。

「そりゃ大歓迎〜だけど、ウチの話をしたのはあれサ、ただ商業ギルドをイヤ〜つて取引禁止しても納得いかないでシヨ？なんてつたつてなんだ彼らここらじや最大級なんだしサ。もつたいぶつて話さないよりも話して納得してもらつたほうがいいかなツテ。なまじ自分の大嫌いなモノだつたらなおさらさ」

「なるほど、つまり商業ギルドには」

「いっさいがっさい関わらない方がいいのは推奨しとくヨつと、関わつたらウチの機嫌がちよつと悪くなるカモ」

「ヒエーツ……」

とはいえ、自分から積極的に悪いものに関わりに行く理由もないだろう。

店主ちゃんの話はためになるなあ、とともに、そういった悪意にも、やがて慣れていかねばならないのだとほんのりと、心で思う。どこにいたつてやつかみから逃れることはできない、だいたい最初にここで出会つた人間ですらあれで——— 　　そういえば彼ら、あれから大丈夫だろうか？ そのうち見に行こう。

「んじゃ、ウチのことは話したしオルカのことでも話してもらおうかな」

「面白い話ができないことを最初に宣言しておきます」

「つまらない話だったらウチが面白くしてみんなに伝えといてあげル」

「ヒエーッ……」

あうん、下手な話はできないなこれは。

といいつつ、はてさて自分が何か話ができるといったら何があるだろうか。

現実における話に関してはどううむ、どうやって伝えればいいだろう。故郷の話？実は伝説の場所から来た？遠いところから？ううむ、どれもどうやって来たとかいろいろと矛盾が発生する……このオルカ、話下手である。

そうなるとネットゲだろうか、そういうえば今までもネットゲ関係は問題なく話していたなと思いつつ、さてはてではここからどういう話を振るかといった話を考える。そういえばこのあたりの地理どころか、ここがどんな国家かすらまともには知っていなかった、その話をついでに振るのもいいだろう。

「じゃあ——」

自分の話をしよう。

そう言いかけた言葉だった、それが何か大きな、つんざくような鐘の音に潰された。カンカンカンカンと、街の外壁上の物見櫓が音の発信源だった。

「……？」

「あつちやア〜……」

「大丈夫だ、当ててみよう、あれは——」

「緊急警報！ ……あー、あー……！」

店主ちゃんがとたんに焦りだし、ホウキをそのへんにほつぽりだすと展望台から身を乗り出して外を見る。外というのも外壁の外で、街の端にあるこの廃教会は街の衛兵が用意してる物見櫓かそれ以上には背が高いので外が簡単に見えるのだ。

はて、肉眼では遠いな、それにもう日が暮れる……ここはふむむ。

インベントリから出すはなんてことないアイテム、双眼鏡である。

「店主ちゃん使う？」

「ありがと！ ……えーつと」

「こう、こんな感じ」

望遠鏡しかない世界なのだろうか、ぱつとみ使いみちに戸惑ったのだろうか、でもジェスチャーで使い方を投げかけるとすぐに使いこなし、遠方を見る—— ああ、見えてきた。肉眼の自分にすら見えてきたものがあつた。

群れだ。

「——トロール」

「自分にも見える、あれは10や20じゃない」

「街にこんな数が……ッ」

「うむむ……」

はてさて、どうしてこのタイミングでこうも間の悪い来客が山程来るのだろうか。

いかんせんうぎぎとなりつつも、この自分が戦闘には不向きというのは心に刻んでい

る。
フードちゃんには特効のある装備を渡してあるが、とてもじゃないが足りないだろ

う。
戦いは数とはよく言ったもので、それがリジエネ持ちとなると厄介以外のものではないのである。

そうしているとタタタツ、と駆けてくる音が聞こえた。

「チャーニー！オルカ！」

「メイリオか」

「二人は避難の準備して！あんなのこの街じゃ防ぎきれない！」

メイリオが切羽詰まった声で叫び、頼むわね、とだけ最後に残し階段を下っていく。

見れば街のほうも慌ただしくなっているようで、避難をするのだろう、家財道具や風呂敷包みを持った人々が次から次へと夕暮れ時の家からひっきりなしに飛び出していた。

「……この街の兵力じゃ止められないのか？」

「トロールは金等級の冒険者や狩人が仕留める生き物だよ、この街には……えーつと確か6人しかいなかったはず……とてもじゃないけどあの数は」

「そうか……うむむ」

戦闘職でない自分にはトロールのまとめ狩りは正直なところ無理だ。

自分にできるのは“誰かの背中を押す”、それだけ。

付与術師はいっだって、誰かが戦ってくれるからこそ成り立つのだ。

「——この人たちは戦うだろうか」

「アーリンもギデオンも、メイリオも、みんなそうする」

「そうか……わかった」
なるほどな。

自分がここに来た意味というものはまだわからない。

だが降りかかる火の粉も直面する危機も、無視しろというお達しは受けた覚えもないだろう。

このオルカ、無謀さは少々好きである。

「オルカ、そっちは」

「こっちのが早い」

ふと下を見れば、皆が正門前に向かって出撃の準備をし走っていた。

自分たちとその街を護るための戦いに赴くつもりなのだろう。

自分は展望台から飛び降り、屋根を滑ってそのまま飛び降りるのだ。颯爽とした登場、そして時間の短縮、このオルカは戦闘職の皆に比べると足も遅いしなによりSPが足りず息切れしやすいので、こうするのが最適解である。

どしん、と飛び降り、うつむいた顔は夕日の暮れに従って暗闇に落ちる。

そして—— 微動だにしない。

さすがに見かねたのか、店主ちゃんが上から声をかけてきた。

「オ、オルカあ!？」

「フフ……」

フフ……我ら高レベル者の最大の敵がこんなところにあるなんてな…世界が“現実”になったことをすっかり忘れていた。そうだ、これは我らを大きく害する刃でそして覚悟を崩す必殺の一撃、そう、これは——。

「落下ダメージ痛い……」

ごめんしばらく動けそうにない。